



TITLE:

元史刑法志譯注稿(一)

AUTHOR(S):

「中國近世の法制と社會」研究班

CITATION:

「中國近世の法制と社會」研究班. 元史刑法志譯注稿(一). 東方學報
1995, 67: 409-532

ISSUE DATE:

1995-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66759>

RIGHT:

元史刑法志譯注稿（一）

弁言

『元史』は卷一〇二から一〇五、すなわち「志」の五〇から四卷にわたる「刑法志」を持つ。すでに『宋史』の「刑法志」譯注稿のはじめで述べた通り、歴代正史のうちに收められた十二の「刑法志」あるいは「刑罰志」と『元史』のそれは、外觀、内容とも著しく異っている。他の正史の「刑法志」が、にも角、編纂者の手によって、一つの形にはまった、若しくははめようとする方向で整理されてきたきあがっているのに對して、この「刑法志」は當時の法典のそのままの羅列に終始している。その意味では、かつて小竹文夫氏が指摘されたように「正史の書法としては體を成さぬ」代物である。それは、以下の譯注を御覽いただき、他の時代の「刑法志」と比較してもらえれば一目瞭然だろう。そこでは舊中國における成文法の定形である「諸の」という書き出しで始まる、合計一一〇〇條餘りの、

「中國近世の法制と社會」研究班

法規、條文が、「名例」を先頭に、「平反」に終る二十の項目に分類させられている。この二十項目は、唐律の十二の分目に當然もとづきはするにせよ、その構成や特にそれらを支える精神に著しい相違が見られる。

『元史』刑法志の成立とその性格については、『通制條格』として一部が現存する『大元通制』をもとに、文宗至順二年（一三三一）編纂された『經世大典』の「憲典」にもとづくものと考えられている。それに關しては、安部健夫「元史刑法志と『元律』との關係について」（『東方學報』京都二、一九三二）、小竹文夫「元史刑法志について」（岡本敬二「元史刑法志の系譜——學規篇を中心として」）（いずれも『元史刑法志の研究譯注』（教育書籍、一九六一、所收）を参照していただきたい。

ところで、研究班の有志で輪讀したこの毛色の變った『元史』刑法志を、どのように譯注にまとめるかについて、我々は若干の議論

をした。すでに上記『元史刑法志の研究譯注』が存在する以上、屋上屋を重ねるの愚はやめるべきだという意見も出された。先のそれが訓讀體だったから、今度は他の刑法志と同様に現代語譯にしてはとの聲もあった。前者について言えば、『研究譯注』には教えられるところ少くないが、反面、疑問點や、やや不適當な部分も間々見受けられることも否定できない。また、それとは別に、この元史刑法志千百條を横に通觀する立場、それに加えて、唐代から明代までの縦の法史の流れにこれを置いて、綜合的立場から解析してゆけば、そこから何か、これまでなかった發見が出てくるのではないかという誘惑を我々は棄てきれなかった。このため、刑法志の各條文と前後の時代の「律令」とのかかわりを注意しようと心掛けた。次に同じ元代でも、たとえば『元典章』とこの刑法志がどのような位相關係にあるかをいま一度自分たちの眼で確かめようと試みた。それによつて、『元典章』には決して出て來ない條文が、刑法志に多くあることも、當然乍らより明らかにできたと思う。別の言葉で申せば、この刑法志の一條一條を通し、觀念上の操作でなく、我々は元朝の「法制」ひいてはそれを通した彼らの「中國世界」に對する姿勢、そして同時にそれと逆の立場にいる漢民族の對應をじかに感じとうろとつとめたわけである。

後者、つまり譯注の形式について申せば、文言で書かれた舊中國の法文を現代語に譯する場合は、とくに現代の法律用語とのからみ

で、どうしても不必要な誤解や誤まりを派生させやすい。そこで我々も、前『譯注』を踏襲し、その代り『譯注日本律令』の精神に倣つて、できる限り【解説】を加えた。これは内容的には甚だ貧しいが、該當條文から我々が何を汲みとろうとしているかを理解していただければ幸甚である。なお、各條文の番號は、すべて比較参照の便宜のため『元史刑法志の研究譯注』のそれと同一にしてある。本號には『元史』刑法志の譯注（一）として、刑法一と刑法二のなかばまで、すなわち、名例、衛禁、職制（上・下）、祭令と學規を掲載する。『元史』の刑法志は、やや特殊な分野に足をふみ入れる部分が多かつたため、譯注者は輪讀メンバーの中の三人にしばつた。とりわけ徳永洋介氏には、多くの面で特に御盡力をいただいたことを謝意とともに附記しておく。

（梅原 郁）

刑 法 一

上古から、天下に君臨する者ならば、いかに優れた天子であろうと、刑法なくして、まつりごとではできなかった。だからこそ、いくら徳義によつて教導しても、民が心服しないときは、必ず法度によつて規律するが、その法度にも違犯すれば、刑罰を適用するといふのも、本當にやむをえないところである。こうしたわけで、古の

聖王が刑を定めたのは、威壓のためではなく、實は政道の補助のためにはかならない。このため『書經』に「士があまたの人々を中正な刑罰で斷罪して、徳を愼み行うことを教える」と言っているのである。後世のものが、刑罰ばかりに頼り、何事も法律まかせでまつりごとを進めるのは、ことの本来・輕重の理に暗いというものではないだろうか。歴代の得失は、史書の中で照らし考えて明らかにできるだけである。

元が興起したばかりのときは、いまだ守るべき法がなく、すべての官廳では事案を裁くために、金の律をそのまま用いたので、いささか嚴酷に過ぎるものとなった。世祖が宋を平定して天下を統一してからは、繁雜な條項は簡便に改め、苛酷な規定は削除して、初めて新律を制定し、これを各官廳に頒行した。これを『至元新格』と呼ぶ。仁宗の時には、さらに格例・條畫のうち風紀に關わるものを、分類して一書にまとめ、『風憲宏綱』と呼んだ。英宗の時代になると、再び大臣や儒臣たちに命じて、これまでの各書をもとに整理・加筆を行い、完成した書物は、『大元通制』と命名された。この書の大綱は三つあり、第一に詔制、第二に條格、第三に斷例という。全體で、詔制は九四條、條格は一一五一條、斷例は七二七條となっているが、概して世祖以來の法制・事例を編纂・集成したに過ぎない。五刑の中味についていえば、七下から五十七下までは笞刑、六十七下から一百七下までは杖刑となる。徒刑は、年限と杖數とが互

いに對應する形で加減されており、私鹽や盜罪を犯した者には、杖刑を執行してから鑕を施す。流刑では、南人は遼陽・迤北に遷徙し、北人は南方の湖南へ遷徙した。死刑には、斬があつて絞はない。惡逆の極みを働いた輩のために別に陵遲處死の法が設けられていた。

(1) 『書經』呂刑。士制百姓于刑之中、以教祗徳。

(2) 『新定律令敕條格式』五十三卷のこと。通稱『泰和律』。至元八年(一二七一)、世祖が元と國號を改め、遵用を禁止されるまで効力を持ち續けた。宮崎市定「宋元時代の法制と裁判機構」

元典章成立の時代的・社會的背景」『東方學報』京都・二四、一九五四(のち『アジア史研究』第四、同朋舎、一九五七所收、以下宮崎「法制」と略稱、引用は本書の頁數に従う) 一二七、一三四頁、「舊五代史・遼史・金史刑法志譯注稿」『東方學報』京都・六六、一九九四、五二六、五二八頁)などを參看。

(3) 世祖。元朝第一代の皇帝(在位一二六〇～一二九四)。名は忽必烈。薛禪汗ともいう。

(4) 『至元新格』。何榮祖らの編纂に係る。至元二八年(一二九二)の頒行で、元朝獨自の法典としては最も古いもの。現在、完本としては傳わらない。その佚文を蒐め復元を試みたものに、安部健夫「大元通制解説」『東方學報』京都・一、一九三一(のち『元代史の研究』創文社、一九七二所收) 三二三～三二五頁の注15、及び植松正「彙輯『至元新格』並びに解説」『東洋史研究』

三〇四、一九七二（以下「彙輯」と略稱）がある。

(5) 仁宗。元朝第四代の皇帝（在位一三二一～一三三〇）。名は愛育黎拔力八達。普顏篤汗と號す。

(6) 格例・條畫。元朝において發令された單行法令の呼稱。植松正「元代條畫考（一）」『香川大學教育學部研究報告』第一部・四五、一九七八も參照。

(7) 『風憲宏綱』。趙世延をはじめ、御史臺官を中心に編纂された。『石田先生文集』卷九、及び『國朝文類』卷三六に、馬祖常の「風憲宏綱序」を残すほかは、今は佚して傳わらない。後日、本書の續篇を意圖して纂修されたのが『憲臺通紀』（『永樂大典』卷二六〇八所收）である。

(8) 英宗。元朝第五代の皇帝（在位一三二一～一三三三）。名は碩德八剌。格堅汗と呼ばれる。

(9) 『大元通制』。李朮魯朮らが纂修し、至治三年（一三二三）に頒行された。もとは四十冊から五十冊に分かれ、八十八卷はあったという。『元史』卷二八、英宗紀二、至治三年二月辛巳。格例成定、凡二千五百三十九條、内斷例七百一十七、條格千一百五十一、詔敕九十四、令類五百七十七、名曰大元通制、頒行天下。

(10) 原文「大綱有三」。正確には、詔制（詔敕・制詔）・條格・斷例に別類（令類）を加えた四つの大綱からなる。『通制條格』は、

本書の「條格」部分の殘部二十二卷にあたる。

(11) 條格・斷例。「條格は令の體裁を備えて而も令的法規以外に格式的法規を含む一種の行政法典であり、斷例は律の體裁において律的法規と判決例とを其の内容とする一種の刑法典であった」（安部健夫「大元通制解説」前掲著書、二八九頁）。條格の篇目は、金の「泰和令」の體例を踏襲したもので、唐令の系統に連なる。

(12) 『元史』卷二八、英宗紀二、至治二年十一月丙午。御史李端言、朝廷雖設起居注、所錄皆臣下聞奏事目。上之言動、宜悉書之、以付史館。世祖以來所定制度、宜著爲令、使吏不得爲奸、治獄者有所遵守。並從之。

(13) 錄は、あしかせの一種。連錄、重三斤との規定があった。『史學指南』に、「遼制、有鎖無錄。金章宗始定錄連錄三斤」と見える。三四〇條を參看。

(14) 『國朝文類』卷四二に收める『經世大典』憲典總序・名例編、及び陶宗儀『南村輟耕錄』卷二、五刑の記述と殆ど一致する。陳元靚『事林廣記』別集卷三、刑法類に残る『大元通制』佚文とは、むしろ食い違いが目にとまる。

古くは墨・劓・剕・宮・大辟が五刑とされたものだが、後世では肉刑をやめ、笞・杖・徒・流・死で五刑となるよう整えられた。^①元

朝もこれを踏襲し、そのうえ寛大な法規を採用したのは、やはりその仁政なればこそといえよう。世祖は宰臣にこう仰せられた。^③「朕がもし怒りに驅られて、そちたちに罪人を殺させようとしても、そのまま殺してはならぬ、必ず一兩日を経てから再び言上して沙汰を仰ぐのだぞ」。^④かかるみ言葉は、古の仁君たりとて、これにまさることはあるまい。それからというものの、後を繼いだ君主たちは専ら刑の適用に慎重を期し、各地の疑獄には、必ず官員を派遣して審理を行い、判決を軽くさせ、死罪の案件では、詮議の結果、^⑤罪狀に疑いのない者であっても、その確認報告がなければ決して刑を執行しなかった。^⑥大徳年間（一二九七〜一三〇七）、王約がまた上言した。「^⑦國朝の制度では、笞杖刑の十は七に輕減されております。現在の杖一百は九十七に止めておくべきで、さらに十を付加してはなりません」。^⑧これは、君臣間に専ら寛大な法典を尊重すべきだとの認識があったからで、百年の泰平も、やはり偶然のしわざであらうはずはないのである。

さりながら、その弊害を言えば、南と北で制度が異なり、多くの事件が繁瑣にわたり、胥吏たちは私情に任せて法文を弄び、有罪無罪の判定や法文解釋では、詭計をめぐらしては私利を追求し、凶惡で頑強な無法者たちが、たびたび恩赦でゆるされた。ラマ僧などは、毎年、佛事をかまえ、意のままに囚人を赦免させては惡人どもに恩を賣ったので、善良な人々はじっと口をつぐんで恨みをこらえ、見

識ある人々を苦い思いにさせたのである。そうだとすれば、元代の刑法において、長所は天子が情け深くて心暖かったことにあり、短所は締めまりがなく、一定の基準というものを持たなかったところにある。今、事實に基づき、順を追って書き列べ、後世、その得失を考究してもらうがとして、刑法志を作る。

- (1) 上代には、身體を毀傷する肉刑が主な刑種であった。五刑という言葉も、『書經』呂刑では、墨（黥。いれずみ）・劓（はなぎり）・剕（刑。あしきり）・宮（男子は去勢、女子は幽閉）・大辟（死刑）を意味した。漢の文帝は、前一六七年に肉刑を廢止し、強制勞働刑に轉換させたが、隋唐律の五刑、即ち笞・杖・徒・流・死とは、五という數字を古典から採り、これに實質の異なる後世の刑種をあてはめたものである（滋賀秀三「刑罰の歴史―東洋―」『刑罰の理論と實踐』岩波書店、一九七二）。
- (2) 原文「輕典」。『周禮』秋官、大司寇。掌建邦之三典、以佐王刑邦國、詰四方、一曰刑新國用輕典、二曰刑平國用中典、三曰刑亂國用重典。
- (3) 『元史』卷五、世祖紀一、中統三年十一月乙巳。有旨諭史天澤、朕或乘怒欲有所誅殺、卿等宜遲留一二日、覆奏行之。なお三〇三條も参照。
- (4) 原文「覆讞」。罪の疑わしい者について、天子の裁斷を仰ぐため、重ねて上奏すること。覆奏請讞。

(5) 原文「審録」。罪囚の情狀・冤滯を省録する意味。慮囚、録囚と同じ。

(6) 葉子奇『草木子』卷三下、雜制篇。天下死囚、審讞已定、亦不加刑、皆老死於囹圄。自後惟秦王伯顔、出天下囚、始一加刑、故七八十年之中、老稚不曾觀斬戮、及見一死人頭、輒相驚駭、可謂勝殘去殺、黎元在海涵春育之中矣。

(7) 王約(一二五—一三三)。あざなは彦博、眞定(現河北省石家莊市付近)の人。傳は『元史』卷一七八にある。

(8) 前段注14の『經世大典』憲典總序・名例編、及び『南村輟耕錄』卷二、五刑にも同文が見える。

(9) 彼ら西僧については、『元史』卷二二、成宗紀四、大德七年夏四月庚午に、「中書左丞相答剌罕言、僧人修佛事畢、必釋重囚。有殺人及妻殺夫者、皆指名釋之。生者苟免、死者負冤、於福何有。帝嘉納之」とある。

名例

五刑¹

一 笞刑² 七下³ 十七 二十七 三十七 四十七 五十七
二 杖刑 六十七 七十七 八十七 九十七 一百七

三 徒刑⁴ 一年 杖六十七 一年半 杖七十七 二年 杖八十七 二年半

四 流刑⁵ 遼陽 湖廣 迤北⁶ 杖九十七 三年 杖二百七

五 死刑 斬 陵遲處死⁷

(1) こども既出14の記事と對應。『元典章』卷三九、刑部一、刑法の五刑之制もほぼ一致するが、流刑については、『唐律』と同じく、流三千里・流二千五百里・流二千里を擧げるに過ぎない。『事林廣記』に收める『大元通制』佚文は、この點でも變わらず、死刑には斬と並んで絞を擧げるのみで、陵遲處死の記載はない。

(2) 笞杖刑に用いる笞杖・杖杖については、三四一條はじめ、『元典章』卷四〇、刑部一、獄具の冒頭、及び『大元通制』佚文の五刑に詳しいが、實際には杖數によって格差をつけていたに過ぎない。『元史』卷二八、成宗紀一、至元三十一年六月辛丑。御史臺臣言、先朝決獄、隨罪輕重、笞杖異施。今止用杖。乞如舊制。不允。

(3) 元代杖刑が常に七の端數を伴うことは、その著しい特徴であり、宮崎「法制」二八九—二九〇頁の注6に考證がある。『草木子』卷三下、雜制篇は「元世祖定天下之制、笞・杖・徒・流・絞五等。笞・杖罪既定、曰天饒他一下、地饒他一下、我饒他一下。自是合笞五十、止笞四十七、合杖一百十、止杖一百七」と

の説を傳える。

- (4) 徒刑では、『元典章』卷三十九、刑部一、刑法、五刑之制の加徒減杖新例にも見えるように、所定の杖數を加えてのち、配所の金銀銅鐵冶・屯田・堤岸・橋道に身柄を送り、鋸をはめて強制勞働をさせた(『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例)。

- (5) 流刑は、通常「流遠」「遷徙」と呼ばれる。『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、流遠出軍地面に「漢兒・蠻子人、申解遼陽省、發付大帖木兒出軍。色目・高麗人、申解湖廣省、發付劉二拔都出軍」とあって、漢人・南人は遼陽行省へ、色目人・高麗人は湖廣行省へ流す。同時に、「出軍」とも斷る通り、この刑種では邊境の軍隊へ編入するのが實體だった。

- (6) 流遠では、最も重い者が奴兒干(現在の露領の黑龍江河口部付近)、やや輕いと肇州(現黑龍江省肇州縣)に配流される。二者はいずれも遼陽行省に屬するから、迤北とは、遼陽の北側と考へうるが、『元史』には愍答孫に流す例もあり、廣く漠北も含みうる(『元典章』新集刑部、刑法、發付流囚輕重地面、『元史』卷二六、仁宗紀三、延祐六年秋七月甲戌)。

- (7) 陵(凌)遲處死。單に陵遲ともいう。罪人の身體を順次毀傷し、徐々に死に至らせる極刑。『元典章』卷四〇、刑部二、諸惡の項には、若干の實例を検出できる。仁井田陞「凌遲處死につ

いて『中國法制史研究・刑法』東京大學出版會、一九五九は、この刑罰を扱った專論である。

【解説】元朝の流刑は、明代の充軍に繋がる刑種である。一方、死刑は、法定刑たる斬と陵遲處死とから成るが、執行刑としての一般性には、些か疑問が残る。『元史』刑法志や『元典章』では、むしろ「處死」とのみ記されることが殆どであって、モンゴル文直譯體に散見する「敲」(たたき殺せ)の語が「處死」と同義で用いられる例もまま見受けられる。つまり、元代に於いては、唐宋時代の杖殺に相當する「處死」が行われていた可能性も否定しきれないわけである。

五服^①

- 六 斬衰^② 三年。子が父の爲にし、婦が夫の父の爲にするの類。
七 齊衰^③ 三年。杖期。期。五月。三月。子が母の爲にするの類。
八 大功 長殤九月。中殤七月。同堂兄弟の爲にし、姑・姉妹の人に適^④ぎし者の爲にするの類。
九 小功 五月。殤。伯・叔・祖父母の爲にするの類。^⑤
一〇 緦麻^⑥ 三月。殤。族兄弟の爲にし、族曾祖父母の爲にするの類。

- (1) 『元典章』卷三〇、禮部三、喪禮、五服之圖、及び『永樂大典』卷七八三五に引く『大德典章』の新降本族五服之圖などと關係

する。五服とは、喪服の種類や服喪の期間に應じて區別された五つの等級のこと。中國において、禮の定める喪服制度は、親族關係の親疎を測る尺度として機能しており、この服制の上に立って、それぞれの法律効果が定められていた（滋賀秀三『譯注日本律令』五、唐律疏議譯註篇一、一九七九—以下『譯註』五と畧稱—二二—一七頁、同『中國家族法の原理』創文社、一九六七、一九—二七頁）。

(2) 斬衰。父及び夫に對する喪。前後二十七箇月、足かけ三年服喪する。

(3) 齊衰。三年・五月・三月とは、直系尊屬に對する喪。杖期は妻、不杖期（單に期という）は本族のうち父を同じくする者を用いて、期として一周年の喪に服する間柄を期親という。

(4) 大功。本族の間で祖父を同じくする者。死亡年齢が十九歳から十六歳までは長殤、十五歳から十二歳までは中殤、また十一歳から八歳までは下殤、八才未滿は無服の殤という。『元典章』卷三〇、禮部三、喪禮の三殤服から判斷して、恐らく下殤が誤脱したものと見られる。

(5) 小功。本族の曾祖父を同じくする者、並びに外姻の外祖父・父母、舅姨（母方のおじおば）のこと。殤とは、叔父・嫡孫・昆弟の下殤のために行う五月の喪。

(6) 緦麻。本族では高祖を同じくする者、外姻なら妻の父母、内

兄弟姉妹、從母兄弟姉妹、壻、外孫にあたる。

【解説】唐禮にあって唐令には存しなかった五服制度が法典として令條に記載されるのは、金の『泰和令』からである。元朝では『大元通制』で始めて明文化されたが、『明令』禮令・喪服等差（五〇）との關係も深く、こうした變化の流れをはっきりと映しだしている。

十惡

一一 謀反 社稷を危うくせんと謀るを謂う。

一二 謀大逆 宗廟・山陵及び宮闕を毀たんと謀るを謂う。

一三 謀叛 國に背き偽に従わんと謀るを謂う。

一四 惡逆 祖父母・父母を殴り及び殺さんと謀り、伯叔父母・姑・兄弟・外祖父母・夫・夫の祖父母・父母を殺す者を謂う。

一五 不道 一家にて死罪に非ざる三人を殺し、及び人を支解し、蠱毒を造畜し、厭魅するを謂う。

一六 大不敬 大祀神御の物、乘輿服御の物を盗み、御寶を盗み及び偽造し、御藥を合和して誤って本方の如くならず、及び封題を誤り、若しくは御膳を造りて誤って食禁を犯し、御幸の舟誤って牢固ならず、乘輿を指

斥して情理切害、及び制使に對捍して人臣の禮なきを謂う。

一七 不孝

祖父母父母を告言・詛・冒し、及び祖父母父母在して別籍・異財し、若しくは供養闕くるあり、父母の喪に居て身自ら嫁娶し、若しくは樂を作し、服を釋いて吉に従い、祖父母父母の喪を聞きて匿して哀を擧げず、祖父母父母の死を詐稱するを謂う。

一八 不睦

總麻以上の親を殺さんと謀り及び賣り、夫及び大功以上の尊長・小功の尊屬を毆・告するを謂う。

一九 不義

本屬の府主・刺史・縣令、見に業を受くる師を殺し、吏卒にして本部の五品以上の官長を殺し、及び夫の喪を聞いて匿して哀を擧げず、若しくは樂を作し、服を釋いて吉に従い、及び改嫁する者を謂う。小功以上の親・父祖の妾を姦し、及び與に和する者を謂う。

二〇 内亂

【解説】 十惡の各條は、『唐律』名例六の全くの引き寫しであり、訓讀は『譯註』五（三三〜五九頁）に従った。『元典章』では、「十惡」と言わず「諸惡」としており、不孝、不睦、謀反、大逆、謀叛、惡逆、不義、内亂、不道、大不敬と、十惡の配列も異なっている。本刑法志では、こうした犯罪は第三卷の「大惡」に含まれる。

八 議

二二 議親

皇帝の袒免以上の親、及び太皇太后・皇太后の總麻以上の親、皇后の小功以上の親を謂う。

二三 議故

故舊を謂う。

二四 議賢

大德行のあるを謂う。

二五 議能

大才業あるを謂う。

二六 議功

大功勲あるを謂う。

二七 議貴

職事官三品以上、散官二品以上、及び爵一品の者を謂う。

二八 議勤

大勤勞ある者を謂う。

二九 議實

先代の後を承け、國寶と爲る者を謂う。

【解説】 八議の各條も、『唐律』名例の引き寫しである。詳細は『譯註』五、六三〜六七頁を参照。

贖 刑 附

二九 諸て、牧民官の公罪の輕き者は、罰贖を許す。

(1) 『元典章』卷三九、刑部一、贖制、民官公罪許罰贖に同文がある。

(2) 牧民官。路・散府・州・司・縣で民政を掌る親民官。管民官

の謂だが、注1の『元典章』でも牧民官と表記される。

- (3) 公罪。公務上の手落ちに起因する犯罪であって、故意のないもの。「失」あるいは「不覺」と表現するものは、この範疇ではば捉えられる（『譯註』五、一〇六頁）。

- (4) 罰贖。贖とは刑罰の重さに應じて所定の財貨を提供させ、實刑の執行に代える制度（『譯註』五、二九頁）。元朝では、中統鈔・至元鈔・至大銀鈔などの鈔立てで贖罪する原則だった。『明律國字解』は「罰贖は、一考の内に罪を犯して贖を出たることなり」と説明する。

【解説】 官吏の犯罪のうち、軽度の公罪を対象とする贖罪條項。『明令』刑令・守令罰贖（二〇五）も内容は同じで、公罪の答四十以下は贖銅と定めるが、『明律』名例・文武官犯公罪（七）では、答五十以下と改める。なお『明令』刑令・職官犯罪（九六）によれば、杖九十以下は、標附過名で済ます定まりだった。

- 三〇 諸て、職官、夜を犯す者^②は、贖す。

- (1) 『元典章』卷五七、刑部一三、諸禁、禁夜に詳細な關係記事がある。

- (2) 犯夜。夜間の往來禁止を侵すこと。注1の記事には「其夜禁之法、一更三點、鐘聲絕、禁人行、五更三點、鐘聲動、聽人行（有公事急速及喪病・產育之類、不在此限）」とある。『唐律』雜

律一八、犯夜、及び『明律』兵律・軍政・夜禁（二四〇）と關連する。

- 三一 諸て、年老七十以上、年幼十五以下、杖責に任えざる者は、贖す。

- (1) 『元典章』卷三九、刑部一、贖制、老疾贖罪鈔數に同文がある。

- 三二 諸て、罪人、癡篤殘疾ありて、科決に妨げある者は、贖す。

- (1) 前注1と同様、老疾贖罪鈔數に同文がある。

- (2) 癡篤殘疾。不具疾患者のこと。前掲『元典章』は、「篤廢疾病」「篤廢殘病」とする。個々の概念は、『唐律』名例二・老小廢疾の疏議に詳しい。

【解説】 三一條・三二條は、老小不具者に對する刑事責任の免除または輕減を規定する。この原則は、『唐律』名例三〇・老小廢疾、及び『明律』名例・老小廢疾收贖（二二）と全く變わらない。元朝では、答一下につき中統鈔一貫で收贖する定まりであった。『譯註』五、一七四～一八一頁も參看。

衛 禁

- 三三 諸て、宿衛を掌るは、三日に一たび直を更え、四門の鑰を掌

り、昏に閉じ晨に啓き、敢えて慎まざるなかれ。

- (1) 宿衛。元朝における宿衛とは、怯薛 (keshik) の漢譯で、本來はトルコ語の「當番」、モンゴル語の「恩寵」を意味する。モンゴル時代には天子の禁衛軍たる「四怯薛」の總稱であった。晝夜を問わず、天子の身邊警護から日常生活全般に渉る業務を三日ごとの輪番交替で擔當した。また怯薛の兵士は、接尾語の「tai」(……を有する者) を付けて怯薛歹 (keshik-tai、恩寵を有する者) と呼ばれ、宿衛及び箭筒士・待衛の三隊に分かれ夜間及び日中の勤務に従事した。箭内互の「元朝怯薛考」「東洋學報」六三、一九一六(のち『蒙古史研究』刀江書院、一九三〇所收) は、代表的な專論である。

- (2) 三日一更直。『元史』卷九九、兵二、宿衛。凡宿衛、每三日而一更。申・酉・戌日、博爾忽領之、爲第一怯薛。即也可怯薛。……亥・子・丑日、博爾朮領之、爲第二怯薛。寅・卯・辰日、木華黎領之、爲第三怯薛。巳・午・未日、赤老溫領之、爲第四怯薛。『刑法志譯注』は「三日一更、直ら四門の……」と讀むが、不適切と思われる。

- (3) 四門。皇城内の宮城(内裏)の東西南北に設けられた東華門・西華門・崇大門・厚載門をさすのであろう。陳高華『元の大都』(佐竹靖彦譯) 中公新書、一九八四、八二、九三頁參照。なお『元史』卷九〇、百官六、大都城門尉には「秩正六品。尉

二員、副尉一員。掌門禁啓閉管鑰之事。至元二十年置、以四怯薛八刺哈赤爲之」とあって、同書卷九十九、兵二、宿衛の「司闢者、曰八刺哈赤」と對應している。

【解説】以下の各條は、皇城・宮城内及び大都・上都城内の治安・警備に關わる事柄であり、『唐律』の衛禁、及び『明律』の兵律・宮衛に關連の條項がある。また、本刑法志の編目構成は、『唐律』と同じく「名例」の次に「衛禁」「職制」と並ぶが、『明律』では構成が全く異なり、「名例」以下、吏・戸・禮・兵・刑・工の順と變り、「宮衛」は「兵律」の一部に含まれている。宿衛の概念については、『唐律』衛禁五・宿衛冒名相代、『明律』兵律・宿衛守衛人私自代替(二〇四)にも一通りの説明がある。

三四 諸て、事を言わんと欲するの人、宮殿に闌入し、呼びて上聞を冀わば、杖一百七、元籍に發す。

- (1) 本條と完全に對應してはいないが、次の記事が關連する。『元史』卷一三、世祖紀一〇、至元二十一年正月丁巳。敕自今凡奏事者、必先語同列以所奏。既奏、其所奉旨云何、令同列知而後書之簿。同書卷二六、仁宗紀三、延祐四年十一月壬辰。諭、諸宿衛入直、各居其次、非有旨不得上殿、闌入禁中者坐罪。大臣許從二人、他官一人。門者譏其出入。

- (2) 宮殿。『唐律』に従えば、宮門・宮城門・殿門といった宮城の

各門をいう。

(3) 闖入。『元史』卷一六〇、王磐傳。磐上疏曰、按舊制、天子宫門、不應入而入者、謂之闖入。闖入之罪、由第一門至第三門、輕重有差。宜令宣徽院、籍兩省而下百官姓名、各依班序、聽通事舍人傳呼贊引然後進。其越次者、殿中司糾察定罰、不應入而入者、準闖入罪、庶朝廷之禮、漸可整肅。於是儀制始定。闖入の概念については、『譯註』六、一七二〇頁にも詳しい。

(4) 發還元籍の謂で、本籍に送りつけ、民戸として戸籍に登録すること。『明律國字解』は、「發還元籍とは、原籍は元籍ともかく、故郷のことなり。故郷にては戸籍と云うものありて、其一郷一里の人をば皆其内にしるしをきて、其所の守護より支配するなり。戸籍は、や別帳なり。發は發遣なり、還はかへすなり。故郷へ發還してもとのや別帳に編入れて民にする、と云うことなり」と解説する。

【解説】『唐律』衛禁三・闖入宮殿門及上閣、及び『明律』兵律・宮衛・宮殿門擅入(二〇三)は、闖入罪に關わる條項ではあるが、刑法志の言う「欲言事人」のような特定のケースを想定したものではない。

三五 諸て、擅に刀を帶び、殿庭に闖入する者は、杖八十七、遠きに流す。

【解説】『唐律』衛禁三・闖入宮殿門及上閣、及び衛禁一六・向宮殿射に、宿衛に屬さぬ者が武器を帶びて宮城門内に入った場合と、宿衛の人が御在所で刀を抜いた場合についての規定がある。『明律』では兵律・宮衛の輒出入宮殿門(二〇九)及び關防内使出入(二二〇)と關係する。

三六 諸て、皇城の角樓に登り、因りて盜を爲す者は、死に處す。
【解説】『唐律』衛禁九・登高臨宮中が參考となるが、「盜」に關する規定はない。

三七 諸て、禁衛に闖入し金玉の寶器^①を盜む者は、死に處す。

(1) 寶器。寶は、天子の印璽。御寶。器は、律に定める乘輿服御物に含めてよからう。『唐律』名例六・十惡の大不敬には、疏議に「注、盜及偽造御寶。疏議曰、……秦漢以來、天子曰璽、諸侯曰印。開元歲中、改璽曰寶」とある。

【解説】『唐律』賊盜二四・盜御寶及乘輿服御物と關連する。『唐律』名例六の定める大不敬に入る罪狀で、御寶を盜めば絞、乘輿服御物ならば、流二千五百里とされた。

三八 諸て、輒に禁苑^①に入り、官獸を盜殺する者は、首爲れば杖八十七・徒二年、從爲れば一等を減じ、並びに刺字す。知見するも

首せざる者は、笞四十七。門衛を掌りて財を受け縱放する者は、五十。坐鋪の守把の軍人、詞問せざれば、二十。七十。

- (1) 『元典章』卷四一、刑部三、大不敬の闖入禁苑と關連するが、「盜殺官獸」以下の規定はない。縱放は、故縱と同じく、犯罪をみすみす見逃すこと。

- (2) 坐鋪守把軍人。城門ではなく、宮城内外の派出所に詰めている兵士のこと。『吏文正續輯覽』に「坐鋪、坐於軍鋪也」とあるほか、『明律國字解』には、「守把とは、門番のことなり」と説明している。

【解説】『明律』兵律・宮衛・宮殿門擅入（二〇三）とは、量刑を除き、概ね一致する。

三九 諸て、漢人・南人、宿衛の士に投充せらるるも、宿衛を統ぶるの官、輒みだりに是を收納すれば、並びに罪に坐す。

- (1) 『元史』卷三四、文宗紀三、至順元年八月壬申。中書省・樞密院・御史臺言、臣等比奉旨裁省衛士、今定大内四宿衛之土、每宿衛不過四百人。……自裁省之後、各宿衛復有容匿漢・南・高麗人及奴隸濫充者、怯薛官與其長、杖五十七、犯者與典給散者、皆杖七十七、沒家貲之半、以籍入之半、爲告者賞。仍令監察御史察之。

- (2) 漢人・南人。元朝では、漢人とは、金朝治下にあった漢人・

女真人・契丹人・渤海人、及び南宋滅亡前にモンゴル領となっていた雲南・四川の漢人をいい、南人とは、舊南宋領の住民をさしている。

【解説】至順元年（一二三〇）に行われた宿衛兵士の大幅な人員削減に關わる規定である。モンゴルの官職が漢人・南人によって浸蝕されていくさまを窺わせている。宮崎市定「元朝治下の蒙古的官職をめぐる蒙漢關係」『東洋史研究』二三四、一九六五（『アジア史論考』下、朝日新聞社、一九七六所収）は、こうした問題を扱った好論である。

四〇 諸て、大都・上都の諸の城門、夜に急務ありて須らく出入すべき者は、官を遣して、夜行の象牙圓符及び織成の聖旨を以て門を啓かしむ。門尉が辯驗して明白なれば、乃ち啓くを許す。牙符ありといえども、織成の聖旨なき者は、何れの人を以てせず、並びに啓くなかれ。違いし者は死に處す。

- (1) 虞集『道園學古錄』卷十、抄錄御書。皇帝聖旨。大都・上都守把城門圍宿軍官軍人每・八刺哈赤每根底、自今已始、夜遇緊急事情、開門出入、差官將帶夜行象牙圓牌織字聖旨、門圍官員詳驗端實、方許開門出。雖有夜行象牙圓牌、如無織字聖旨、不以此何官員人等、並不許輒開城門縱令出入、違之處死。

- (2) 大都。元朝の首都（現北京市）。金朝の中都に建設され、至元

九年（一二七二）に大都と命名された。

- (3) 上都。世祖が即位前に建設した都城で、もと開平府と言い、中統四年（一二六三）に上都と改稱された。元朝皇帝の夏の滞在の地とされ、現在の内蒙古錫林郭勒盟正藍旗の東の五一牧場にあたる。

- (4) 大都の城門については、『元史』卷九〇、百官六、大都城門尉に「凡十有一門、曰麗正、曰文明、曰順承、曰和議、曰肅清、曰安貞、曰健德、曰光熙、曰崇仁、曰齊化。每門設官如上」とあり、城郭の四面の十一門の名が列擧されている。

- (5) 夜行象牙圓符。未詳。後出の牙符と同じ。

- (6) 前掲の『道園學古錄』卷一〇、抄録御書は「織字聖旨」と作り、同「題采來學士所藏御書後」には「受詔、命將作院、織錦成文、以宣諭兩都禁衛者也」と記す。『東京夢華錄』卷六、元旦朝會の「織成佛面」の記載から判斷すると、絹糸などで聖旨の文面を織りこんだものと想定される。

- (7) 門尉。本刑法志・三三條の注3に既出。

【解説】『道園學古錄』の記載からみて、本條は天曆二年（一二三二）九月一二日の手詔そのものであることが分かる。『唐律』衛禁一四・奉敕夜開宮殿門と同一の枠組みで構成され、『明律』兵律・宮衛・門禁鎖鑰（二一九）と相似た規定となっている。

職 制 上

四一 諸て、官府の印章は、長官が掌收し、次官これを封ず。差故あれば、即ちに牒を以て次官に發し、その下に次する者は、第してこれを封ず。その私人に付するを得ず。

- (1) 『元典章』卷一三、吏部七、掌印、印信長官收掌に、同様の記事がある。

- (2) 元代では、長官は達魯花赤、次官は管民長官（路總管・知府・縣尹）。前掲『元典章』は、中統五年（一二六四）八月四日の聖旨を載せ「其行用印信、達魯花赤封記、長官收掌」とあって、「掌收（收掌）」と「封（封記）」の主格が轉倒している。同書同卷の司吏知印信事に引く大德元年（一二三〇）ごろの聖旨條畫になると、「其行用印信、達魯花赤收管、長官掌判封記」とされている。

- (3) 掌收。收掌に同じ。『明律國字解』に「長官收掌とは、長官の方に印を置くなり。總じて一官に印一つなり。長官・佐貳官・首領官・吏典まで文案に名をかきて、其上に其官の印を押すことなり。右の印を長官の方にとり置なり」とある。

- (4) 封之。『明律』吏律・公式・封掌印信（七六）には、「凡内外衙門印信、長官收掌、同僚・佐貳官用紙於印面上封記、俱各畫字」とあって、『明律國字解』は「封ずるときは佐貳官が封じて、

長官・佐貳官のすえはんするを畫字と云」と述べる。

- (5) 差故。官吏が公務による外出（公出）・病氣（疾病）・休暇（在假）などのため、官廳に不在であること。『明律國字解』は「差故とは、差は使にゆくなり、故は外の事故なり」と解説する。

- (6) 官員の私的な僥從をいう。元代の史籍では、「私己之人」や「梯己人」、あるいは「帶行人」として、頻りにその弊害が指摘されている。

【解説】 管民官司での印信の管理を規定している。通常「掌收（收掌）」は達魯花赤、「封（封記）」は管民長官の役割とされているが、係官が官廳を離れる際には、即刻次席の正官、又は首領官に任務が移管される定まりであった。『明律』では吏律・公式・封掌印信（七六）に規定があるが、『唐律』に對應する條項は見出せない。

四二 諸て、郡縣の城門の鎖鑰は、並びに有司これを掌る。

【解説】 郡縣は、路・府・州・縣のこと。元代になると、有司をこれら地方の管民官司の意味で使うことが多くなる。

四三 諸て、有司、凡そ薦舉・刑名・出納等の文字は、故あるにあらざれば、並びに須らく圖署^④してこれを行すべし^⑤。

- (1) 『元典章』卷一三、吏部七、署押、圖坐署事、及び『通制條格』

卷一四、倉庫、關防（中統五年八月）に同文がある。

- (2) 薦舉・刑名・出納等文字。前掲『元典章』は「保明官吏・推問刑獄・科徵差稅・應支錢穀」とする。

- (3) 有故。公出・疾病・休暇など、官員に部署を留守にすべき正当な理由があること。

- (4) 圖署は圖簽ともいい、官員が一同に會して公事を議し、書類に連名署押すること（宮崎「法制」二二八～二三〇頁）。

- (5) 行之。『刑法志譯注』「これを行う」と讀むが、この「行」は「行移（おくる）」「行文（おくりぶみ）」の意味である。

四四 諸て、職官、任に到るに、上司を距つること百里の内なる者は公參し^②、百里の外なる者は免ず。上司が輒^{みだり}に非理に徵會して公務を稽失する者は、これを禁ず^③。

- (1) 『元史』卷八三、選舉三、銓法中、赴任公參の項、及び『元典章』卷一〇、吏部四、赴任、百里外不公參にほぼ同文がある。

- (2) 公參とは、新任の官員が、着任の際にその上級官司に挨拶のため出頭すること。

- (3) 徵は、呼び出す、出頭させる。會は、立ち會わせる。注1では「勾喚」とのみある。

【解説】 宋代の法書たる『慶元條法事類』卷四、職制門、職掌に引く職制令の「諸縣令佐非公事、不得下鄉。令出城經宿者、交縣事與

以次官。遇知州到任、非獨員者、許赴公參」と對應するものといえる。

四五 諸て、内外百司、呈署の文字は、並びに須らく下よりして上し、論定まりて後にこれを行す。

(1) 『元典章』卷一三、吏部七、公事、申事目下而上にはば同文がある。

(2) 呈署文字。官員一同の署押（署名捺印）を経た申呈（上行文書）のことと考えられる。前掲『元典章』は「申上司定奪之事」とし、「署」は見えない。

(3) 行之。當該部分は、注1の『元典章』に「必要照勘完備擬議相應、方許申呈」とあるように、前々條と同様、「おこなう」のではなく「おくる」意であることは明らかである。

四六 諸て、省府以下の百司、凡そ公務を行うには、朱銷簿を置き、按治官が時を以てこれを考す。

(1) 『元典章』卷一三、吏部七、公事、置立朱銷簿にはば同文がある。

(2) 省府とは、中書省、行中書省の略稱。時期によっては、尙書省を指す場合もある。

(3) 朱銷簿。朱銷文簿とも言う。前掲『元典章』には「中書省に

下在内大小諸衙門并各處行中書省以下在外大小衙門、各置朱銷文簿、將應行大小公事、盡行標附、依程期、檢舉勾銷、准備監察御史・提刑按察司官不測比對元行文卷施行月日照刷稽遲」とあり、同書卷一四、吏部八、案牘、刷卷朱銷入架に「諸司應行事務、例置朱銷文簿、日逐銷附、廉訪司下半年照刷了畢、所在官司、無憑照勘。……今後廉訪司官照刷各處文卷、了畢、擬合將各房元置朱銷文簿、分付合屬首領官收管、明附文簿入架、以備照勘」とあるのが参考になる。一つの公事が終わることに、朱筆で消していったことからこの名が付けられたのであろう。

(4) 按治官。監察御史・肅政廉訪司（提刑按察使）など監察官をさす。

(5) 考之。勤務評定のこと。考覈。『明律國字解』は「考覈と云は、在外の官人。三年に一度づつ上司より給由と云ことありて、勤方の吟味をするを云なり」と説明する。注1の文書では照勘・照刷（文書改め）と通用されている。

【解説】 監察の主體が按治官ではなく、檢校官とするのを除けば、『明令』吏令・勾銷（九）の枠内ではば捉えられる。

四七 諸て、職官の公座、同職なる者は、先に任に到るを以て上に居らしむ。輒に次を越えて坐る者は、これを正す。

(1) 『元典章』卷一三、吏部七、座次、官職同者以先授在上に同じ

趣旨の記述が見え、そのなかで金の「泰和律」が参照されている。

(2) 公座。文武の官員の朝参や官廳への参集、宴會などでの席次のこと。『明律國字解』は「公座署事とは、正官の毎日出堂して事をさばく、其坐に列りて連署することなり」とする。

四八 諸て、有司の公事、各官が銜を連ねてその上司に申稟する者は、並びに自らその名を書す。故あらば、對讀首領官よりこれを代書せしめ、具にその故を名下に述べしむ。曹吏の輒にその名を代書する者は、これを罪す。

(1) 對讀首領官。首領官とは、長官・正官の下にあって、行政文書の處理を擔當し、吏人を統轄する役目にあたる下級官員で、五品から九品の散官を持つ經歷・知事・照磨と、流外ポストの提控案牘・都目・吏目・典史があった。對讀首領官は、科擧で受験生の原答案とそれを筆寫したものとを讀み合わせる時に使われるように、書類の誤字の有無をチェックする役目を負った者のこと。牧野修二『元代勾當官の體系的研究』大明堂、一九七九のはかに、許凡『元代吏制研究』勞働人事出版、一九八七を參看。故とは、差故をさす。

(2) 曹吏。管民官司において、首領官が管下に置く六案の胥吏をさす。

四九 諸て、職官、代を受け聽除するの處は便とする所に從い、具に解由に載す。私に都に赴くものは、これを禁ず。

(1) 『元典章』卷一〇、吏部四、聽除、聽除告敍官員在官聽候に同文がある。

(2) 受代聽除。受代は、任期を終え、後任者を待つこと。『明律國字解』に「代りに官人を待つたることなり」とある。聽除は、聽選と同じく、敍任を聽候（沙汰待ち）すること。『吏文正續輯覽』の「聽選、聽候選用之人、各衙門俱有之、如監生之類」を參看。

(3) 具載解由。官員の出身・經歷・勤務成績を記した解由に、ポスト待ちの官員が逗留を希望する場合を明記すること。『元典章』卷一一、吏部五、給由に載せる解由體式にも「一、本官願某處住坐聽除」との一節がある。

【解説】『明令』吏令・任滿官員（二四）の「凡各處任滿官員、須要隨即將帶家小起離任所、親資解由到省、次日引見。如到來、當該房分不行引見、問罪」との相違が目につく。

五〇 諸て、有司の案牘・籍帳は、編次して架閣す。各路の提控案牘は架閣庫官を兼ね、經歷・知事と同一これを掌る。散府・州・縣は知事・提控案牘・都吏目・典史がこれを掌る。任滿すれば相い沿りて交割し、敢えて慎まざるなかれ。

- (1) 『元典章』卷二四、吏部八、案牘、文卷已絶編類入架（元貞二年二月）に同じ趣旨の記事がある。
 - (2) 案牘は、裁判記録を含む行政文書。『吏學指南』は「考察文書曰案、書字之版曰牘」とする。籍帳は、戸籍臺帳・租稅臺帳。前掲『元典章』も「照刷鄂州路文卷、其干礙驅良・田宅・婚姻・債負一切錢糧」に作る。
 - (3) 編次は分類・整理、架閣は文書を棚架に收藏・保存すること。官廳文書は、架閣庫に收納され、管勾架閣が管理した（宮崎「法制」二七〇頁）。
 - (4) 提控案牘。首領官の一つ。各衙門における文書の處理・保管を擔當する。路府の場合、ふつう管勾承發・照磨・管勾架閣も兼ねた（宮崎「法制」二七一―二七二頁）。
 - (5) 經歷・知事。これも首領官ポスト。路では、幕職ともよばれ、右三案（兵刑工）と左三案（吏戸禮）を分掌した（宮崎「法制」二二三頁、二九九頁）。
 - (6) 散府。單に府ともいう。府は路と州の中間に位置し、州と同列視されて府州と併稱される。『刑法志譯注』は、路に屬さず行省あるいは宣慰司に屬する散府と、路に屬する屬府の二種があった（二二五頁）というが、恐らく路總管府（路府・總府）が特に重要な府州に置かれたため、それ以外の府州が下位に置かれて、散府・散州と稱されたものと考えられる。前掲・牧野修二『元代官當官の體系的研究』七〇―七二頁の注3を參照。
 - (7) 都吏目・典史。都吏目とは、都目と吏目のこと。典史を含めて、いずれも官品を持たない首領官で、散府・州・縣など、提控案牘の置かない衙門において、文書の授受・保管を擔當した。
 - (8) 任滿。所定の任期を終えること。『元史』卷八三、選舉三、銓法に「至元二十八年、定隨朝以三十月爲滿、在外以三周歲爲滿、錢穀官以得代爲滿、吏員以九十月日出職、職官轉補、與職官同」とある。
 - (9) 相沿交割。『明律國字解』は「應合相沿交割之物とは、相沿とは先役のとおりに守ることなり。交割はひきわたすなり」とする。ある官員の任期が終了する時に、前任官から後任官へ從來通りとして事務引き継ぎを行うこと。
- 【解説】 地方官廳における首領官の職掌分擔が簡潔かつ的確に記述されている。
- 五一 諸て、樞密院^②・行省^③の文は、軍數及び邊關の兵機は考閱に在らざるを除き、餘は並びに監察御史よりこれを考閱す。
 - (1) 『元典章』卷六、臺綱二、照刷、行省令史稽遲監察就斷、及び行院令史稽遲與行省令史一體斷罪と關係する。
 - (2) 樞密院。元朝における軍政の最高機關。秩從一品。中統四年

(一二二六三)に設置された。樞密使は、裕宗^{チンギス}眞金以來、皇太子が兼領する虛銜となり、實際は知樞密院事・同知樞密院事、あるいは銀軍國重事に統轄されていた(『元史』卷八六、百官二、樞密院、和田清編『支那官制發達史』中華民國法制研究會、一九三七、三一四～三二〇頁)。

(3) 行省は、行中書省の略稱。秩從一品。本來は中書省の出張機關で、地方の民政・財政を統轄し、都鎮撫司を通じて、管下の軍政權も掌握した。長官は平章政事(從一品)で、その下に左右丞(正二品)・參知政事(從二品)が置かれた(『元史』卷九一、百官一、『支那官制發達史』三三三～三三四頁)。

(4) 軍數とは、軍兵・軍馬の數。邊關とは、緣邊地域の關塞のこと。兵機は、軍事機密、軍機と同じ。『明律國字解』は「軍機と云は、軍兵を調發し兵糧を催徴し、并に邊塞の注進加勢を乞文書のい、合戰の勝負に干る類のことは隱密にすることゆへ、軍機と云なり」と述べている。

(5) 監察御史。秩正七品。御史と略稱される。御史臺及び行御史臺の察院に置かれ、約二〇〇～三〇〇名の定員で地方に派出され監察業務にあたった(『元史』卷八六、百官二、御史臺)。

五二 諸て、職官、上司の他委を承け、治する所に官を闕く者は、^③回申するを許す。擅に首領官吏をして事を攝せしむるを得ず。

(1) 『元典章』卷一四、吏部八、差委、差使留除長官とやや關係する。

(2) 他委。臨時職務へのさしつかわし。差委とは同じ意味になる。『明律國字解』に「差委とは、差は使ひなり、委とは官長より一むきのことを其人にふりむけて勤さするを云。官職はもとの官職にて替らねども、勤方替るゆへ、これも遷官のいなり」と説明する。

(3) 回申。ここでは、上司から他委の命令を受けた官員が、自分が職務を離れると擔當者がいなくなり不都合が生じる旨を、上司に申文で復命すること。

五三 諸て、職官、官物を押運して都に赴くに、常に差さざる所の者を除き、餘は並びに籍を置きて輪差す。私に徇い均からざる者は、その上司を罪す。

(1) 『元典章』卷一四、吏部八、差委、路官州官通差、及び長官不得差占、及び同書卷二六、戸部二一、主簿輪差搬運に同じ趣旨の記事がある。

(2) 常所不差者。通常、押運のためには、差委の認められないポスト。前掲『元典章』の路官州官通差に「除各路・府・州・司縣達魯花赤・長官・捕盜官・辦課官依例不得差占外」とある。

五四 諸て、吏員の遷調には、廉訪司の書吏・奏差は道^②を避け、路・府・州・縣の吏は貫^③を避く。

(1) 『元典章』卷二二、吏部六、書吏、書吏奏差避籍に同じ内容の記述がある。

(2) 書吏とは、御史臺・行御史臺の察院及び肅政廉訪司に屬する吏員で、文書事務をその職掌とし、路府州縣の司吏と吏職の頂點である掾史・令史との中間に位置していた。奏差は肅政廉訪司等に屬する胥吏で、詳しい職掌は不明であるが、書吏よりも一ランク下に位置していた（牧野修二『元代勾當官の體系的研究』七四～八五頁）。

(3) 避道、避貫。前掲『元典章』に「州・縣司吏、於本路所轄州縣内、避籍遷轉、路司吏、於本省所轄路分、避貫遷調外、據各道廉訪司書吏・奏差、職役雖微、關繫甚大、多係本道接治路分前後司吏選取。……若將各道廉訪司書吏・奏差、避道遷調」とある。路・府・州・縣の胥吏が別のポストに遷る場合には、路の胥吏であれば行省内の本籍の路以外の別の路の、州の胥吏であればその路に屬する本籍の州以外の別の州の、廉訪司の書吏・奏差であれば別の廉訪司所管の別のポストへ遷るのである。

五五 諸て、有司、印信を遺失し、隨即に尋獲する者は、罰俸一月。^①

追尋するも獲ざる者は、禮部に具申して別鑄し、元と印を掌りし官は、職を解きて罪に坐す。元印を獲るにあらざれば、由を給し敍を求むるを得ず。^③

(1) 罰俸一月。給與の支拂停止處分。官吏の微罪に課される徴戒。『六部成語註解』刑部。罰俸。官員有小罪、則部議罰其應得之俸銀、一年二年三年不等。

(2) 掌印官。通常は、達魯花赤となるが、場合によっては、管民長官や正官も含まれる。『草木子』卷三下、雜制篇。元路州縣各立長官曰達魯花赤、掌印信、以總一府一縣之治、判署則用正官、在府則總管、在縣則縣尹。達魯花赤猶華言荷包上壓口捺子也。亦由古言總轄之比。（四一條を參照）

(3) 給由。官員が任滿などで別の官職に遷るときに、その上司が保證人となり作成する解由を吏部に提出してもらうこと（一〇九條を參照）。

【解説】『唐律』雜律五八・失符印求訪、『明律』吏律・公式・棄毀制書印信（六六）とのつながりがある。

五六 諸て、邊關の文字を毀匿する者は、流。

【解説】『唐律』雜律五〇・棄毀亡失制書官文書では明確ではないが、『明律』吏律・公式・棄毀制書印信（六五）になると、軍機錢糧に關わる文書については、破損すれば絞罪、過失が原因ならば減三

等と定められるようになる。

五七 諸て、蒙古人、官に居りて法を犯し、論罪既に定まれば、必ず蒙古人を選びてこれを斷ず。杖を行うも亦たかくの如くす。

【解説】 モンゴル官僚にのみ認められた裁判上の特典を述べている。すなわち、彼らの犯罪については、判決はもちろん、杖刑の執行も全てモンゴル人の手で行なうというもの。

五八 諸て、四怯薛^②及び諸王・駙馬の蒙古・色目^③の人、姦盜・詐偽を犯さば、大宗正府^④よりこれを治す。

(1) 『元史』卷八七、百官三、大宗正府。凡諸王・駙馬投下蒙古・色目人等、應犯一切公事、及漢人姦盜詐偽・蠱毒厭魅・誘掠逃驅輕重罪囚、及邊遠出征官吏・每歲從駕分司上都存留住冬諸事、悉掌之。……致和元年、以上都・大都所屬蒙古人并怯薛・軍站・色目與漢人相犯者、歸宗正府處斷、其餘路・府・州・縣・漢人・蒙古・色目詞訟、悉歸有司・刑部掌管。

(2) 四怯薛。三三條・注1の宿衛を參照。

(3) 色目は、諸色目人の略稱。西域出身の人たちをさす。元朝ではモンゴル人に次ぐ準支配者として各種の特權を持ち、政治・經濟の各方面で活躍の場が與えられた。愛宕松男『元代色目人に關する一考察』『蒙古學』一、一九三七(のち『東洋史學論集』

第四卷、三一書房、一九八八所收)、及び蒙思明『元代社會階級制度』中華書局、一九八〇を參看。

(4) 大宗正府。秩從一品。元朝では歷代の王朝とは異なり、投下を含む皇室關係の政務一般のみならず、札魯忽赤(jarghuchin)と呼ばれる斷事官を一括して配下に收め、モンゴル・色目人のほか、時には漢人に關わる裁判事件も扱った。田村實造に「元朝札魯忽赤考」(『桑原隲藏博士還曆記念東洋史論叢』弘文堂、一九三一、のち『中國征服王朝の研究』同朋舍、一九六四所收)の論考がある。

五九 諸て、親女を以て當路の權貴に獻じて進用を求め、已に得たる者は、受くる所の命を追奪し、仍おその家を没入^③す。

(1) 『元史』卷二二、世祖紀九、至元一九年四月丙辰にも「敕以妻女姉妹獻阿合馬得仕者、黜之」とある。當路權貴とは、本來は權臣阿合馬^{アハマ}を念頭に置いたものだろう。

(2) 宣敕の剝奪であつて、官僚身分の喪失に繋がる。

(3) 没入其家。家人・家財をともに籍没すること。

六〇 諸て、官吏、任に在り、親戚・故舊及び禮として應に追往^②すべきの人と、追往する者は聽し、餘は並びにこれを禁ず。

(1) 『元典章』卷三六、兵部三、使臣、出使筵會事理に「今來參詳、

凡出使人員、於所至之處、如親戚・故舊禮應往返之人、賓主宴樂理難斷絕。其餘不應飲用官吏筵會、侵漁官府、禁治相應」とあるほか、同書卷四六、刑部八、以不枉法論、出使取受送遺、及び『通制條格』卷二七、雜令、私宴（大德十年四月）にも同文がある。本譯注の二七一條とも關係する。

(2) 追往。前掲文書は「往返」に作る。挨拶等のため行き來すること。この往來には、接待・宴會が必ず伴うものであったようである。もっとも、官員・胥吏の任地に、親戚や舊知の人物が居り、禮儀として自ら出向いて挨拶すべき場合は、本條に述べる通り、往來は許された。

【解説】『明律』刑律・受贓・在官求索借貸人財物（三七一）と同一の枠組みを持つ。

六一 諸て、職官、任に到り、輒に部する所の贄見の儀物を受くれば、受贓に比し、等を減じて論ず。

(1) 沈仲緯『刑統賦疏』士庶饋與猶坐於去官。至元三十一年、部議、官吏在任得替其間、並不得以酒食邀請部下官吏人等、敢斂錢物、違者治罪外、據下任官員者、百姓愛慕、自願以禮錢送者、不拘此例。

(2) 所部贄見儀物。官員の着任にあたり、その下僚から差し出される贈物。

(3) 比は、比附と同じく、法規に明文のない違法行違について、その結果あるいは行爲の違法性に應じ、類似する他の條項を量刑の尺度として借用する操作のこと（『宋史刑法志譯注稿』上、『東方學報』京都・六四、一九九一、四五三頁）。

【解説】『唐律』の職制五四・監臨受供饋、及び職制五五・率斂所監臨財物の系譜を引く。『明律』刑律・受贓・在官求索借貸人財物（三七一）も同様ながら、『唐律』の坐贓や受所監臨財物に代わって、答四十または不枉法に問われるほか、内容的にも餘り變わらない。以下、九〇條まで、贓罪に關わる規定が集められている。

六一 諸て、職官、部民の事後の致謝食用の物を受くる者は、答二十七、過を記す。

(1) 事後。『明律國字解』は「事後は、公事落居の後なり」と記す。ある裁判案件の處理が全て済んだ後で、事案と關係のある管下住民から、返禮の贈物を受領することが問題とされている。部民については、『明律國字解』に「支配下の民なり」とするほか、「わが治る地に居る民なり」とある。

(2) 記過。解由に、官員が在任中に犯した罪名を書き込むこと。紀過と同じ。『明律國字解』に「紀過とは、附過なり。答杖をも行はず、贖をも出さず、ただ紀錄して置たるなり」と解説する。

【解説】『唐律』職制四九・事後受財、及び『明律』刑律・受贓・事

後受財（三六九）では、枉法・不枉法（受所監臨財物）のいずれかで斷罪される。

六三 諸て、上司及び出使の官、使所において、その燕饗・餽遺を受けし者は、不枉法に准じ、二等を減じて論ず。經過して受けし者は、各々一等を減ず。臺憲よりこれを察す。

（1）『元典章』卷三六、兵部三、使臣、出使筵會事理に同じ趣旨の記事がある。なお二六八條とも連關する。

（2）不枉法。贓罪の一種。收賄したが法は枉げなかった場合をいう（譯註五、一八八頁）。『明律國字解』には「受枉法不枉法贓とは、官人の人より賂をとりたるに枉法・不枉法の二つあり。賂をとりたててそれゆへに依怙はせぬをば不枉法贓と云ふなり」とある。

（3）經過而受者。「於使所受其燕饗餽遺」が出使の目的地で接待を受けることならば、これは目的地へ赴く途中の州・縣などで接待を受ける場合をさす。

（4）臺憲。在內は御史臺、在外では憲司たる肅政廉訪司（提刑按察司）を指す。

【解説】『唐律』職制五一・因使受送遺、及び『明律』刑律・受贓・在官求索借貸人財物（三七一）と一致する。『唐律』では、受所監臨財物法を適用し、『明律』では、この概念自體が姿を消したため、量

刑には不枉法が採用されている。その意味で、本項は『明律』の先蹤を爲す。

六四 諸て、職官及び有出身人、事に因りて財を受け、枉法の者は、除名して敘せず。不枉法の者は、殿三年とし、再犯は敘せず。無祿の者は一等を減ず。至元鈔を以て則と爲す。枉法、一貫より十貫に至るは、笞四十七。貫に満たざる者は、情を量りて罪を斷じ、例に依りて除名す。一十貫以上二十貫に至るは、五十七。二十貫以上五十貫に至るは、七十七。五十貫以上一百貫に至るは、八十七。一百の上は、一百七。不枉法、一貫より二十貫に至るは、笞四十七。本等にて敘す。貫に満たざる者は、情を量りて罪を斷じ、見任を解きて別に求仕を行う。二十貫以上五十貫に至るは、五十七。邊遠に注すること一任。五十貫以上一百貫に至るは、杖六十。七、一等を降す。一百貫以上二百貫に至るは、七十七。二等を降す。一百五十貫以上二百貫に至るは、八十七。三等を降す。二百貫以上三百貫に至るは、九十七。四等を降す。三百貫以上は、一百七、除名して敘せず。

（1）『元典章』卷四六、刑部八、收受、贓罪條例十二章に同文がある。『元史』卷二一、成宗紀四、至元七年三月甲辰の「詔定贓罪爲十二章、京朝官月俸外、増給祿米、外任官無公田者、亦量給之」と對應する。

(2) 有出身人。出身は、根脚とも表記される。有出身人とは、元代では例えば、内外衙門の胥吏として一定の期間を務めあげ、入流して正官ポストに就く資格を得た者をいう。『明律國字解』にも「出身と云は、官人の出ばのすぢを云なり。進士出身と云は、進士より出たるなり。吏出身と云は、吏より陞て官人になりたるなり」とある。

(3) 枉法。不枉法の反対概念。收賄して法を枉げること（『譯註』五、一八八頁）。『明律國字解』は「賂をとりてそれゆへに依怙なるさばきをしたるを枉法賊と云」とする。

(4) 除名不敘。『唐律』名例二一によれば、除名とは、官爵すべてを剝奪して庶民に落として、永久に再敘任を許さない刑事處分（『譯註』五、一三三～一三四頁）。不敘は、永久に敘任を認めないこと。『明律國字解』には「不敘といえは、官を與えぬことなり」とするほか、「不敘とは、再び官吏となることを得ぬを云なり」と述べる。罷職不敘としばしば通用される。

(5) 殿三年。三年間の職務停止處分を受けること。『元典章』卷四六、刑部八、取受、職官殿年自被問定職計算などに詳しい（一二三條を参照）。

(6) 無祿者。『唐律』職制四八、監主受財枉法の疏議によれば、祿令に食祿規定のないものをいう。『明律國字解』は「無祿人と云は、致仕・養母侍親・丁憂・聽選・省察・省親の官人、封官の

るい」と述べる。要するに、官員・胥吏を問わず、俸錢・祿米の支給を受けない者を對象とする。

(7) 至元鈔。至元二十四年（一二八七）に發行された紙幣で、正しくは至元通行寶鈔という。中統元年（一二六〇）發行の中統鈔の價值下落に伴い、新たに印造されることになり、中統鈔五貫に對し至元鈔一貫、銀一兩に對し至元鈔二貫の交換比率とされ、至正十年（一三五〇）まで發行された。前田直典「元朝時代に於ける紙幣の價值變動」（『歷史學研究』一二六、一九四七、のち『元朝史の研究』東京大學出版會、一九七三所收）を參看。

(8) 五十貫以上一百貫、八十七。前掲『元典章』及び『大元通制』佚文によって補った。この一節は『元史』のいずれの版本にも見えない。

(9) 本等敘。同品階の官職に改めて任用すること。不満貫者に適用される「量情斷罪、解見任、別行求仕」との格差は、答數の違ひのみということになる。

(10) 注邊遠一任。「邊遠」のポストを一任（三年）務めさせること。元朝における邊遠については、『元典章』卷五六、刑部一八、闕遺、孛蘭奚牛發付屯田種養の「況廣東係嶺外邊遠去處、又與江西不同」や、『通制條格』卷七、軍防、口糧醫藥（至元二十四年）「即日多有摘撥占城・雲南・沿海兩廣・福建諸處鎮守出征當役、俱係煙瘴極邊重地」とあるのが參考となろう。

(11) 降一等。「解見任、降一等敘」の意。以下の「降二等」「降三等」「降四等」も同様で、現職の品階よりも一〜四ランク低いポストにつけること。

【解説】 贓罪條例十二章の節略である。大徳七年（一二〇三）、從來の十三等例に代わって定められ、量刑は、枉法五・不枉法七、合計十二の等級に従って行われる。『唐律』職制四八・監主受財枉法を基本に構成されたもので、『明律』刑律・受贓・官吏受財（三六七）にほぼ繼承されている。

六五 諸て、内外の百司の官吏、贓を受け、悔過自首するに、不盡・不實なき者は、罪を免ず。不盡・不實あらば、ただ不盡の贓に坐す。もし人の告せんと欲するを知りて首し、及び贓を以て主に還すは、並びに罪二等を減ず。他處にて事發するを聞知して首する者は、その日程を計る。知らざるといへども、亦た人の告せんと欲するを知りて首するを以て論ず。名を詭りて代首する者は、聽すなかれ。犯人、實に病故あらば、親屬が代首するを許す。臺憲の官吏が贓を受くれば、首を准すの限に在らず。有司が人の首告を受くる者は、これを罪す。

(1) 『元典章』卷四八、刑部一〇、回錢、取受悔過還主無斷罪、及び知人欲告回錢、同書卷四八、首贓、取受出首定例、同書卷四六、刑部八、取受、臺察官吏犯贓不敘などの記事がひとまとめ

にされている。

(2) 不盡不實。犯罪の全貌を明かさず、一部のみを自首すること。贓罪において、贓額を少なく陳述すれば「不盡」、強盜を竊盜と言うなど、罪種を偽ることは「不實」とされる（『譯註』五、二二六〜二二七頁）。

(3) 止坐不盡之贓。自首漏れ部分のみを科刑すること。前掲『元典章』の取受出首定例にも、「刑部議得、首罪不盡不實者、止以不實不盡罪之」とあるように、「不實」を補うべきである。『明律國字解』は「以不實不盡之罪罪之とは、其本罪をば免じて、不實不盡の罪ばかりをかくなり」とする。

(4) 監察官吏の贓罪については、前掲『元典章』の臺察官吏犯贓不敘と一致するが、自首の記述は見当たらない。

【解説】 贓罪の自首に關する條項。『唐律』名例三七・犯罪未發自首を踏まえたもので、その立場は『明令』刑令・犯罪自首（九五）にも認められる。『明律』名例・犯罪自首（二四）との共通點が顯著である。七七條・八五條を參照。

六六 諸て、職官、罪あるの人を恐嚇して賂を求め、いまだ罪を得ざる者は、答二七。

(1) 恐嚇。『明律國字解』には、「恐嚇は、をどすことなり、人ををどして財物をとることなり」と解説する。ここでは官憲の威

力をかさにきて收賄するのであるから、『唐律』の「強乞取」(職制五〇)または「挾勢乞索」(職制五八)の枠内で理解すべきであらう。

【解説】『唐律』職制五〇・受所監臨財物、及び職制五八・挾勢乞索、並びに『明律』刑律・受贓・有事以財請求(三七〇)と関連する。

六七 諸て、官吏の贓を告するに、實にこれを取る者あり、過度人の諱む所と爲るに、官吏初めより知らざる者あり、官吏已に知りて、姑らく過度の家に付し、事畢りて後にこれを取る者あり、本よりいまだかつて言わずして故らに錢物を以て人家に置き、過度と指作して人を誣陷する者あり。ただ錢物の所在を以てこれに坐し、與錢人は俱に坐す。

(1) 『元典章』卷四八、刑部一〇、過錢に若干參考になる記事がある。

(2) 過度人。贓物・贓錢の授受を仲介する者。過錢人ともいう。『吏學指南』過度。與人過財也。方言謂之涉濟、其事得遂也。

(3) 與錢人。贓錢を出す人、贈賄者。出錢人と同じ。

六八 諸て、職官、但し、贓私を犯し、罪狀明白なる者あらば、停職して聽斷す。

(1) 聽斷。裁くこと。聽訟斷獄。『福惠全書』卷四、莅任部、謹操守。至于詞訟、乃民閒曲直所關、自應從公剖決、以示神明。若夫賄囑之事、直者惟憑理勝、豈肯行求。曲者昏夜夤緣、必期絀彼、官稍利其財而違心聽斷、使直者抑鬱無伸、彼豈甘心而不上司告理耶。

六九 諸て、奴賤、官と爲り、但し、贓罪を犯さば、除名す。

七〇 諸て、職官、贓を犯し、生前に贓狀明白なれば、死するといえども、猶お家屬に責して贓を納めしむ。

(1) 『元典章』卷四六、刑部八、收受、官員收受身死着落家屬に同じ趣旨の記事がある。納贓とは、贓物を供出させること。

七一 諸て、官吏、贓罪を犯し、原免に遇い、或いは自首して罪を免ぜらるれば、過錢人は即ち人に因りて罪を致さば、坐せず。

(1) 『元典章』卷四八、刑部一〇、出首、出首贓錢過錢人免罪に同じ趣旨の記事がある。

(2) 過錢人。過度人と同じ。賄賂を取り次ぐ人のこと。

(3) 因人致罪。犯人の逃走を幫助したり、匿ったために罪を得ること(『譯註』五、二三〇—二三二頁)。「唐律」名例三八の疏議に「因罪人以致罪、謂藏匿罪人、或過致資給及保證不實之類」

とあるほか、『明律國字解』は「囚人連繫致罪とは、われに罪なけれども、人の罪のまきぞえになりたるなり。……藏匿とは、罪人をかくしおきたるなり。引送とは、罪人を他所にかこい送りたるなり。資給とは、罪人に衣糧などをつづけたるなり。保勘供證不實とは、五人ぐみなどの立會證人になりたるに、罪人をかこいて實をいわぬなり。……是等のるい皆連繫の罪なり」と解釋する。

【解説】 囚人致罪に關わる條項。その論理において、『唐律』名例三八・犯罪共亡捕首、及び『明律』名例・犯罪共亡（二六）と殆ど變わらない。

七二 諸て、官吏の贓罰、臺官の問う者は臺に歸し、省官の問う者は省に歸す。^②

（一） 贓罰。贓罰錢物あるいは贓罰鈔のこと。犯罪に關わる錢物で官に沒收されたものと、罰贖として支拂われた錢・鈔の類。

（二） 臺官・省官。臺官は御史臺官、省官は中書省官。ここでは監察系統と管民系統を問題にしているに過ぎないと思われる。

【解説】 贓罰收入は、中央・地方の財源としても一定の役割を果たしていた。本條では、贓罰が官員・胥吏を裁いた官廳に歸屬することを定めている。

七三 諸て、職官、贓を犯し、罪狀已に明らかなるに、反つて臨問の官を誣告する者は、斷後に仍お徒す。

【解説】 贓罪の罪狀が明白でありながら、あべこべに取調官を誣告した官僚は、贓罪十二章で處罰した上、さらに徒刑をも科される原則であつた。

七四 諸て、官吏の家人、贓を受くれば、官吏の法より二等を減じて坐す。官吏の初めより知らず、及び知りて即ちに首すれば、官吏・家人は俱に免す。即ちに首せざれば、官吏は家人の法より二等を減じて坐し、家人は本法に依る。若し、官吏が情を知り、故らに家人をして財を受けしむれば、官吏は本法に依り、家人は坐するを免す。官吏の實に知らざる者は、止だ家人を坐す。

【解説】 監臨官吏の家族が受贓を犯した際の罰則を規定する。官吏の法とは、贓罪十二章をさすが、『唐律』職制五六・監臨之官家人乞借、並びに『明律』刑律・受贓、家人求索（三七二）と比べ、量刑上の差違を除くと、論理の組立は殆ど變わっていない。

七五 諸て、職官、除を受けていまだ任ぜず、承差に因りて贓を犯す者は、見任と同じく論ず。邊遠遷轉の官、已に任ずるも、いまだ文憑を受けず、贓を犯す者も、亦たかくの如くす。更いまだ出職せずして贓を受け、既に出職して事發すれば、受くる所の職を

罷めしむ。

(1) 『元典章』卷四六、刑部八、取受、承權官取受に同じ趣旨の記述がある。

(2) 承差。中央の吏部からの正式な人事ではなく、行省など地方官廳の裁量で與えられた臨時ポスト。宋代の借補權攝とも通じる。注1の記事では「雲南、三年一次朝廷差官選調。若有急闕去處、從行省選注、謂之承權」とあって、「承差」ではなく「承權」となっている。

(3) 邊遠遷轉官。前掲の承權官取受では、雲南を念頭に置いている。承差を承權とする理由も、ここにあると見られる。

(4) 文憑。任官辭令たる宣敕。前掲『元典章』にも「未奏降宣敕」と記される。

(5) これ以下に該当する史料は見當たらぬが、『元典章』卷四六、刑部八、取受、吏員贓滿一體追奪とやや關連している。

(6) 出職とは、胥吏が一定年限を勤めあげ、入流して官員ポストを得ること。

【解説】『唐律』職制一六・無官犯罪をもとに構成されている。刑法志の文言は、『明律』名例・無官犯罪（一三）の注に「遷官者、謂改除及差委・權攝隣近官司・得代」として部分的に吸収されている。

七六 諸て、錢穀官吏、^①贓を受け、不枉法の者は、ただ贓を計りて

罪を論じ、殿年せずして敘す。^②

(1) 錢穀官吏。雜職と總稱され、倉庫や場務で財務行政を擔當するもの。

(2) 不殿年敘。贓罪十二章の定める「殿三年」の處置はとらず、現職を解いて別ポストにつけること。

七七 諸て、職官、贓を受け、事發するを聞知して、回付して主に到るは、人の告せんと欲するを知りて自首すると同じく論じ、二等を減じて科罪す。^①枉法なる者は、職を解きて別に敘す。^②

(1) 『元典章』卷四八、刑部一〇、回錢、知人欲告回錢に同文がある。同じ趣旨の規定は、『明律』名例・犯罪自首（二四）にも收められている。

(2) 『元典章』新集刑部、回錢、回錢減等斷罪、『元典章』卷四八、刑部一〇、回錢、取受事發回付量斷に、量刑に若干のくい違ひがあるものの、同じ方向の記述がある。

【解説】贓物の改悔還主と關係する。六五條の補足規定といえる。

七八 諸て、職官、官錢を侵用する者は、枉法を以て論じ、赦に會うと雖も、^①仍お除名して敘せず。

七九 諸て、職官、任に在りて贓を犯し、問を被りて贓狀已に明ら

かなるに、疾と稱する者は、その職を停め、歸對せしむ。

- (1) 『元典章』卷四六、刑部八、取受、取受被察推病依例罷職に同じ内容の記載がある。

- (2) 歸對。前掲『元典章』では、代わりに、「硬問」「對證」の語が見える。硬問は、拷問のこと。對證とは、原告・被告を對面させて訊問することである。同様に「歸問」の語もあり、『吏文正續輯覽』は「歸問、謂問罪而歸於一、使無差異也」と述べ、『明律國字解』は「歸問とは、せんぎを落着することなり」と解説する。即ち「歸問對證」の意で、事件關係者を一堂に面對させて取調べに決着をつけることと考えられる。

八〇 諸て、職官、將いる所の親屬・僂從が部する所の財を受くるも、己に入るの贓なく、赦に會わば、職に還す。

- (1) 親屬・僂從。『明令』刑令・官員家人犯罪(二三一)では、家人・伴當とあり、『明律國字解』には「伴當人とは、雜字の注に、使令者と云。奴僕の内のおもだちて用をたすものなるべし」と解説する。僂從とは、伴當の意で使われている。

- (2) 入己贓。贓物を公用ではなく、私用に供すること。『唐律』戸婚二四・差科賦役違法の疏議に「入私者、以枉法論。稱入私、不必入己。但不入官者、即爲入私」とあり、『明律國字解』は「入己と云ときは、利用に用いるなり」とする。

【解説】 七四條を補う内容となっている。恐らく監臨之官が「知情」を理由に「與同罪」に問われるケースを前提とするのであろう。

- 八一 諸て、外任の牧守、贓を受け、問を被りて成るに垂んとするに、近臣の奏し徴されて入朝する者は、元問の官に執付す。

- (1) 外任たる路府州の正官ポスト。ここでは京師の近臣と對して使われている。

- (2) 成は獄成、結審して判決の作成に入ること。『明律國字解』は「せんぎ相すみて、罪の輕重實否きわまるを獄成と云」と説明する。

- (3) 執付元問官。最初に取調べを擔當した官員に、審理を續行させるため、被疑者の身柄を引き渡すことである。

八二 諸て、職官、贓を犯して在逃する者は、獄成るに同じ。

- (1) 『元典章』卷四六、刑部一〇、取受、犯贓官吏在逃不敘に同文がある。『元史』卷二〇、成宗紀三、大德五年正月壬子には、その經緯を「御史臺臣言、官吏犯贓及盜官錢、事覺避罪逃匿者、宜同獄成。雖經原免、亦加降黜、庶奸僞可革。從之」と記録する。

- (2) 贓罪の嫌疑がありながら逃走すれば、自動的に有罪となることをいう。『明律』刑律・犯罪事發在逃(三〇)は「事發而在逃

者、衆證明白、即同獄成」と定める。『唐律』斷獄八・訊囚察辭理の「贓狀顯露、理不可疑」との原則を踏まえたものと推測される。

八三 諸て、職官、贓を受け、憂に^{あた}丁らば、終制の日に究問す。^①軍官の憂に丁らざる者は、終制の限に在らず。^②

(1) 『元典章』卷五三、刑部、問事、被罪終制究問に同文があり、『元典章』新集吏部、丁憂、丁憂犯罪依例追問とも關連する。

(2) 『元典章』同書卷四六、刑部八、軍官不丁憂取受依例問に同文がある。軍官には、終制を待つて審問に移るとの特典が與えられていなかった。

【解説】『明令』吏令・官員丁憂（一三）では、本條と異なる内容となっている。

八四 諸て、職官、贓を犯し、已に承伏して、赦に會う者は、罪を免じ贓を徴し、黜降すること條の如くす。いまだ承伏せざる者は、論ずるなかれ。

(1) 『元典章』新集刑部、贓賄、雜例、延祐七年革後稟到通例の「局院・站赤・百戸・頭目・里正・主首・牙行人等……」以下に同じ趣旨の記事がある。

(2) 承伏。犯人が罪狀を認めること。『吏學指南』承伏、謂甘當其

責也。注1では、招伏に作る。同書は「今之招伏、蓋彰明其罪也」とする。

八五 諸て、職官、贓を受け、即ちに改悔して主に還すも、その主の猶お執告する者は、論ずるなかれ。^②

(1) 『元典章』卷四八、刑部一〇、回錢、取受悔過還主無斷罪に關係する記事があるが、「其主猶……」以下の規定は明示されていない。

(2) 官員から財物を強要された者は、その財物が返却された後は、いくら告發しても、もはや事件として取り合ってもらえない、というのがその趣旨。

【解説】贓罪の自首に關係する。これも六五條の補足規定にほかならない。『唐律』名例三九・盜詐取人財物、及び『明令』刑令・取受還主（一〇三）も關連する。

八六 諸て、職官、財を受けて人の爲に請託する者は、贓を計りて罪を論ず。

【解説】『唐律』職制四六・受人財爲請求に關連した規定が見え、『譯註』六では、「本條は、他人の財を受けて、その人のために主司に對して違法な裁定を請託した場合の罪を規定する」（一八三頁）と解説する。

八七 諸て、小吏、^① 賊を犯さば、並びに罪を斷じて除名す。

(1) 『元史』卷二〇、成宗紀三、大德五年八月庚辰。詔、……小吏犯賊者、並罷不敘。『元典章』卷四六、刑部八、取受、贓罪條例(至大四年三月十八日)、及び吏員贓滿一體追奪(皇慶元年四月)に同じ趣旨の記事がある。

(2) 小吏。注1の『元典章』は「吏人」に作る。『元典章』卷一五、戸部一、祿廩、俸錢、官吏添支俸給に「小吏」として挙げられているのは、廉訪司や轉運司管下の書吏・通事・譯史・奏差・典史、及び總管府の司吏・通事・譯史、さらに下州の吏目、散府・諸州の司吏、縣の典史など、地方官廳に所屬する有俸の下級の胥吏であつて、中央官廳の上級胥吏たる令史・掾史の名は、全く見えないのが特徴である。

八八 諸て、庫子等の職、已に出身ありて、祿米を添給するなき者は、小吏が贓を犯すとは同論せず。

(1) 庫子は、各種倉庫の出納を掌る下級胥吏。一定年限を務めると、州または司縣の司吏に遷れるほか、財務關係の錢穀官にも出職できた。有出身とは、その入流出職の資格を持つこと。『元史』卷八三、選舉三、銓法下、凡庫藏司吏庫子等出身に詳細な規定がある。

(2) 添給祿米。庫子の本俸については、『元典章』卷十五、戸部一、

祿廩冒頭の一覽表に代表的なものを擧げている。

八九 諸て、掾史出身の應^{まき}に入流すべき、或いは職官を以て轉補せしもの、^③ 但し、贓を犯さば、並びに吏員と同じく坐して除名す。府・州・縣の首領官の朝命にあらざる者は、吏員に同じ。

(1) 『元典章』卷四六、刑部八、取受、吏員贓滿一體追奪(皇慶元年四月)に同文がある。

(2) 掾史は、掾史の誤り。省掾・令史の略稱。吏職では最上級に位する。考滿に伴い、從六品から從九品の文資流官に任用された。『南村輟耕錄』卷二、令史。國朝、凡省臺院吏、曰掾史。蜀江南行臺作令史者、蓋緣至元十四年初立行臺日、御史大夫授三品秩故也。後雖陞一品、而樂因循者、不爲申明改正、西臺立、視南臺已陞品秩、則曰掾史焉。

(3) 吏員が品官に陞ること。入流出職ともいう。牧野修二『元代勾當官の體系的的研究』第五章第七節「考滿吏員の入流」に、詳細な論證がある。

(4) 以職官轉補。七品以下の受敕職官が吏職たる掾史に就くことを想定している。一定期間、掾史を勤めあげれば、一階上の官職に昇進できたのである。

(5) 朝命。宣敕によって發令される中央人事。

【解説】 品官候補の吏員、または吏職を勤める品官を裁くときの身

分問題を規定している。『明令』吏令・宣使等與吏同（二〇）もこれと共通する。

九〇 諸て、吏員、取受して眞犯^①にあらざる者は、除名せず^②。

（一）眞犯。律文に明記された定型的な罪名の謂で、「准某罪論」「以某罪論」などとして、他條で準用される。『唐律』名例五三・稱反坐罪之等には「稱以枉法論及以盜論之類、皆與眞犯同」と定める。

（二）不除名。『元典章』卷四六、刑部八、取受、贓罪條例（至大四年三月十八日）の「吏人犯贓、終身不敘」と對比される。

九一 諸て、流外官^②、民詞を越受せし者は、答一十七、首領官は、二十七、過を記す。

（一）『元典章』卷五三、刑部一五、問事、人吏不得問事では、令史・宣使をはじめ廉訪司の書吏・奏差などについて、訴訟を受理することを禁止している。

（二）流外官。品階を持たない官職。流内官の對語。巡檢のほか、提控案牘・都目・吏目・典吏などの首領官がこれに相當する。『元典章』卷七、吏部一、職品の内外諸官員數によると、儒學教授・醫學教授・蒙古教授・陰陽教授といった、本來は流内官である者の中にも、品級の無い流外職があったことが分かる。

九二 諸て、臨民の官^①、職田なき州・縣において、その入を民より虛徴する者は、罪を斷じ職を解き、過を記す。

（一）臨民官。管民官のこと。管民長官と正官から構成される。牧民官と同じ。

（二）職田。官田の一種で、佃戸を招募して耕作させ、その收益を祿米とは別に官員の給與に充てる性格のもの。『通制條格』卷一三、祿令、俸祿職田（至元二十一年五月）には、地方官に給付すべき職田の面積を掲載している。

九三 諸て、職官^①、頻りに茶酒の市肆及び倡優の家に入る者は、罪を斷じ職を罷めしむ。

（一）『元典章』新集刑部、諸官犯姦、縣尉將樂女奸宿に實例がある。

九四 諸て、監臨の官^②、弓手を私役すれば、答二十七。三名已上は一等を加う。弓手の馬を占騎すれば、答一十七。並びに過名を記す^④。本管の官吏の輒^{みだり}に應副する者は、各々一等を減ず。

（一）『元典章』卷五四、刑部一六、私役、防禁盜賊私役弓手に同文がある。

（二）監臨官。直接監督・統制の責務を持つ官。『唐律』職制律、監主受財枉法では、疏議に「監臨主司、謂統攝案驗及行案主典之

類」とあり、『唐律』名例五四、稱監臨主守には「凡稱監臨者、内外諸司統攝所屬、有文案相關涉、及雖非所管百姓、但有事在手者、即爲監臨」とされる。主守とは、實務に直接する流外職をさす監臨の對語。本條では、本管官吏に相當する。『至順鎮江志』卷二三、力役、弓手によると、錄事司判官・州判官・縣尉・巡檢などがこれらに含まれる。

- (3) 弓手。民戸に對する力役の一つ。主に縣尉や巡檢の配下で犯人捕縛や警邏活動にあたった。『元史』卷二〇一、兵四、弓手。元制、郡邑設弓手、以防盜也。内而京師、有南北兩城兵馬司、外而諸路府所轄州縣、設縣尉司・巡檢司・捕盜所、皆置巡軍弓手、而其數則有多寡之不同、職巡邏、專捕獲。官有綱運及流徙者至、則執兵仗導送、以轉相授受。外此則不敢役、示專其職焉。
- (4) 記過と同じ。前掲『元典章』のように、標附過名とも表現される。

- (5) 應副。北監本は「應付」に作る（中華書局本、校勘記）。『吏學指南』に「應副、謂料度支與也」といい、『明律國字解』には「應副は、わたすことなり」とあるように、應副・應付はいずれも、要請に應じて錢物などを給付する意味である。ここでは弓手の人員や馬匹を、監臨官の要求に應じて、本管官吏が私用に提供することが問題とされている。

【解説】『唐律』擅興二四・私使丁夫雜匠と同様の組立てをとる。

『明律』兵律・私役弓兵（二四七）と直接關係するが、かなり簡潔な内容となっている。

九五 諸て、内外の官吏、疾病の百日に滿つる者は、^{けつゐん}闕と作し、期年の後に仕せむ。^②

- (1) 『元史』卷三三、選舉三、銓法中。官員給假。至元八年、省准、在任因病求醫并告假侍親者、擬自離職住俸日爲始、限一十二月後聽任。其之任官果因病患事故、不能赴任、自受除日爲始、限一十二月後聽仕。『元典章』卷一一、吏部五、作闕、病假百日作闕にも同文がある。

- (2) 期年後仕。注1の『元典章』にある「自離職住俸日爲始、限一十二月後聽仕」と對應する。病氣療養のため離職すれば、俸給の停止から一十二年のちに再任が認められた。

【解説】宋代でも官員の給假は百日を最高限とした。『慶元條法事類』卷一一、職制門、給假。假寧令。諸命官在任因病假滿百日、所屬勘驗、無規避、放離任訖、報原差舉官司。通判・路分都監以上、具奏聽旨。

九六 諸て、^①職官、二罪を連犯し、輕罪已に斷じ、重罪始めて發すれば、罪は已斷に従い、^②殿降は後發に従う。^③

- (1) 『元典章』卷四六、刑部八、取受、諸犯二罪俱發以重者論に關

連記事を検出できるが、量刑上の論理にかなりの違いがある。

三〇六條も參看。

(2) 複数の犯罪について、先に露見した輕罪を斷罪したあとで、

重罪が發覺すれば、前掲の『元典章』は「重者更論之、通計前

贓、以充後數」と、唐・明律と全く變わらぬが(三〇六條も同

じ)、本條では、重罪と輕罪の差し引きは、刑罰として追加執行

せず、あくまで職務停止しないしは降格人事で對應すると言明し

ている。

(3) 殿降。殿年降敍の謂で、昇級停止や品階の低い官職に降格す

る處分を指す。

【解説】 併合罪に関わる規定である。『唐律』名例四五・二罪從重、

及び『明律』名例・二罪俱發以重論(二五)、さらに『明令』刑令・

二罪俱發(八九)などと關係する。これらが『元典章』の文書や刑

法志の三〇六條と完全に一致するのは對照的に、本條では些か論

理を異にするのは、各條の前提となった事件の違いに起因するもの

かと思われる。『譯註』五、二八四―二八九頁も參看。

九七 諸て、過ありて問を被り、死と詐りて在逃する者は、杖六十

七。官ある者は、職を罷めて敍せず。贓多き者は、重きに從いて

論ず。⁽²⁾

(1) 『元典章』卷四六、刑部八、取受、軍官詐死同獄成不敍と一部

合致する。

(2) 贓多者從重論。枉法・不枉法を問わず、贓額が多く、杖六十

七または罷職不敍よりも刑罰が重くなれば、その贓罪で斷罪す

るというもの。ここでは『唐律』名例四五・二罪從重に從い、

併合罪の吸收主義が適用されている。

【解説】 『唐律』詐僞二〇・詐疾病及故傷殘に基づくが、『明律』刑

律・詐僞・詐病死傷避事(三八八)との共通點が目につく。

九八 諸て、行省以下の大小司存の長官、非理にその首領官を折辱

する者は、これを禁ず。首領官に過失あらば、上司に申するを聽^き

し、擅^{あた}に問うを得ず。長官の處決公ならず、首領官が執覆^しするも

從わざれば、上司に直申するを許す。

(1) 『元典章』卷一三、吏部七、公事、首領官執覆不從許直申部に

同じ内容の記述がある。

(2) 執覆。調べ直す、或いは再審を強く主張する意と想定される。

前掲『元典章』では「今後隨路總管府、凡一切所行公事、若

有府官所見不同・處決偏枉、如經歷・知事從正執覆三次不從、

令經歷司官員由直行申部、詳究定奪」とあって、上司に直申す

る主體は、首領官の經歷司官と分かる。即ち、長官に裁定の不

當性を再三進言したにもかかわらず、長官が聞き入れないとき

は、首領官は直接刑部へ訴え出ることを許されていたのであ

る。宮崎「法制」にも言及がある（二二九頁）。

【解説】『明令』刑令・擅開幕官（七九）は、本條の前半と概ね一致する。

九九 諸て、隨朝の官^①、故なくして公聚せざる者は、罪に坐して選待せしむ。^③

（１）元朝における官職は、大きく在內と在外とに分かれ、在內にはさらに朝官と京官の別があった（『元典章』卷七、吏部一、職品、内外諸官員數）。隨朝官とは、この朝官のうち、常例の朝見に參列する常參官にあたると解される。

（２）公聚とは、朝會に出る朝參をさす。『明律國字解』に「朝參と云は、毎日の朝會に出るなり。是京官の上のことなり。故に在內と云」とある。勿論、官員が毎朝官衙に出勤して一同に會することも、公聚の範疇で捉えるべきであろう。宮崎「法制」は、「元代の官吏は中央地方を問わず、毎日早朝官衙に出勤し、一同に集會（圓坐・圓聚）して公事を議し、書類に連名署押（圓署・圓簽）しなければならなかった。もし故なく缺席すると處罰された」（二二八頁）と説明する。

（３）坐罪選待。罪に當て職を解き、役替えを吏部に要請することと考えられる。

【解説】『唐律』の職制五・官人無故不上に基づく。『明律』吏律・

無故不朝參公座（五七）は、刑法志の規定をほぼ踏襲したものとなっている。

一〇〇 諸て、職官、已に宣敕を受け、地遠く官卑なるを以て、輒^{みだり}に故を稱して赴かざる者は、受くる所の命を奪い、謫して種田せしむ。^②或いは、任に在りて病と稱して去る者は、三年の後に二等を降して敘す。^③その同僚の私に^{しが}徇いて文書を與えし者は、一等を降して敘す。^④

（１）この宣敕は、官僚の辭令で、告身を意味する。『草木子』卷三下、雜制篇。元之宣敕、皆用紙。一品至五品爲宣、色以白。六品至九品爲敕、以赤。雖異乎古之詔敕用織綾、亦甚簡古而費約、可尙也。

（２）官僚身分を剝奪し、屯田の耕作に従事させる處罰である。この種田には、芍陂・洪澤などの内地が選ばれていると考えられる。『元史』卷一〇、世祖紀七、至元十五年十一月甲午の「敕已除官僚不之任者、除名爲農」は、赴任忌避に對する除名不敘に觸れるに過ぎないが、同書卷十二、世祖九、至元二十年九月戊寅の「史弼陳弭盜之策、爲首及同謀者死、餘屯田淮上、帝然其言。詔以其事付弼、賊盜耕種內地、其妻孥送京師以給鷹坊人等」などの記載は參考となる。

（３）『元典章』卷一〇、吏部四、不赴任、不赴任官員に同文がある。

『元史』卷二二、成宗紀四、大德八年三月丁巳。詔、軍民官已除、以地遠官卑不赴者、奪其官不敘。軍官擅離所部者、悉遣還翼、違者論如律。軍人不告所部私歸者、杖而還之。

- (4) 『元典章』新集吏部、職制、除赴、官員不赴任及到任推故還家に關連の記事がある。徇私與文書とは、病氣と詐稱して離職する官員に、事情を知りつつ保證する文書を給付することである。

【解説】『明律』吏律・職制・官員赴任過限（五六）と若干關係する。同様に大臣專擅選官（四九）も參照されるべきである。

- 一〇一 諸て、命を受けし職官、闕期已に及び、或いは辨證・勾稽・喪葬・疾病の公私諸務ありて、妨阻して任に之くあたわざる者は、始末を具して、本處の有司に詣りて自陳するを許す。保勘し據を給して再敘するに、並びに元注の地方に任ず。有司の保勘、實ならざる者は、並びにこれに坐す。

- (1) 『元典章』卷一一、吏部五、作闕、不能之任作闕にほぼ同文がある。

- (2) 闕期已及とは、前掲『元典章』の「已過百日作闕者」にあたる。缺勤が百日に達し、「作闕」の扱いを受けること。なお九五條を參照。

- (3) 注1の『元典章』の「與人辨證公事及有經手錢穀照算未了、

相妨不能之任」の文と對應。辨證は事件の辨別證明、勾稽は帳簿業務。いずれも赴任の妨げとなる事由として列擧されている。

- (4) 確かに調べたと請け合うのが保勘であり、そのむね記した公據を給付するのは給據という。やむなく赴任できなかった者は、所轄の官司に申し出て證明書をもらい、いちど資格の失効したポストに再度任官できる仕組みであった。

- 一〇二 諸て、除を受けし官員、闕次いまだ及ばざるに、輒に先に任所に往きて、居住・守代する者は、本管の上司よりこれを究す。

- (1) 『元典章』卷一〇、吏部四、守闕、守闕原處聽候に同文がある。受除官員は、遷轉官員に作る。中央人事の對象であることを意味する。

- (2) 闕次とは、守闕（ポスト待ち）の優先順位をいう。従つて、闕次未及とは、就任の順番が回つてきていないこと。こうした、任官候補者が親屬・僚從をひき連れ、豫定の任地において居住・守代（守闕）することが取締の對象となっているのである。

- 一〇三 諸て、各衙門、輒に聽除及び罷閑・無祿・私己の人を將て差遣する者は、禁ず。

- (1) 罷閑。罷免され現職にない官員。『明律國字解』に「罷閑とは、

罷黜閑住と云ことなり」とある。

(2) 差遣。この場合は各官廳の裁量で臨時に行われる任官人事。

『明律國字解』は「役をあててさし遣はすなり」とする。

【解説】『明律』吏律・職制・舉用有過官吏（五四）と若干關連する。

一〇四 諸て、職官、親の死するも喪に奔かざるは、杖六十七、先職より二等を下し、雜職もて敘す。いまだ喪を終わらずして官に赴くは、答四十七、一等を降し、終制の日に敘す。もし罪ありて、親の喪と詐稱するは、杖八十七、除名して敘せず。親は久しく沒せしに、始めて死を稱するは、答五十七、見任を解き、雜職もて敘す。凡そ父母の憂に丁らざる者は、罪は喪に奔かざると同じ。

(1) 『元典章』卷四一、刑部三、不孝の、王宣慰不奔父喪、及び藏榮不丁父憂に實例があるが、量刑上一致しない箇所も多い。なお「若有罪詐稱親喪」以下に對應する記事は、後出の律文を除き見當たらない。

(2) 雜職は、商稅・專賣・倉庫などを擔當する下級財務官の總稱。宋代の監當官にあたる。前代と同じく、親民の官に較べ、つねに一段低く扱われた。

(3) 服喪期間を終えずに職任に就くこと。この量刑は、前掲の藏榮不丁父憂の記述と合致する。終制は、服喪期間を終えるこ

と。

【解説】『唐律』詐僞二一・父母死詐言餘喪、及び『明律』禮律・儀制・匿父母夫喪（一九八）と關係し、とりわけ後者との連續性を色濃く認められる。

一〇五 諸て、官吏、私罪もて逮を被り、已招・未招を問うなく、父母の事故に罹いし者は、その丁憂に奔赴するを聽し、終制の日に追問す。公罪は並びにこれを矜恕す。

(1) 『元典章』卷五三、刑部一五、問事、被罪終制究問に同じ内容について詳細な記事がある。

(2) 私罪とは公務に關係なく私人として犯す罪のすべて、および意圖をもって公務上で不正・違法をなすものをいう（『譯註』

五、一〇六頁）。

(3) 已招・未招。すでに自らの罪狀を認めた者と、いまだ承伏していない者。

(4) 父母大故。父母の喪のこと。大喪、大憂ともいう。

【解説】公罪の扱いでは、『明令』吏令・官員丁憂（二三）と全く同じである。

一〇六 諸て、職官、父母亡るも、喪を匿して宴樂を縱にし、國哀に遇いて、私家に音樂を設くるは、並びに罷めて敘せず。

(1) 『元典章』卷四一、刑部三、不孝の張大榮服内宿娼、及び汪宣慰赴奔父喪に實例がある。

(2) 國哀。國喪のこと。國忌ともいう。『唐律』雜律二。諸國忌廢務日作樂者、杖一百、私忌減二等。

【解説】 刑法志の量刑は、もとになる『唐律』雜律二・國忌作樂に較べて格段に厳しい。前半部分では、『唐律』職制三〇・匿父母喪、及び『明律』禮律・儀制・匿父母夫喪（一九八）との一致が認められる。

一〇七 諸て、外任の官員、謁告するに、應有假故は、曹狀を具して所屬に報じ、仍お籍を置き、以てこれを記す。託故ある者は、風憲官糾してこれを罪す。

(1) 『通制條格』卷二二、假寧、曹狀（至元二十八年八月）にほぼ同文がある。

(2) 假故。告假事故、假告事故を略した言い方で、祝祭日・病患・患病侍親・病假・遷葬を理由に、地方官員に與えられる休暇を指す。

(3) 曹狀。内外の官員が各種の事情で三日以上任務を離れて休暇をとる場合に、その旨を記し、殿中司に報告するための文書（一四三條を參看）。

(4) 託故。『明律國字解』は「託故は、ことにかこつくるなり」と

説明する。注1の『通制條格』に「推稱病故」「輒便託疾」「推稱事故」と見える。

(5) 風憲官。監察官の總稱。御史臺官はもちろん、行臺・肅政廉訪司の官員もすべて含まれる。

一〇八 諸て、官吏、祖父母・父母を遷葬するには、假二十日を給し、並びに馬程日に七十里を除き、限内の俸錢は仍おこれを給す。限に違いて至らざる者は、勒停す。

(1) 『通制條格』卷二二、假寧、奔喪遷葬（至元二十七年十二月）、及び『元典章』卷一一、吏部五、假故、奔喪遷葬假限に同じ趣旨の記事がある。

(2) 『明律國字解』は「遷葬は、改葬の暇なり。是は異國は客死多して、歸葬に能はぬを、年を経て後、其子、官人になりて歸葬する暇なり」と解説するように、祖父母・父母を故郷の墓地に改葬すること。なお『元史』中華書局本の校勘記は、「遷葬」の上に「奔喪」を補うべきとする。

(3) 遷葬のため往復する距離を、騎馬で一日七十里と考え、これに要する日数が計算される。この日数は「假二十日」に含まず、別に「給假」されるのである。

(4) 遷葬に必要と認められた期間の給與は支給するというもの。

(5) 勒停とは、現職の強制停止處分。『吏學指南』勒停、謂住其職

役、不許勾當也。

【解説】 遷葬・奔喪に伴う給暇については、『慶元條法事類』卷一、職制門、給暇に載せる假寧令に、詳密な規定があつて参考になる。

一〇九 諸て、職官の任滿の解由、應に給すべくして給さず、應に給すべからずして給し、及び過あるも開寫せざる者は、罪は有司に及ぶ。解由、部に至るに、功罪を増損して實を以てせざる者も、亦たかくの如くす。

(1) 『通制條格』卷六、選舉、選格に引く至元新格(「彙輯」第一四)、及び給由(至元二十二年九月)、さらに『元典章』卷一一、吏部五、給由に載せる給由勘俸月日と官員給由開具過名に關連の記事がある。

(2) 有司とは、解由を發給した官廳をさす。

(3) この部は吏部を指す。

【解説】 一一〇條とともに、『明律』吏律・職制・官吏給由(五九)の原型ともいえる。

一一〇 諸て、罷免の官吏、敍復せられて、由を給するにその過名を匿す者は、罪は初め由を給せし有司に及ぶ。

(1) 『元典章』卷一一、吏部五、給由、官員給由開具過名に同じ趣

旨の記事がある。

(2) 敍復。一度罪を犯し罷免された官吏が再び敍任されること。趙升『朝野類要』卷五、敍復。被責之久、該恩敍復舊官者、自有格法。

(3) 匿其過名。その官員がもと犯した罪名を解由に記さないこと。

一一一 諸て、過を匿して仕を求め、已に除せられて事覺わるる者は、笞四十七、追奪して敍せず。

(1) 追奪不敍。官員身分の證しである宣敕を沒收して、以後敍任を許さないこと。

【解説】 『明律』吏律・職制・舉用有過官吏(五四)と同じ内容を持つ。

一二二 諸て、職官、年致仕に及ぶも、止むるを知らざる者は、廉訪司これを糾黜す。

【解説】 官僚が七十歳になれば致仕するのは、歷代變わらぬ原則である。本刑法志は、勇退を瀝る官員を、廉訪司に彈劾させるとわざわざ斷る點で興味深い。關係記事は、『元史』卷八四、選舉四、考課、官員致仕のほか、『通制條格』卷六、選舉、致仕、及び『元典章』卷一一、吏部、致仕に散見される。

一一三 諸て、職官、罪を被りて、殿年を理算するには、問を被り停職するの月日を始と爲す。

(1) 『元典章』卷四六、刑部八、取受、職官殿年自被問停職月日計算に同文がある。

(2) 理算殿年。「殿三年」の日數計算を行うこと。贓罪十二章によれば、不枉法に問われた際に適用される處分規定である。

(3) 以被問停職月日爲始。「殿三年」を、容疑者として取調べられることになり、職務停止處分とされた日から數えはじめること。

一二四 諸て、遠方の官員、親の年七十以上なる者は、元籍の有司保勘して、近闕に量注し、養に便ならしむるを許す。冒濫する者は、罪に坐す。

(1) 『通制條格』卷六、選舉、選格（至大三年十一月）、及び『元典章』卷八、吏部二、選格、親老從近遷除、さらに『元史』卷八三、選舉三、銓法中、官員便養に同じ内容の記述がある。

(2) 親年七十以上者。前掲『通制條格』では「親年七十以上、別無以次待丁」とある。

(3) 年七十以上の親の住む元籍付近のポストに就けること。量注は、前掲『通制條格』に「斟酌銓注」と作る。

【解説】 宋代でいう家便差遣あるいは近便差遣に相當する措置に觸

れる條項である。『明律』禮律・儀制・棄親之任（一九九）とも關係がある。

一一五 諸て、職官、王事に没せし者は、その應に繼ぐべきの人をば、二等を降して蔭敘す。

(1) 『元典章』卷八、吏部二、承蔭、民官陣亡蔭敘、及び『元史』卷八三、選舉三、銓法中、至元二十七年の條に同文がある。

(2) 職官没於王事。注1の文書は、いずれも「民官陣亡」とする。文官が軍事行動に關係して殉職・戰死すること。宋代では、下級の武階か選人格の位階が授與される、主に低位の武官を對象とする恩典であった（梅原郁『宋代官僚制度研究』同朋舍、一九八五、四四〇頁）。

(3) 其應繼之人、降二等蔭敘。前掲『元史』には「其子比父職降二等敘、其孫若弟復降一等」とあり、刑法志の書き方は不十分であることが分かる。蔭敘は、恩蔭によって敘任すること。

【解説】 『明律』吏律・職制・官員襲蔭（五一）とも關連するが、何よりも『慶元條法事類』卷二、職制門、歿於王事に見える諸法との關わりに着意すべきであろう。

（長井千秋）

一二六 諸て、内外百司の五品以上、表章を進上するには、並びに

蒙古字^①を以て書す。不敬を敢えてするなかれ。仍お漢字を以てその副を書す。

(1) 『元典章』卷二、禮部四、蒙古學、用蒙古字に同文がある。

(2) 五品以上の衙門を意味する。『元典章』卷二八、禮部一、蒙古學、表章五品官進賀の「五品以上長官、俱得進表稱賀」や、同書同卷、各衙門進賀表箋の「各處行省・宣慰司・轉運司・各路總管府屬萬戶府及五品以上衙門、應有進賀表箋」などを參看。

(3) 表章。注1の『元典章』は、貢進表章に作る。その體裁は『元典章』卷二八、禮部一、表章格式にも見え、主に慶賀などの場合に用いられた。『吏學指南』には「表、釋名曰、下言於上、曰表、謂思之於内、表之於外也」と説明する。

(4) パスパ文字の謂で、蒙古新字ともいう。至元六年（一二六九）、モンゴル語の表記のため、從來のウイグル文字に代って施行された。『元典章』卷一、詔令一、行蒙古字には、「自今以後、凡有鹽書頒降、並用蒙古新字、仍以其國字副之。所有公式文書、咸遵其舊」とある。

【解説】 以下の五條は、諸々の官廳文書に關わる規定となつてゐる。これらを見る限りでは、モンゴル語またはウイグル語の表記方法に、元朝特有の現象を認めうるとはいえ、基本的な形式では、從來の中國王朝と殆ど變わつてゐない。

一一七 諸て、内外百司、凡そ進賀の表箋の繕寫・謄籍・印識は、各々式を以てす。その輒みだに廟諱・御名を犯す者は、これを禁ず。

(1) 表箋。皇室の誕生日や元旦にあたり、五品以上の臣下から宮中に上る慶賀の書狀。『六部成語註解』禮部。慶賀表箋、上皇太后・皇上者、曰表、上皇后・皇太子者、曰箋、皆慶賀之辭也。式とは、表章格式を指す。

(2) 繕寫・謄籍・印識。繕寫は、清書・淨書のこと。文書を集めて書き記す意味もある。謄籍は、帳簿に寫しをとる、印識は、印影のことをいう。『南村輟耕錄』卷二〇、碑刻印識。李和、錢塘人。國初尙在、舊故書爲業、尤精於碑刻。凡博古之家、或有贗本求一印識、毅然弗從。其印文、李和鑑定、石刻印。

(3) 廟諱・御名。廟諱は先帝の御諱、御名は今上の御名。『元典章』卷二八、禮部一、進表、表章迴避字様によれば、至元八年（一二七二）には、表章に用いてはならない文字一六〇餘を指定するとともに、「其餘可以類推、或止避本字、或隨音旁避、及古帝王名號不用數目字、亦不許用多」との原則が提示されている。

【解説】 『唐律』職制二五・上書奏事犯諱に基づいたもので、『明律』吏律・公式・上書奏事犯諱（六七）にも踏襲される。『唐律』では、宗廟諱とのみあるが、ともに慶賀表箋には限定せず、廣く上書・奏事を對象とする。ここでは、『明令』禮令・表箋儀式（四六）との一致がむしろ目につく。

一一八 諸て、内外百司、應に^②符付を出給すべきに、額設の譯史^③ある者は、並びに蒙古字を以て書寫す。

(1) 『元史』卷一三、世祖紀一〇、至元二十一年五月戊午。敕中書省、奏目及文冊、皆不許用畏吾字、其宣命・符付並用蒙古書。

(2) 符付。上級官廳が下司・屬官に下す文書。元代の史籍では、中書省や御史臺から出される省符や臺符の實例を多く目にする。『史文正續輯覽』大概與照會同。但上司行所屬衙門居多。

(3) 譯史。翻譯官、令史の下に位置する胥吏ポスト。額設とは、定員枠のあること。譯史の下に蒙古書寫が置かれることもある。その職掌は、皇帝側近の書記官たる必闡赤(bichig)と近く、共に蒙古翰林院での試験を経て各衙門に配屬された。『元典章』卷一四、吏部八、案讀、用蒙古文字標譯事目。至元八年正月内欽奉聖旨教習蒙古文字條畫内一款節該、省部臺院、今蒙古子孫弟姪、作蒙古必闡赤頭兒、凡有行移文字、止用蒙古字樣、寫本宗事目、仍令習學漢兒公事。其諸内外諸衙門亦同、並用識蒙古字人員充必闡赤。欽此。ほかに宮崎市定の前掲「元朝治下の蒙古的官職をめぐる蒙漢關係」一一一―一二七頁も參看。

一一九 諸て、内外百司、兼設の蒙古・回回の譯史ある者は、行移^②及び勘合文字に遇うごとに、標譯・關防^③し、仍お兼ねてこれを用^④う。

(1) 前項の注3及び同書同卷の檢目譯史繫歷には、本條と同じ規定がある。

(2) 元代の官文書では、漢語・モンゴル語・ウイグル語の何れを用いるかによって異なる書式を採らざるを得なかった。『草木子』卷三下、雜制篇。元朝行移文字、其正書則自前而後、蒙古書則自後而前、畏吾兒字則橫書、別立譯史。

(3) 『明律國字解』に「勘合は半印勘合とてわり印の文書なり。一切在外の驛遞を往來するには、勘合にて道中のまかないをすることなり」とある。

(4) 標譯とは、書面の要件を譯出・明記すること。注1の檢目譯史繫歷の「凡有行移文字、並用蒙古字、標寫本宗事目」もこれを裏書きする。同様に、關防については、「各案合譯文書、其貼書人等多有、先行印押了畢而後譯者有之、或不經標譯印押發遣者有之」とあるように、不正を防ぐため、文書の末尾に捺印すること。關防印記や關防牌面とあっても、意味は同じである。

(5) 蒙古・回回の譯史が共にいれば、モンゴル語とウイグル語の翻譯を兩方作成させる意味、と理解される。

一二〇 諸て、内外百司、公移は、尊卑序あり、各々定制を守る。惟だ執政出でて外郡を典り、部に申する公文は、姓を書して名を書せず^④。

(1) 官廳または官員の間で交わされる文書には、品秩や所轄の有

無によって詳細な規則があった。『元典章』卷一四、吏部八、行

移、品秩行移等事に掲げる文書形式の一覽のほか、田中謙二

「元典章文書の構成」『東洋史研究』二三四、一九六五、九三、

一〇二頁も参看。

(2) 執政。金制では尙書左右丞・参知政事の總稱。元朝でも、宰

相たる左右丞相・平章政事に對し、左右丞(左右轄)・参政(参

知政事)をこう呼ぶ。

(3) 外郡。地方の路・府・州。注4の記事は、外任に作る。後出

するように、刑法志では、外郡のほか、郡縣、郡國の語句がほ

ぼ同じ方向で頻用される。

(4) 『元典章』一四、吏部八、行移、執政官外任不書名に引く舊例

とほぼ一致する。この部とは六部である。

【解説】宰相・執政が下野して、府・州の知事になるのは、宋代よ

り普通にあること。これが原因で、文書の往還に、しばしば問題を

生じた。田中謙二『朱子語類』外任篇譯注(二)『東洋史研究』二

八一・三、一九六九、一〇〇〜一〇二頁、を参照。

一二一 諸て、人臣の聖旨を口傳して事を行う者は、これを禁ず。

(1) 『元典章』卷一四、吏部八、案牘、明立案驗不得口傳言語では、

聖旨に限らず、様々な公式通達を對象に述べる。『元史』卷五、

世祖紀二、至元元年八月乙巳。又頒陝西四川・西夏中興・北京

三處行中書條格。……禁口傳敕旨及追呼省臣官屬。同書卷一七

三、崔彥傳にも「行臺官言、去歲桑哥既敗、使臣至自上所者、

或不持璽書、口傳聖旨、縱釋有罪、擅籍人家、眞僞莫辨。臣等

請、自今凡使臣、必降璽書、省臺院諸司、必給印信文書、以杜

奸欺」とあり、皇帝の意向は、必ずしも書面ではなく、多くの

場合、特定の官僚の口傳によって通達されていたことが分か

る。

【解説】聖旨(天子のみことば)は口頭で執行してはならない。元

朝では、これが繰り返されるところに、文書主義の徹底していた漢

人王朝との異質さが窺われる。

一二二 諸て、大小の機務は、必ず中書に由る。惟だ樞密院・御史

臺・徵政・宣政の諸院は、自ら職とする所を言うを許す。②その餘

の中書に由らずして、輒に上聞し、既に上聞するに、また中書に

由らず、徑ちに所司に下してこれを行う者は、違制を以て論ず。③

所司も亦た稟白せずして、輒に受けて以てこれを行う者は、監察

御史・廉訪司よりこれを糾さしむ。④

(1) 『元典章』卷二、聖政一、振朝綱に載せる至大四年(一二三二)

三月登寶位詔書内一款に同文がある。『元史』卷二四、仁宗紀

一、至大四年三月庚寅。凡尙書省誤國之臣、先已伏誅、同惡之

臣、亦已伏誅、同惡之臣、亦已伏誅、同惡之臣、亦已伏誅、同惡之

臣、亦已伏誅、同惡之臣、亦已伏誅、同惡之臣、亦已伏誅、同惡之

徒、亦已放殛、百司庶政、悉歸中書、命丞相鐵木迭兒・平章政事李道復等、從新拯治。……諸衙門及近侍人等毋隔越中書奏事。

- (2) 『元史』卷二九、泰定帝紀一、至治三年九月己亥に「敕諭百司、凡銓授官、遵世祖舊制、惟樞密院・御史臺・宣政院・宣徽院得自奏聞、餘悉由中書」とあり、元來は世祖時代の規定と分かる。なお徽政院が見えず、宣徽院を擧げるのは、英宗の延祐七年(一二三〇)の政變によって廢止されていたためである。

- (3) 違制は、制書に違反したり、主旨を取り違えて施行すること。『唐律』職制二二。諸被制書、有所施行而違者、徒二年。失錯杖一百。これが違制を定めた條項であることは、『長編』卷一四三、慶曆三年九月丁卯からも確認できる。なお『慶元條法事類』卷一六、文書門、詔敕條例に引く職制敕には「諸因職事例受制書而違者、杖一百(躬彼而違者、自從違制本法)」とあって、『明律』吏律・公式・制書有違(六四)とも一致しており、罰則も大幅に輕減されている。

- (4) 『元史』卷二二、武宗紀一、至大元年七月、内外大小事務、並聽中書省區處。諸王・公主・駙馬・勢要人等、毋得攪擾沮壞。近侍臣員及内外諸衙門、毋得隔越聞奏。各所行省・宣慰司及在外諸衙門等官、非奉聖旨并中書省明文、毋得擅自離職、乘驛赴京、營幹私事。同上、大德十一年十月壬子、從中書省臣言、凡事不由中書、輒遣使并移文者、禁止之。

【解説】 元朝において、絶大な權力を持つ中書省は、天子に代わって政務の一切を總攬した。若干の例外を除き、上聞から聖旨の下達に到るまで、中書を経由しなければ、敢えて違制に問われるのも、こうした事情を背景としている。元來本條は、仁宗の即位を宣する詔書の一部であって、その背景には、武宗の崩御に續く尙書省の廢止と鐵木迭兒ら中書官僚の實權掌握があった。植松正「元代條畫考(七)」『香川大學教育學部研究報告』第一・五八、一九八三、四〇〇、四四頁にも詳しい説明がある。次の三條を含め、中書及び六部に關する條文が續いている。

一二三 諸て、中書の機務は、その議を泄す者あらば、泄す所の事を量り、聞奏して罪を論ず。

【解説】 『唐律』職制一九・漏泄大事、並びに『明律』吏律・公式・漏泄軍情大事(七〇)と關連する條項である。前條と同様に、中書省が皇帝權力を代行するという、元朝に特有の状況の中で捉えるべきであろう。

一二四 諸て、省部の官、名の宿衛に隸する者は、晝は出でて事を治め、夜は入りて番直す。

(1) 『元史』卷二四、仁宗紀一、至大四年九月丙寅。敕省部官、勿托以宿衛廢職。同書卷一八二、宋本傳。泰定元年、除監察御史。

……又言、中書宰執、日趨禁中、固寵苟安、兼旬不至中堂、壅滯機務、乞戒飭臣僚、自非宿衛日、必詣所署治事。皆不報。

- (2) 宿衛。『元史』卷九九、兵二。其它預怯薛之職而居禁近者、分服御・弓矢・食飲・文史・廬張・醫藥・卜祝之事、悉世守之、雖或才能授任、使服官政、雖貴盛之極、然一日歸至內庭、則執事如故。『南村輟耕錄』卷一、雲都赤。國朝有四怯薛太官。怯薛者、分宿衛供奉之士爲四番、番三晝夜。凡上之起居飲食、諸服御之政令、怯薛之長官皆總焉。中有雲都赤、乃侍衛之親近者、雖官隨朝諸司、亦三日一次輪流入直、負骨朶於肩、佩環刀於腰、或二人、四人、多至八人(三三條も參看)。

【解説】 元朝では、怯薛(Keshik)は特別な仕途の一つと目され、高級官僚となる者を輩出した。なかでも、怯薛長は必ず隨朝官員を兼ねるが、皇帝の最も側近を勤める彼らは、それぞれの官職とは關係なく、相變わらず宿衛に番直した。そのため中書・六部ではしばしば實務が遲滯し、政治的な懸案となっていた。片山共夫「怯薛と元朝官僚制」『史學雜誌』八九一二、一九八〇。

- 一二五 諸て、^①檢勾官は中書及び六曹の務を勾檢す。その稽違^②あれば、省掾は省に呈して罰を論じ、部吏は就きて罪名を録し、開呈^③す。

- (1) 『元史』卷八五、百官一、中書省掾屬。檢勾官四員、正七品。

掌檢校左右司・六部公事程期・文牘稽失之事。書吏六人。末尾に大德六年(一二三〇)の設置とあるが、同書卷一六、世祖紀一三、至元二十七年(一二九〇)八月己巳の「置中書省檢校官二員、秩正七品、俾考覈戸・工部文案疎緩者」との記載をみると、實は増員に伴う組織改編の繫年を指すものと推測される。

- (2) 事務滯留、又は職務懈怠をいう。稽緩と同じ。『吏學指南』は「稽遲、留滯曰稽、不速曰遲。違慢、事有乖曰違、心所怠惰曰慢」と定義する。

- (3) 中書・六部での事務遲滯が明白となれば、中書省の掾屬は罰俸に問われ、六部の胥吏は、正規の刑名に擬罪してから、上司に報告される。

【解説】 『明令』吏令・勾銷(九)によれば、明初には、地方各省の檢校官が、三箇月ごとに、同様な檢閱を行う原則があった。これは、元朝行省の檢校所を繼承したものであって、檢校(從七品)一名と書吏二名から成る當該部局でも、職掌は都省と殆ど變わらなかったことを窺わせている(『元史』卷九一、百官七、行中書省、各省屬官)。

- 一二六 諸て、^①行省、擅に^{みだり}軍人を役して營繕すれば、公廩といえども、奏請せざれば、猶お罪を議す。^②

- (1) 『元史』卷二〇、成宗紀三、大德四年六月甲子。詔各省自今非

奉命母擅役軍。『元典章』卷三四、兵部一、占使、禁治差役軍人にも同文が見え、『通制條格』卷七、軍防、擅差（大德四年七月八日）は、これと重複している。

(2) 『元史』卷二四、仁宗紀一、至大四年正月乙未。禁百官役軍人營造及守護私第。營造とは、普請・造作のこと。

【解説】『明律』工律・營造・擅造作（四四八）と多くの點で共通する。但し、『明律』では、營造のため、人夫を徵發するには、上司の許可を要するが、城壁・倉庫・官舎など、國家施設の修理については、軍人は上司の裁可なく使役してもよいとされる。以下一三二條までは、行省關係の規定である。

一二七 諸て、行省が軍官を差使するに、軍情にあらざる者は、これを禁ず。

(1) 『通制條格』卷七、軍防、差遣（大德十一年五月）に同文がある。

(2) 軍情。軍事機密、又は軍事行動に關わる機密文書。宋代の軍期と近い概念。『明律國字解』に「軍情は軍機と同じ。軍機と云は、軍兵を調發し、兵糧を催徵し、并に邊塞の注進加勢を乞文書のり、合戦の勝負に干る類のことを軍機と云なり。機は機密の義にて、右の類のことは隱密にすることゆへ、軍機と云なり」と解す。

【解説】行省管下の軍官は、何時でもその指揮權に服したわけではない。たとえ行省の公務であっても、軍事機密と關係がなければ、軍官を出張させることはできないのである。『明令』兵令・軍情（六七）によれば、軍情の傳達は、行省からは中書省と大都督府（樞密院）に行ない、御史臺には按察司から報告する定まりであった。

一二八 諸て、行省の長官二員には、金虎符を給して軍を典らしむ。惟だ雲南行省官のみは、皆な符を給す。

(1) 『元史』卷二六、仁宗紀四、延祐五年夏四月甲寅。樞密院臣言、各省調度軍馬、惟長官二人領其事。今四川省臣皆預、非便、請如舊制。從之。

(2) 『元史』卷九一、百官七、行中書省によれば、丞相（從一品）は常置されず、定員二名の平章政事（從一品）が行省長官となる場合が多かった。『元史』卷二一、武宗紀一、大德十一年冬十月丙辰にも「以行省平章政事總督軍馬、得佩虎符、其左丞等所佩悉追納」とある通り。

(3) 金虎符。虎關金牌、虎頭金牌、獅頭金牌とも呼ばれる長牌で、軍務のため萬戸クラスに與えられた。箭内互「元朝牌符考」『滿鮮地理歴史研究報告』九、一九二三（のち『蒙古史研究』刀江書院、一九三〇所收）の論考がある。

(4) 符。特定はできないが、恐らく虎符の一種であろう。『元史』

卷九八、兵一、兵制。至大四年十二月、省臣言、先是、樞密院奏准、雲南省宜遵各省制、其省官居長者一員、得佩虎符、提調軍馬、餘佐貳者不得干預、已受虎符者、悉收之。今雲南省臣言、本省籍軍士之力、以辦集錢穀、遇有調遣、則省官親率衆上馬、故舊制雖牧民官亦得佩虎符、領軍務、視他省爲不同。臣等議、已受虎符者、依故事、未受者宜頒賜之。制曰可。『元史』卷一八、成宗紀一によれば、雲南行省では、元貞元年（一二九五）に行樞密院が廢止され、長官は虎符を與えられている。因みに元朝の雲南を扱った論文として、松田孝一「雲南行省の成立」『立命館文學』四一八〜四二一、一九八〇、がある。

一二九 諸て、各處行省の所轄の軍官は、軍情怠慢なれば、提調軍馬官より斷遣す。その餘の雜犯は、受宣官より以上は咨稟し、受敕官より以下は就斷す。

(1) 『元典章』卷三九、刑部一、刑名、不得擅決品官に同文があり、同書卷五四、刑部一六、違錯、長官擅斷屬官にも引用されている。

(2) 鎮戍萬戶府及び管軍萬戶府に屬する軍官のことで、都鎮撫司を通じて行省の指揮を受けた。『元史』卷九八、兵一、總序。世祖時、頗修官制、內立五衛、以總宿衛諸軍、……外則萬戶之下置總管、千戶之下置總把、百戶之下置彈壓、立樞密院以總之。

遇方面有警、則置行樞密院、事已則廢、而移都鎮撫司、屬行省。(3) 軍事監視委員とも云うべきポスト、通常は、行省の長官が兼任する。『元史』卷九八、兵一。大德二年十二月、定各省提調軍馬官員。……至大元年十二月、丞相三寶奴等言、國制、行省佐貳及宣慰使不得提調軍馬、若遙授平章・揚州宣慰使阿憐帖木兒者、賞與成宗同乳母、故得行之、非常憲也。『明律國字解』は、提調を「上に立ちて吟味する」と述べ、「提調官吏と云は、定まる官名には非ず。官人又吏にても時に取りて、其錢糧をとり立て、又は刑名・造作を主るを云なり」と説明する。

(4) 雜犯。『唐律』では、十惡のような、特殊な扱いを受ける犯罪の反對概念として、それ以外の一般的な犯罪をいう。實際には、何を特殊とするかによって、随時異なってくる（『譯註』五、五頁）。『明律』では些かニュアンスが違い、『明律國字解』も、刑律・雜犯を「此篇は何れの篇にも入れがたきことを聚めて、一類として雜犯と名づけた」と述べる。

(5) 咨稟。二品以上の同級官廳、もしくは官員が相互に送る公文、或いはその行爲。ここでは、送る主體は行省、受け手は中書省（都省）である。『吏文正續輯覽』二品以上之官、行同品衙門之文。又上項各衙門、各奏堂上官行。

(6) 就斷。行省以下該當官署において斷罪すること。受敕官は、行省の權限で判決できるのである。

【解説】 行省管下の軍官に對する裁判手續きを述べる。通常の犯罪ならば、五品以上の受宣官は、中書省の決裁に委ねられ、六品以下の受敕官は、當該の行省で審問される。但し、軍情につき違犯のあった者は、その官品を問わず、提調軍馬官たる行省長官の裁きに服さねばならなかった。

一三〇 諸て、行省、歲ごとに錢糧を支するに、各處の正官、季ごとに一たび照勘し、歲終に、その成を行省に會し、式を以て稽考す。濫なる者はこれを徴し、實なる者はこれを籍す。その概を總べ、都省に咨し、臺憲官これを閱實す。

(1) 『元典章』卷二二、戸部七、支(類)に引く至元新格(彙輯)第三五、及び同書同卷の歲終季報錢糧にも、同じ趣旨の記事がある。

【解説】 行省及び管下の官廳における、歲出の検査報告について、事務手續きの梗概を示したものである。

一三一 諸て、方面の大臣^①にして、金を受け賊を縱ち亂を成す者は、斬。僚佐が金を受け、或は阿順して匡正する能わざれば、並びに罪に坐す。赦に會うも、仍お除名す。

(1) 方面大臣。『六部成語註解』吏部に「道臺知府、皆稱爲方面大員」とあり、余繼『典故紀聞』卷一三は「舊制、天下朝覲官至

者、方面官隨品級序於京官之次」と述べる通り、明清では地方の大官の汎稱だが、元朝の場合、行省の幹部のほか、行樞密院などの臨時ポストも含まれる。『元史』卷三二、明宗紀、天曆二年四月乙巳に「監察御史言、嶺北行省、控制一方、廣輪萬里、實爲太祖肇基之地、國家根本繫焉。方面之寄、豈可輕任」とある。

【解説】 地方の治安維持に關わる立法である。行省などの地方大官やその屬官が叛徒から金品を受け取り、その取締を怠ったために叛亂を惹起すれば、責任者は極刑に問われる。姑息な手段に訴え、未然に鎮壓できなかったときも、やはり處罰され、恩赦の適用は制限された。

一三一 諸て、樞密院及び各省の部する所の軍官は、その麾下の征する者・戍する者・出する者・處る者をば、飢寒贍わさず、役使均からしめず、代うるに私人を以てし、舉債倍息す。家に在るに逃と曰い、力あるに乏と曰う。惟だ單窮のみ是れ使い、惟だ貧賄のみ是れ圖り、以て士卒を苦しめ、以て兵籍を耗る。百戸に罪あらば、罪は千戸に及び、千戸に罪あらば、罪は萬戸に及び、萬戸に罪あらば、樞密院及び行省・帥府より、その狀を以て聞し、事に隨いて罪を論ず。

(1) 一二〇六年以來、モンゴルでは、もとの部族を基盤とする千

戸を中核に据え、その上に萬戸、その下に百戸・十戸を置く十進法的な部隊編成を行い、それぞれ萬戸（萬人長 *wanren*）・千戸（千人長 *qianren*）・百戸（百人長 *bairen*）・牌子頭（十人長）に率いさせた。元朝の軍制は、これをもとに上中下の萬戸府の麾下に、上中下の千戸所、ついで上下の百戸所を置く大幅な再編を実施した。ウラジミルツォフ、外務省調査部譯『蒙古社會制度史』生活社、改訂版、一九四一を參看。

(2) 帥府。都元帥府、または元帥府のこと。邊境地區の軍事機關で、宣慰司の管下に設置された。『元史』卷九一、百官七、宣慰司に「掌軍民之事、分道以總郡縣、行省有政令則布于下、郡縣有請則爲達于省。有邊陲軍旅之事、則兼都元帥府、其次則止爲元帥府」とある。

【解説】軍官犯罪を幾つかの類型に分けて列舉し、連坐責任にも觸れる。なお『明律』名例律・軍官犯罪（六）には、「凡軍官犯罪、從本管衙門、開具事由、申呈五軍都督府奏聞、請旨取問」とある。

一三三 諸て宣徽院の抽分する所の馬・牛・羊は、官その程期を厳しくし、その供億を制す。その鈴束の法を謹み、以てこれを議察す。その官を欺き、民を擾すあらば、廉訪司これを糾す。

(1) 『通制條格』卷一五、廐牧、抽分羊馬（大德七年十月）や『大元馬政記』に詳細な記事がある。『元典章』卷五七、刑部一九、

雜禁、抽分羊馬牛例も參考になる。

(2) 宣徽院。皇帝の家政機關の一つ。皇帝・怯薛^{ケシクタイ}の食事、皇室主催の宴席、及びその財源を管轄する。光祿寺もその管下にあった。『元史』卷八七、百官三。秩正三品。掌供玉食。凡稻粱・牲牢・酒醴・蔬菓・庶品之物、燕享宗戚・賓客之事、及諸王・宿衛・怯憐口糧食、蒙古萬戸・千戸合納差發、係官抽分、牧養孳畜、歲支芻草粟叔、羊馬價直、收受闌遺等事、與尙食・尙藥・尙醢三局、皆隸焉。

(3) 抽分。現物の何割かを税金として徴收すること。元朝は、畜産や民營鑛山のほか、市舶司での取引にあたり、現物の一部を抽分則例に従って徴收した。その概略は、『元史』卷九四、歲課によって知られるが、家畜は百頭につき一頭、または三十頭につき一頭が基準とされ、民營鑛山は二十〜三十パーセントの税率、舶貨の場合、初めの細色十分の一、粗色十五分の一が、延祐元年（一二三四）から各々十分の二、十五分の二となり、抽分後三十分の一の舶稅を徴收された。青木富太郎「元代の抽分羊馬制度に就いて」『蒙古』昭和一四年五月號、一九三九は、これに關わる論考。

(4) 鈴束之法。取締規則のこと。『明律國字解』に「鈴束とは、法を立てて下に自由をさせぬことなり。兼て法を立置ぬゆへ、下々自由をして惡事をしたるを失鈴束と云」とある。

一三四 諸て、翰林院は、應に制書を譯寫すべくんば、必ず中書省に呈し、共にその藁を議す。その文卷は、邊遠の軍情重事にあらざれば、並びに監察御史より、これを考閱す。

(1) 『元史』卷二七、英宗紀一、延祐七年十月己巳。敕翰林譯詔、關白中書。軍情重事については、『明律』吏律・公式にも、漏泄軍情大事(七〇)の一項を設け、その漏洩や封印解除を嚴禁している。

(2) 元朝の制詔は、至元六年(一二六九)から翰林國史院(正一品)が起草にあたり、同十二年(一二七五)には、蒙古翰林院(從二品)が置かれ、漢文の詔敕ならびに一切の公文書のモンゴル語譯を擔當した。『元史』卷八、世祖紀五、至元十二年三月庚子。從王磐・竇默等請、分置翰林院、專掌蒙古文字、以翰林學士承旨撒的迷底里主之。其翰林兼國史院、仍舊纂修國史、典制誥、備顧問、以翰林學士承旨兼修起居注和禮霍孫主之。

(3) 考閱文卷。『元典章』卷五、臺綱一、內臺には、至元二十五年(一二八八)の監察台行事件を載せる。監察御史による文書改めも、この中の官廳一般に關わる規則の援用と考えられる。

【解説】元代の制書がいかなる手續を経て作成され、また管理されたのか。その一端を知るうえで貴重な材料である。一三六條までは、照刷文卷、即ち文書檢閱に關わる記述となっている。

一三五 諸て、宣政院の文卷は、佛事を修むること照刷に在らざるを除くの外、その餘の文卷及び隸する所の内外司存は、並びにこれを照刷す。

(1) 『元史』卷三三、武宗紀一、至大二年六月甲戌。皇太子(後の仁宗)言、宣政院先奉旨、殿西蕃僧者截其手、訾之者斷其舌。此法昔所未聞、有乖國典、且於僧無益。僧俗相犯、已有明憲、乞更其令。又言、宣政院文案不檢覈、於憲章有礙、違舊制爲宜。並從之。

(2) 宣政院。從一品。佛教、特にラマ教の管理とチベットの行政を掌った。初め總制院を設け、國師を長官に据えたが、至元二十五年(一二八八)、唐の故事にちなんで宣政院と改められた。院使・同知・副使・參議ら各々二員を置く。その概略は、野上俊靜「元代宣政院に就いて」『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』東洋史研究會、一九五〇、前掲『支那官制發達史』三二七―三三八頁などに觸れられている。

(3) 『元史』卷二〇二、釋老傳、八思巴帝師にいう。元起朔方、因已崇尚釋教。及得西域、世祖以其地廣而險遠、民獷而好鬪、思有以因其俗而柔其人、乃郡縣土番之地、設官分職、而頒之於帝師。乃立宣政院、其爲使位居第二者、必以僧爲之、出帝師所辟舉、而總其政於内外者、帥臣以下、亦必僧俗並用、而軍民通攝。於是、帝師之命、與詔敕並行於西土。百年之間、朝廷所以教禮

而尊信之者、無所不用其至。

- (4) 宣政院管下の諸廳は、大都、上都、及びチベットに散在し、斷事官・客省使・規運提點所・提舉資善庫・利貞庫・大濟倉・興教寺のほか、吐蕃宣慰司以下、招討司・都元帥府など、その任務も軍事・財政と多岐にわたっていた(『元史』卷八七、百官三)。司存とは、有司の意で、擔當官吏もしくは關係官廳のこと。

- (5) 照刷。文書検査のこと。元朝では、監察制度の充實が著しく、照刷文卷あるいは刷卷と呼ばれる檢閲制度も整備されていた。中央では御史臺、地方では肅政廉訪司によって毎年春季と夏季の二回に實施された。

【解説】 宣政院の扱う文書は、宗務關係を除き、御史臺の檢閲を受けなければならぬ。換言すれば、帝室の絶大な尊崇のもとに亂脈を極めるラマ僧たちの權力も、これによって牽制されたわけで、その實効性の如何は、チベットに對する元朝支配の消長と表裏していた。

- 一三六 諸て、^①徽政院^②及び怯憐口人匠^③の舊設せる諸府司^④の文卷は、並びに臺憲より照刷す。

- (1) 『元典章』新集朝綱、照刷、照刷徽政院司屬文卷、及び同書卷三九、刑部一、刑名、怯憐口官吏犯罪には、同じ趣旨の記事が

ある。

- (2) 徽政院は、皇太后に奉仕する官廳で、至元三十一年(一二九四)皇太子管下の詹事院から錢糧・選法・工役をそっくり移管したのに始まる。以後、斷續的に改廢を繰り返して、武宗・仁宗の母答己^{ダジ}、順宗の母不答失里^{フダシリ}の下では、特に重要な役割を果たした(『元史』卷八九、百官五、儲政院)。

- (3) 怯憐口^{ケレンコウ}は皇室・投下に所屬する技能者集團。放良・還俗の人戸から編成されるが、諸種の特權のため、色目人の投充も多かった。語源はモンゴル語の *ger-ungun* (家の子・郎黨) といわれるが、異論もある。箭内互「元朝幹耳朶考」『東洋學報』二〇一・二・三・四、一九二〇(『蒙古史研究』所收)。

- (4) 皇室・投下には、怯憐口の管理のため、様々な總管府や提舉司があり、徽政院にも、ほかに監・司・署などの名稱を持つ部局が數多く付屬していた。『元史』卷二三、武宗紀二、至大三年四月己巳。立怯憐口諸色人匠總管府、秩正二品、提舉司二、分治大都・上都、秩正五品、江浙等處財賦提舉司、秩從五品……並隸章慶使司(秩從三品、徽政院に屬する)。同書卷二八、英宗紀二、至治三年二月癸未。罷徽政院總管府三、都總管府隸有司、怯憐口及人匠總管府、隸陝西行中書省。同書卷三三、文宗紀二、天曆二年冬十月。以怯憐口諸色民匠總管府及所屬諸司隸徽政院者、悉隸儲政院。

一三七 諸て、臺官の職掌は、官箴を飭し、吏課を稽え、内は羣祀を秩し、外は行人を察り、軍國の奏議を與聞し、民庶の冤辭を理達す。凡そ、有司の刑名・賦役・銓選・會計・調度・徵收・營繕・鞠勘・審讞・勾稽、及び庶官の廉貪、厲禁の張弛、編民の惇獨・流移、強暴の兼并、悉くこれを糾彈す。

(1) 『元典章』卷五、臺綱一、內臺、並びに『憲臺通紀』に載せる設立憲臺格例には、同じ内容の詳細な規定がある。

(2) 前掲の記事では「(A)彈劾中書省・樞密院・制國用使司等内外百官奸邪・非違、肅清風俗、(B)刷磨諸司案牘、(C)並監察祭祀、(D)及出使之事」とあって、(A)は飭官箴(綱紀肅正)、(B)は稽吏課(勤務評定)、(C)は秩羣祀(國家祭祀)、(D)は察行人(敕使監督)に各々相當する。

(3) 『元史』卷六、世祖紀三、至元五年冬十月己卯。敕中書省・樞密院、凡有事與御史臺官同奏。これは注1の格例の發令から直ぐあとの事件である。

(4) 前掲『元典章』の「諸訴訟人等、先從本管官司陳告、如有冤抑、民戸、經左右部、軍戸、經樞密院、錢穀、經制國用使司、如理斷不當、赴中書省陳告、究問歸着。若中書省看循、或理斷不當、許御史臺糾彈」との記載と對應。御史臺は上告審の最終段階で初めて不服申立に應じた。

(5) 前掲『元典章』は「諸官吏、若有廉能公正者、委監察體察、

得實、具姓名聞奏。如有汚濫者、亦行糾察」と述べる(『通制條格』卷六、選舉、舉保、第四項も同様)。

(6) 同じく『元典章』では「諸私鹽酒麴、并應禁物質、及盜賊生發藏匿處所、若官司禁斷不嚴、緝捕怠慢者、委監察隨事糾察」と相當する。厲禁は、各種取締を云う。

(7) これも『元典章』の「諸孤老幼疾人・貧窮不能自存者、仰本路官司驗實、官爲養濟。應養濟而不收養、或不如法者、委監察糾察」と對應。惇獨は、鰥寡孤獨のこと。流移は離散流亡を云う。

(8) やはり『元典章』では「戸口流散、籍帳隱沒、農桑不勤、倉稟減耗、爲私蠹害、黠吏豪家兼并縱暴、及貧弱冤苦不能自伸者、委任監察並行糾察(『秋澗先生大全集』卷八九、烏臺筆補、彈阿海萬戸屯田軍人侵占民田事狀)」とある。強暴は、豪民のこと。

【解説】監察關係の服務規程を一部要約したもので、もとは至元五年(一二六八)七月、御史臺の設立の際に發令された規約である。以下、一五四條までは、監察關係の各種規定を集めている。

一三八 諸て、行臺官は、行省・宣慰司已下の諸の軍民官吏の姦を作し科を犯す者、窮民の流離して業を失う者、豪強家の民利を奪う者、按察官の職任に稱わざる者を察するを主る。餘は內臺の立法に視て同じ。

(1) 『元典章』卷五、臺綱一、行臺、及び『憲臺通紀』に載せる行臺體察等例、さらに『南臺備要』立行御史臺條畫に、これらについて詳細な記載がある。

(2) 行臺。江南行御史臺をさす。通稱は南臺で、のち加わった陝西行御史臺は西臺と呼ばれた。内臺と稱する御史臺に對し、外臺と一括される。『元史』卷八六、百官二。設官品秩同内臺。至元十四年、始置江南行御史臺于揚州、尋徙杭州、又徙江州。二十三年、遷于建康、以監臨東南諸省、統制各道憲司、而總諸内臺。

(3) 宣慰司。從二品。行省管下の重點地區に置かれた出先機關。元初の宣撫司を改稱したもので、宣慰使三員のほか、同知・副使を各々一員置く(前掲『支那官制發達史』二八四―二八五・三三五―三三七頁)。

(4) 豪強家。前掲『元典章』の黠吏豪家または官員權豪にあたり、前條の強暴と變わらない。『憲臺通紀』臺察咨稟等事(至元二十四年三月)にも同様の命令がある。

(5) 按察官。提刑按察司をさす。至元十三年(一二七六)から翌年まで、一時廢止された經緯がある。至元二十八年(一二九一)には、肅政廉訪司と改稱された(『元史』卷八六、百官二)。

【解説】 至元十四年(一二七七)、南宋併合に伴って設立された江南行臺の服務規程を一部かい摘んで要約している。多くの部分は、前

條と共通する。

一三九 諸て、御史臺の管轄する所の各道憲司は、民に冤滯ありて臺に赴懇する者あらば、咸な籍に著し、歲終なれば、則ち會して以てその各道の殿最を考え、これを黜陟す。

【解説】 憲司とは、各道監司たる肅政廉訪司のことで、御史臺との關係が人事制度に即して述べられる。つまり、御史臺は、廉訪司のために無實の罪に苦しんでいるとの訴えがあれば、すべて記録しておき、年末の考課で、降罰の材料とした。宋代に較べ、監司が御史臺の強い統制下にあることが目につく。

一四〇 諸て、臺憲の察する所の、天下の官吏の贓汚・欺詐・稽違、罪、刑書に入る者は、歲ごとにその數及びその罪狀を會し、これをを上り、中書に藏す。

【解説】 御史臺や廉訪司では、官吏の汚職事件や違犯行為が量刑上ある線を超えると、毎年、その罪狀と犯行回數とを併記して朝廷に報告しなくてはならず、その關係文書は中書省に保管された。刑書とは、刑典の謂で、罪人刑書とは、罪狀が正刑たる五刑に相當する意味にとってよからう。

一四一 諸て、内外臺は、歲ごとに、監察御史を遣して、各省の文

卷を刷磨し、並びに各道廉訪司の官吏の臧否を察せしむ。官、稱わざる者は、臺に呈して黜罰し、吏、稱わざる者は、就きてこれを罷む。

(1) 監察御史。正七品。內臺・外臺ともに察院に所屬する。內臺は外臺に較べて當然優位に立つ。內臺三十二名、外臺二十八名の定員は、漢人・蒙古人半數づつで構成された。『南村輟耕錄』卷二、內御史署銜。內監察御史署銜、無御史臺三字。以爲天子耳目之官、非御史大夫以下所可制也。行臺則不然。

(2) 『元典章』卷五、臺綱一、內臺、監察台行事理、及び『南臺備要』體察聲跡（元貞元年三月二十一日）に同文が見える。

(3) 『南臺備要』振舉臺綱制（至治三年正月）。

(4) 『憲臺通紀』風憲官鈴束吏屬（延祐四年四月四日）に同文あり。

【解説】 元朝の監察御史は、內臺又は外臺に所屬し、廉訪司が行う年間二回の巡歴とは關係なく、地方巡察のため、隨時派出された。同時に、監司たる廉訪司は、御史臺が監察御史を通じて統制しており、この點でも、前代との相違と、明代以降の祖型が顯著に見られる。Charles O. Hucker, The Censorial system of Ming China, Stanford University Press, 1966 を参照。

一四二 諸て、風憲は、薦舉には必ずその最績を考し、彈劾には必

ずその罪狀を著す。舉劾、當を失すれば、並びにこれを坐す。

(1) 『南臺備要』振舉臺綱制（至治三年正月）に同文が見える。刑法志の一〇四條及び一三七條と概ね共通する。

【解説】 御史臺官や肅政廉訪司官が、官吏の彈劾のみならず、薦舉制度にも深く關與するのは、前代と殆ど變わらない。『慶元條法事類』卷七、職制門、監司巡歴に擧げる職制式の一つ「監司歲具巡按奏狀」は、宋代のものながら、その具體的な書式を示す點において参考になる。

一四三 諸て、殿中侍御史は、凡そ廷臣の奏事に遇わば、必ず隨いて入内し、廷に在りて、與聞すべからざるの人あらば、即ちこれを糾斥す。朝會・祭祀、一切の行禮に、失儀・越次及び託故して至らざる者あれば、即ちこれを糾罰す。文武百官、謁假事故、三日以外の者は、曹狀を以てこれを報ず。凡そ官府の創置、百官の禮任、及び被差往還に、曹狀を報ずること、並びに同じ。

(1) 『元史』卷八六、百官一、殿中司。殿中侍御史二員、正四品。至元五年始置、秩正七品、後陞正四品。凡大朝會、百官班序、其失儀失列、則糾罰之。在京百官到任假事故、出三日不報者、則糾舉之。大臣入內奏事、則隨以入、凡不可與聞之人、糾避之。『元史』卷二二、武宗紀一、大德十一年六月丙辰。御史大夫塔思不花言、殿中司所職、中書而下奏事者、必使隨之以入、不在奏

事之列者、聽其引退、班朝百官朝會失儀者、得糾劾、病故者、必以告。請如舊制。『元史』卷二四、仁宗紀一、至大四年六月庚申。敕自今諸司白事、須殿中侍御史侍側。

(2) 謁假。休暇を請うこと。謁告、告假。謁假事故(假故)とは、病氣などの子細あつて休暇を願ひ出ること。『吏學指南』は「假告。喪病告報、曰假、謂借勾當月日也。節朔旬休、曰暇、謂公務空閑日也」と定義する。

(3) 曹狀。在京の官吏は、休暇のほか、赴任や出張に要する日數が三日を越える際には、この書式を使つて殿中司に報告しなければならなかつた。『通制條格』卷二一、假寧、曹狀には、同じ趣旨の記載がある(一〇七條を参照)。

【解説】殿中侍御史は、宮廷の朝儀を監督するポスト。その職掌は前代までと全く變わらない。

一四四 諸て、廉訪分司の官、每季孟夏の初旬、出でて錄囚^①し、仲秋の中旬、出でて按治^②し、明年の孟夏中旬に還る。その遠きを憚り、期を違え、託故もて事を避くる者は、監察御史よりこれを劾す。

(1) 『憲臺通紀』廉訪分司出巡日期(延祐三年六月)に同文がある。

(2) 廉訪分司官。地方の監察を掌る肅政廉訪司には、總司の廉訪

使二名(正三品)のほか、副使二名(正四品)、僉事四名が置かれ、分司として年間二回の巡歴を擔當した。『元史』卷一六、世祖紀一三、至元二十八年二月丙戌。詔、改提刑按察司爲肅政廉訪司、每道仍設官八員、除二使留司、以總制一道、餘六人分臨所部、如民事・錢穀・官吏奸弊、一切委之。俟歲終、省臺遣官考其功効。

(3) 錄囚。前出の審録に同じ。『憲臺通紀』審理罪囚定例(大德五年八月三日)に詳しい。毎季は毎歲か毎期の誤り。錄囚は毎年四月から六月上旬までと定められていた。

(4) 按治。管内の巡察をいう。巡按、巡歴と意味する方向は同じ。『元典章』卷六、臺綱二、察司巡按事理によれば、初め半年に一度となつていたが、至元二十三年(一二八六)からは、毎年八月から翌年の四月までと改められた。

【解説】元朝の監司たる廉訪司の管内巡察について定める。前代と比べ、總司・分司の分掌によつて監察のキメが一層細くなつてゐる。夏期は錄囚、秋期は監察との區別こそないが、年間二回の巡察をはじめ、全體に宋代の監司との連續性は極めて強い。『慶元條法事類』卷七、職制門、監司巡歴、監司知通按學を參看。

一四五 諸て、廉訪司、各路の軍民を分巡し、官吏に過あり、罪狀明白を得る者は、六品以下は總司に牒して罪を論じ、五品以上は

臺に申して聞奏せしむ。

- (1) 『憲臺通紀』廉訪分司斷職官會議(至元三十一年六月)の同文に加え、次の記事とも對應する。『元史』卷一八、成宗紀一、至元三十一年六月辛巳。廉訪司官歲以五月分按所屬、次年正月還司。職官犯贓、敕授者聽總司議、宣授者上聞。其本司聲跡不佳者代之、受賄者依舊例比諸人加重。

- (2) 注1に掲げる記事では、贓罪に限定されているが、官吏犯罪一般については、『元史』卷一〇、世祖紀七、至元十五年五月甲子や『憲臺通紀』行御史臺體察條畫に、その原型を認めうる。

【解説】 前項に續き、廉訪分司が官吏を摘發した際の裁判手續きを述べる。六品以下ならば、總司の獨斷で判決できるのに對し、五品以上では、本臺または行臺に上申のうえ、皇帝の裁決を仰がねばならない。六品以下の裁きにおける、監司の權限の強さが注目される。『明律』名例律・職官有犯(五)及び『明令』刑令・民官犯贓(八七)との共通點も多い。

- 一四六 諸て、廉訪司官、擅に軍器庫を封點する者は、笞三十七、職を解きて別敘す。

- (1) 軍器庫。各路に置かれた武器庫で、武備寺の監督下にあった。『元典章』卷三五、兵部二、達魯花赤提調軍器庫によれば、軍器庫の管理には、蒙古軍官、又は各路の達魯花赤、或いは畏吾

兒・回回・色目出身の官員が攜わり、漢人・南人は排除されていた。『元史』卷九〇、百官六、武備寺。至元五年、始立軍器庫。十年、通掌隨路軍器、改利器庫。封點とは、封印・點檢のこと。

- 一四七 諸て、官吏、贓を受くれば、事主、告言せざるといへども、監察御史・廉訪司にて、これを察し、實なる者は、これを糾せ。

- (1) 『元史』卷二二、世祖紀九、至元十九年九月壬戌。敕、官吏受賄及倉庫官侵盜、臺察官知而不糾者、驗其輕重罪之。中外官吏贓罪、輕者杖決、重者處死。言官緘默、與受贓者一體論罪。仍詔諭天下。

【解説】 官吏犯罪のなかでも、受贓に關しては糾問主義の徹底が圖られていた例證である。

- 一四八 諸て、行省官及び首領官、賂を受け、隨省の廉訪司にて察知する者は、これを臺に上し、已下は就きて問わしむ。

- (1) 公罪の事例ながら、『憲臺通紀』廉訪分司斷職官會議(延祐三年六月)にも、これと同様の手續きが見られる。

【解説】 行省において、首領官以上の收賄は、當該地區の肅政廉訪司が摘發すれば、行臺が上申を受けて處斷し、それ以下の一般の胥吏については、廉訪司で判決するものとされた。但し、監察區分は行省に比べ、小さく設定されており、江南行臺を例にとれば、管下

の江浙・江西・湖廣の三省に對して、廉訪司は江南十道に分かれて設置されていた(『元史』卷八六、百官二、『元典章』卷五七、刑部一九、禁豪霸、禁富戶子孫根隨官員)。首領官に限っていえば、『明令』刑令・擅問幕官(七九)の場合は、當該衙門における正官の專斷を禁ずるに止まる。

一四九 諸て、行省の理問所の見問公事をば、廉訪司より輒みだりに逮問する者は、これを禁ず。

(1) 理問所。行省管轄區域の司法を掌る機關。理問二名(正四品)・副理問二名(從五品)のほか、知事一名、提控案牘二名によつて構成され、司獄司の扱いや刑事性の少ない事案を全て擔當した。『元史』卷九一、百官七、各省屬官、及び前掲『支那官制發達史』三三四・三三六頁などを参照。

(2) 『元史』卷一九、成宗紀一、元貞二年秋七月己丑。命行臺監察御史鈎校隨省理問所案牘。『元典章』卷五、臺綱一、監察合行事件。諸官府見問未決之事、監察御史不得輒憑告人飾詞、取人追卷、候判決了畢、果有違錯、依例糾彈。其罪囚有冤、隨即究問。行臺から派遣される監察御史に限っていえば、行省の理問所で行う裁きについては、事後的な再審のみが認められた。この原則は、廉訪司にも順次適用されたものと考えられる。

【解説】 裁判管轄について、監察官の權限を規制する條項である。

即ち、ある事案につき、行省管下の理問所が審理未了のときは、廉訪司は輕々しく介入できないのである。

一五〇 諸て、職官、賊を受くれば、廉訪司は必ず親臨して聽決す。必ず親臨するあたわざる者あれば、敵品の有司の、老成廉能の正官②を摘し、これを問わしむ。

(1) 『憲臺通紀』人衆委問(延祐二年正月)と『南臺備要』人衆委問(大德十年九月)に同文。聽決は聽訟決斷、訴えを聞き、裁きをつけること。

(2) 敵品有司老成廉能正官。『南臺備要』人衆委問(延祐三年六月)によれば、事案が干礙人衆事理と認められると、廉訪司の係官と相應の官品を持つ「附近管民廉幹正官」が裁判にあつた。

【解説】 これも裁判管轄について述べる。官吏の收賄は、廉訪司官が直接審問しなくてはならない。もしも被告との關係において、廉訪司官にさし障りがあったり、遠隔地のため手の回らない際には、最寄りの管民正官の代行を特に認め、不正があれば、監察御史が彈劾した。

一五一 諸て、按を被るの官吏、冤抑ある者は、御史臺に詣りて陳理す。言う所實なれば、告せられしを罪す。言う所虛なれば、告

げし者を罪し、仍お等を加う。その故らに按問の官吏を據るに、事を以てする者あらば、これを禁ず。

(1) 『元典章』卷五三、刑部一五、稱冤、稱冤赴臺陳告に同文がある。尙書省の亂脈な施政によって、かねて被害を受けた人々の名譽回復を圖るため、至大四年(一三二二)に發令された措置である。なお被按官吏は、『典章』では被問經斷官吏とあり、すでに有罪判決を受けた者のことである。

(2) 按問官吏。監察御史、肅政廉訪司を指している。據は據拾、告發する意。

【解説】 無實の嫌疑で斷罪された官吏は、御史臺に不服申立を行うことができる。もし冤罪と判明すれば、有罪判決を下した件で訴えられた監察御史や廉訪司官はその責任を問われる。勿論、原告の訴えが事實無根のときは、誣告反坐よりも重く處罰されるように、監察官吏をいわねなく誹謗することも嚴しく制約されていた。

一五二 諸て、職官の職を按問するに、遽に刑を施すなかれ。惟だ衆證已に明らかにして、款伏せざる者は、刑を加えてこれを問う。軍官なれば、先に佩ぶる所の符を奪いてこれを問う。

(1) その対象は官員とは言明されないが、『元典章』卷四〇、刑部二、獄具、有罪過人依例體例問にも、同様の手續きに觸れてゐる。

【解説】 裁判における官員の特權に觸れている。贓罪の審問では、文官の場合、犯行の明白な證據があつても、當人が承伏しないときでなければ、輕々に拷問してはならない。軍官の取調は、その牌符を剝奪してから行わねばならない。

一五三 諸て、風憲の官吏、但し、贓を犯さば、等を加えて斷罪す。不枉法といえども、また除名す。

(1) 『元典章』卷四六、刑部八、取受、臺察官吏犯贓不敘、及び『憲臺通紀』風憲官吏贓罪加重(至元三十年四月二十九日)に同文が見え、『憲臺通紀』臺察官吏犯贓加重(延祐元年九月十四日)にも、同じ趣旨の記事がある。

【解説】 監察官吏の贓罪は通常の官吏よりも重く罰せられる。『明律』刑律・受贓・風憲官吏犯贓(三七三)になると、枉法・不枉法を問わず一律に二等を加えて斷罪される。

一五四 諸て、方面の臣、入覲し、輒に所部の官吏の俸錢を斂めて、禮物を備う者は、これを禁ず。違ひし者は、これを罪す。

【解説】 方面大臣たる行省長官らが、朝廷への参内にあたり、部下の俸給を取り立てて物品の献上を行うことは、元朝ではかなり一般的な慣行だったと見受られる。

一五五 諸て、湖南北・江西・兩廣の接境^{きょうかい}にて溪洞蠻獠竊發し、諸

の監臨^②の禁治嚴ならざる、及び故縱^③する者あらば、軍官は答三十

七、管民官は二十七、並びに受くる所の階^①一等を削り、過を記す。

(1) 『元典章』卷四一、刑部三、謀叛、草賊生發罪例に同文があつて、十惡のひとつ謀叛に分類されている。『元史』卷一八、成宗紀一、元貞元年六月甲子。昭・賀・藤・邕・澄・全・衡・柳・吉・贛・南安等處蠻寇竊發、以軍民長官備御不嚴、撫字不至、皆責而降之。これら湖南・廣東・廣西の境界地帯は、元代ではいずれも湖廣行省の所轄であつた。

(2) 監臨。ここでは、鎮守軍官と管民官の意味で言及されている。通常は、人並びに物に對し、行政上、自己の裁量を及ぼしうる立場にあることをいう(『譯註』五、三三〇頁)。『明律國字解』には「監臨は、上に立たる官人の其事を支配するをも、又支配下にてはなけれども、其事の筋の方よりさつと入れ吟味をする筋の事には、其官人を監臨と立るなり」と説明する。

(3) 故縱とは、禁域への闖入や關所破り、官物盜用、各種逃亡罪などの際に、警備・看守・管理の責めを負うべき者が、故意に見逃して犯行を遂げさせてしまうこと(『譯註』五、一四〇頁)。(4) 創所受階一等。文散官四十二階・武散官三十四階につき、それぞれ一等級降格すること。職事官はそのまま据え置かれる。記過は、注1の斷例にも「標注鎮守不嚴過名」とあるように、

解由に罪狀を明記すること。

【解説】 世祖から成宗の時代にかけて、江西・福建・湖廣一帯では畚族などの叛亂が頻發した。本條は、元貞元年(一二九五)、彼らの蜂起を事前に收拾できなかつたかどで現場の官員を處分した際の措置を下敷きとしている。この間の事情に觸れたものに、植松正「元初の畚族の叛亂について」『香川大學一般教育研究』二五、一九八四、がある。

一五六 諸て、邊隅の、鎮守嚴ならず、他盜^{みだり}の輒に境に入りて殺掠する者は、軍官は罪に坐し、民官は坐せず。

(1) 邊境の防衛に就くこと。『明律國字解』は「出征とは、合戦に赴なり。鎮守は、合戦には非れども邊鎮の守りにゆくなり」と述べ、鎮守を出征の對語と捉え、さらに「衛所の軍兵を邊塞の地へ遣して在番するを鎮守と云う」と説明する。

(2) 軍官。『元史』卷九一、百官七、諸軍の「唯邊遠之地有之、各統屬縣、其秩如下州、其設官置吏亦如之」との記述が參考になる。

【解説】 外境からの侵犯によって、管下の住民が殺害・略奪に遭つた場合、その警備責任は、當地の軍官のみが問われ、管民官には及ばなかつた。『明律』兵律・軍攻・主將不固守(三二八)の一部として繼承されている。

一五七 諸て、軍・民官の邊陲を鎮撫し、三年嘯聚の盜なき者は、民官は一資を減じ、^①軍官は散官一階を陞す。五年なき者は、軍・民官各々散官一等を陞す。^②

(1) 減一資。遷轉に必要な條件の一つ。ポストの勤績日數に應じて與えられ、宋の磨勘減年に相當する。『元史』卷八三、選舉三、銓法中。凡減資陞等、大德九年、詔、外任流官、陞轉甚遲、但歷在外兩任、五品以下並減一資。部議、外任五品以下職官、若歷過隨朝及在京倉庫官鹽鐵等職、曾經陞等減資外、以後至大德九年格前、歷及在外兩任或一任、六十月之上者、並與優減、未及者不拘此格。

(2) 散官。『元史』卷八三、選舉三、銓法中。凡文武散官、多采用金制、建官之初、散官例降職事二等。至元二十年、始陞官職對品、九品無散官、謂之平頭敕。蒙古・色目初授散官或降職事、再授職、雖不降、必俟官資合轉、然後陞職。漢人初授官、不及職、再授則降職授官。

【解説】 邊境地區での騷擾事件では、關係官員のうち、鎮靜に功績のあった者は、平靜を維持できた年數に應じて官等の昇級が行われる。文官に比べ、軍官の優遇ぶりが目につく。

一五八 諸て、郡縣の版籍は、所司、謹みてこれを皮置し、^③正官相い沿りてこれを掌る。

(1) 『元史』卷一七、戸部三、檢舉戶地籍冊に同文がある。

(2) 郡縣版籍。元朝の全國的な戸口調査は、華北の太宗七年(一二三三)・憲宗二年(一二五二)・至元七年(一二七〇)に續き、江南では至元二十七年(一二九〇)に行われ、以後、すべての版籍の基本となった。中統四年(一二六三)からは、鄉村單位でも鼠尾文簿が作成され、路以下の官司が管理した。愛宕松男「蒙古人政權下の漢地に於ける版籍の問題―特に乙未年籍及び至元七年籍を中心として―」『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』一九五〇(『東洋史學論集』第四卷、三一書房、一九八八所收)を參看。

(3) 皮置とは、架閣、即ち棚に整理すること。官廳文書の管理方法については、竺沙雅章「漢籍紙背文書の研究」『京都大學文學部研究紀要』一四、一九七三がある。

【解説】 版籍管理の關連立法。『明令』吏令・守令到任(七)とも關わる。所司たる路府州司縣は、戸口・土地を版籍に新たに登錄するたびに、規則通り排架・管理する。正官・首領官は交替のたびに、版籍を引繼ぐと、その旨が解由にも記録され、後日の行政監察に備える定まりであった。以下一六三條まで、民政一般に關わる記述が續く。

一五九 諸て、勸農官、^①歲終なれば則ちその治する所の農桑・水利

の成績を本屬の上司に上まつる。本屬の上司は、所部の成績を會し、以て大司農^③若しくは部に上る。部は、その勤惰成否を考し、以て省に上り、これを殿最す。その官に在りて、その事を怠り、その法を隳つ者は、これを罪す。

(1) 『元典章』卷二、聖政一、勸農桑、至元七年二月欽奉聖旨にも同文がある。『元史』卷九三、食貨一、農桑。至元七年、立司農司、以左丞張文謙爲卿。司農司之設、專掌農桑水利、仍分布勸農官及知水利者、巡行郡邑、察舉勤惰。所在牧民長官提點農事、歲終第其成否、轉申司農司及戶部、秩滿之日、注於解由、戶部照之、以爲殿最。又命提刑按察司加體察焉。司農司の設立に伴う規約である。同書卷一五、世祖紀一二、至元二十五年春正月癸丑にも繰り返し見える。

(2) 勸農官。原文は勸農官に誤る。腹裏の四道巡行勸農司、江南の勸農營田司を云い、至元十四年(一二七七)から二十二年(一二八五)までは、一時提刑按察司の兼任とされた。松本善海「元代に於ける社制の創立」『東方學報』東京一一一、一九四〇

(3) 大司農司(正三品)は、農業・水利・學校・飢饉對策を掌る關係上、社制の勸農組織を監視し、農業技術の指導も行った。至元七年(一二七〇)の司農司の設置以來、農政院・務農司・司農寺と幾度も改名され、至元二十三年(一二八六)から大司

農司となった(『元史』卷八七、百官三、藤野彪「元の司農司について」『愛媛大學歴史學紀要』一、一九五三)。

【解説】勸農官は管下の府・州・司・縣を巡察し、年末には農政の實績を直屬上司に報告する。その結果は大司農司または戶部にまとめて伝えられ、その勸農官の任期満了に際し、解由にも明記される。勤務評定は、戶部で行われ、中書省が各々の昇進・降格を決定した。

一六〇 諸て、職官、田を行^り、民戶の齊斂錢を受けし者は、一多を以て科斷す。

(1) 『吏學指南』齊斂、謂一例科率也。なお、以一多科斷とは、臨時徵發(科率)の合算ではなく、戶当たりの賦額が最も高いもので計算する吸收主義を意味する

【解説】恐らく元朝政府が經理と呼ぶ田地調査にあたって、不當な苛斂誅求を防ぐため發せられたものと推測される。

一六一 諸て、財を受け、民の差徭を占せし者は、枉法を以て論ず。

(1) 『元典章』卷五四、刑部一六、擅科、民官影占民戶のほか、同書卷一九、戶部五、典賣、虛錢實契多土も關連する。しかし、枉法を準用するか否かは定かでなく、後者はむしろ不枉法を用されている。

(2) 占民差徭。占は、人戶や土地を形式だけ占有して雜泛差役な

どの税役負擔を免れさせること。影庇・影占と同じ。

一六二 諸て、額課は、所在の管民正官、その事を董す。若し他故を以て出ずれば、次官これを通攝す。

(1) 『元典章』卷二二、戸部八、茶課、權茶運司條書。隨處所辦課程、依舊例、管民正官、充提點官。若有差出、以次官提點。如有沮壞虧兌、取問得實、依條究治施行。

(2) 額設の課程を指す。課利収入の多くは、豫め徵收目標が設定されており、鹽・茶・酒醋・竹・金・銀・銅・鐵・鉛・錫といった專賣收益に加え、商税も對象となった。反對に、歳入に定額にあたる正課がなく、従つて剩餘收益の増減もありえないジャンルは、額外課と呼ばれた。

(3) 注1では、提點とある。點檢調査する、轉じて、監督または長官ポストの意。宋の提點刑獄もその一例だが、元朝の社制でも、管民正官は勸農政策上この肩書きを持っていた。通攝は、通行統攝、實務を總攬すること。

【解説】 額設の課利を徵收する際には、各地の管民正官を監督にあたらせる。擔當責任者が公務のため不在のときは、以次官である次席の正官に總攬させる。茶課に限らず、辦課を専門とする官吏は、皆な同様の方式で管民正官の提調を受けた。

一六三 諸て、額收の錢糧は、各處の計吏、歳ごとに一たび省に詣り、これを會す。齊斂する者あらば、按治官より舉劾す。

(1) 『元典章』卷二二、戸部七、支類、歲終季報錢糧に同じ趣旨の記事があり、更に同書卷二二、戸部七、及び同書卷二二、戸部八の至元新格にも關係法規を検出できる(『彙輯』第三六、第三七)。

(2) 額收錢糧とは、定額に沿つて徵收すべき税糧・課利のこと。

(3) 會計擔當の胥吏の意だが、ここでは宣慰司の令史、及び路總管府の司吏をさす。按治官は、廉訪司官である。

(4) 齊斂。一六〇條と同じく、臨時徵發の謂で、科率とも呼ばれる。注1の『典章』によれば、「概管州縣當該司吏、必須津貼盤費未免椿配、里正・主首科斂及民、又往來勾追之需索騷擾、爲害非一」とあり、毎年・毎季、州縣司吏や里正・主首が上司に赴く費用を、住民に強制したり、むやみと手數料を徵收することを問題にしている。

【解説】 額收錢糧につき、宣慰司では三箇月ごとに路から報告があると、所轄の行省へ書面に整理して知らせ、年末には、令史を都省に派遣して收支を決算した。その際、不當な苛斂誅求を防ぐため、各道廉訪司の首領官を同行させるのである。

一六四 諸て、郡縣は歳ごとに、三限を以て税糧を徵收す。初限は

十月終、中限は十一月終、末限は十二月終。違いし者は、初限な

れば答四十、再犯は杖八十。但し、結攬^②、及び自ら願いて結攬に與る人等は、並びにその家財を没入す。仍お、元料の數に依りて倍徴す。若し、正官を差して糧を部せしめ、或いは失陷^③し、及び輸して足らざるを致す者あらば、達魯花赤・管民官は、共に坐す。

(1) 『元典章』卷二四、戸部一〇、納稅、徵納稅糧、並びに稅糧違限官員科罪に同文がある。稅糧とは、江北の地稅・丁稅、江南の夏稅・秋苗を云う。

(2) 結攬は、攬納ともいわれ、徵稅を一括して請負うこと。多くの場合、豪民・富商・退閑官吏が攬戸となった。『吏學指南』結攬、謂兜合錢糧、總一納官者。

(3) 失陷。不作爲による官物の損壞。『吏學指南』失陷、謂不意損壞官物也。

【解説】 兩稅制度をめぐって、路府州縣における、徵稅期限、納付方法、そして係官の管理責任に關わる諸々の規則を簡潔に述べている。基本的には、前代から繼承したものである。なかでも、結攬・攬納を厳しく規制する點では、『明律』戸律・倉庫・攬納稅糧（二三〇）も變わらないが、納稅が困難な小戸には、元明兩朝ともに代納を容認していた。

一六五 諸て、州縣、義倉^②の糧數實ならざるに、監臨^③舉察を失す

る者は、これを罪す。

(1) 『通制條格』卷一六、田令、理民の項に引く至元新格（彙輯）第三〇）や『元典章』新集戸部、義倉、點視義倉有無物料も參考になる。

(2) 義倉。救荒に備え、平年に農民から正稅穀物の割増を徵收し、貯藏しておく施設。南宋・朱熹の社倉もその一例である。元朝では勸農政策上、社制の施行に伴い、一社に一倉が置かれた。これに對し、常平倉は路ごとの都市に置かれ、備蓄は主に和糴米や漕運米から供給された。『元史』卷九六、食貨四、常平義倉。

義倉亦至元六年始立。其法社置一倉、以社長主之、豐年每親丁納粟五斗、驅丁二斗。每粟聽納雜色、數年就給社民。……皇慶二年、復申其令。然行之既久、名存而實廢。

(3) 直接の責任を負う長官。ここでは、路府州縣の達魯花赤・管民正官が提調・提點として監督に臨む場合と想定される。

【解説】 義倉の備蓄穀類は、路府州縣の責任で會計管理をするのである。

一六六 諸て、職官、禁刑の日^②に公事を決斷する者は、罰俸一月、吏は答二十七、過を記す。

(1) 『元典章』卷五四、刑部一六、違例、禁刑日問囚罪例、及び禁刑日斷人罪例にも類例はあるが、量刑は斷例によって一様では

ない。

- (2) 禁刑日。毎月二日・八日・十五日・二十三日の四齋日、正月の十日間、そして五月一杯は、あらゆる殺生が禁じられ、刑罰も停止される。

【解説】 立春以後、秋分以前のほか、禁刑日に死刑を執行しないのは、古來の通法である。違反に對する罰則は、『唐律』斷獄二八・立春後秋分前不決死刑では、杖六十とあり、『明律』刑律・斷獄・死囚覆奏待報(四四五)では、杖四十と定める。無論、官と吏では量刑が異なり、禁殺日と斷屠月が禁刑日に一括されるなど、元朝特有の側面もある。『唐令拾遺』獄官令・第九條(七六五〜七六六頁)も關連する。一七八條までは、裁判制度に關する各種規定が並んでいる。

- 一六七 諸て、有司、諸の小罪を斷じ、輒に杖頭を以て、非法に人を杖し、死を致さば、罪、判署の官吏を坐せしむ。

- (1) 『元典章』卷五四、刑部一六、違枉、重杖打人致死に同文がある。

- (2) 民事事件など、答罪以下の輕微な違反行爲。取調では、拘留は勿論、拷問も避けるのが原則であった。『元典章』卷四〇、刑部二、繫獄、詳情監禁罪囚。今後除奸盜・詐僞、杖罪以上、罪狀明白、依例監禁、其餘相爭田土・婚姻・家産・債負・毆詈、自答以下雜犯罪名、及攀連干證之人、不許似前監收、止令隨衙

待對。

- (3) ここは恐らく常行杖の頭の太い方であろうかと思われる。なお石頭や木頭のように、頭が塊狀のものをいう接尾語とすれば、單に杖の謂となるが、その際には、注1に掲げる記事に、元爭打頭杖と作るのが傍證となる。

- (4) 判署官吏。決定に同じく署名した正官。『吏學指南』判署、判署掌判之官、署謂同署官吏。

【解説】 民事事件や輕度の刑事事件では、有司たる管民官は、關係者を安易に杖打してはならない。まして拷問のために死亡させれば、考課の上では、失點として記録される。『唐律』斷獄一五・監臨自以杖捶人、『明律』刑律・斷獄・決罰不如法(四三七)と關係する。

- 一六八 諸て、曾て官吏を訴うるの人に罪あらば、その訴えられし官吏、推することなかれ。

- (1) 『元典章』卷五三、刑部一五、被告、被告官吏迴避に同文がある。曾訴官吏は、言告官吏不公之人に作る。

【解説】 訴訟において、裁判官が擔當すべきでない事例の一つ。過去に一度でも自己の不正を訴えられた者は、その人物の裁きに據わってはならない。『明律』刑律・訴訟・聽訟迴避(三五八)に云う舊有讎嫌之人に含めて考えてよからう。

一六九 諸て、有司、輒ふたりに帷薄けいぼくの私事を妄言するに憑りて、人を逮繫する者は、笞四十七、職を解き、期年の後、敘す。

【解説】 閨房の私事に關わる訴えは、輕々しく受理したり、關係者を逮捕・拘束してはならない。罰則の嚴しさにも、有司たる管民官は、原則として夫婦間のもめごとには介入しないことが表明されている。

一七〇 諸て、職官、代を得、及び休致するも、凡そ追會あらば、並びに見任に同じ。その婚姻・田債の諸事は、止だ子孫弟姪をして陳訴せしむるも、有司にて輒ふたりに相い侵陵する者は、これを究す。

(1) 『元典章』卷五三、刑部一五、代訴、閑居官與百姓爭訟子孫弟姪代訴に同じ内容の詳細な記事がある。

(2) 得代。得替ともいう。前掲の記事にも得替閑居官員とあり、現職にない官員のこと。『明律國字解』は「代わりのあと役を待ちつけたること」という。

(3) 休致は、退休・致仕の二つを含むと考えられる。『六部成語註解』吏部。官員年老無用、則止官奏請、將其休官致仕、而仍留其原來品級。

(4) 追會公事と同じ。爭訟の關係者を法廷に召喚して陳述させることと解せられる。追會とは、追取會問の略。

(5) 侵陵。ここでは裁きの場にあつて、退任官が官位をかさに働

く不正行爲のこと。相は、複数の主格が行う動作に冠せられる助字。相互に、の意ではない。

【解説】 民事裁判では、官員の場合、たとえ致仕または得代閑居していても、見任と同様の特權を享受できる。この原則は、『明律』名例律・以吏去官（一二）や『明令』吏令・刷卷罰贖（一二）とも一致し、特に代訴を認める立場は、『明律』刑律・訴訟・官吏詞訟家人訴（三六五）及び『明令』吏令・家人代訴（一〇）にも繼承されている。

一七一 諸て、職官、吏民が毀罵せりと告するも、親うぢから聞くにあらざる者は、問うなけれ。違ひし者は、これを罪す。

(1) 『元典章』卷四四、刑部六、品官相毆、官吏告毀罵親聞乃坐に同文がある。

【解説】 『唐律』鬪訟一一・毆制使府主縣令の原注にもあるように、毀罵（詈・罵）は、官員が胥吏・部民から直接に惡口雜言を浴びせられたときでなければ、犯罪を構成しえない。この原則は、『明律』刑律・罵詈・罵制使及本管上司（三四八）でも變わらない。元朝では定かではないが、被害者が五品以上か六品以下であるかによつて、量刑が異なることでも、兩者は共通している。

一七二 諸て、職官、訟を聽く者は、事、有服の親、并びに婚姻の

家、及び曾って業を受くるの師、僱嫌する所の人と關わり、應に迴避すべくして迴避せざる者は、各々その犯す所を以てこれを坐す。輒に、官法を以て尊長を臨決する者あらば、赦に會うと雖も、仍お、職を解き、降敘す。

(1) 『元典章』卷五三、刑部一五の目錄には、聽訟關親迴避(闕文)と題する斷例がある。同じ内容の記事を掲載していたものと考えられる。

【解説】これも訴訟において、裁判官が擔當すべきでない事例を述べている。訴訟關係者のなかに、總麻までの有服の親屬、外姻、師傅のほか、怨恨關係のある者がいれば、その審判は別人に任せ、そのまま擔當してはならない。もし尊屬を裁けば、恩赦によって減刑されても、解任・降格は免れない。『明律』刑律・訴訟・聽訟迴避(三三八)では、迴避義務を怠れば、一律に笞四十となる點で、前項にあげた量刑上の格差は解消されている。罰贖條項を除けば、『明令』刑令・訴訟關親回避(一四〇)も同様である。

一七三 諸て、有司、事の蒙古軍に關わる者は、管軍官と約會して問う。

(1) 『元典章』卷五三、刑部一五、約會、軍民詞訟約會に同文がある。

(2) 蒙古軍。諸部族出身者の多い探馬赤軍戸に對し、モンゴル人

から成る軍戸を云う。中書省が直轄する腹裏各地の駐屯軍として、各萬戸府に配屬された。

(3) 約會は、管轄の違う官廳が立會って協議すること。約會歸問を略して約問と云う。約とは、誘うの意。

【解説】以下、一七九條まで、異なる戸籍に登録された人戸を管轄する官廳間で行われる約會制度、即ち立會裁判の規約を列擧する。

一般民戸と蒙古軍戸との紛争では、有司たる管民官は、刑事性の強い奸盜・詐偽には專決權を持つが、それ以外の事案は、管軍官の立ち合いで詮議する定まりであった。『明律』刑律・訴訟・軍民約會詞訟(三六四)は、これを踏襲しながら、全てに約會を定める點で若干異なる。

一七四 諸て、管軍官・奧魯官^②・及び鹽運司^③・打捕鷹房^④・軍匠^⑤・各投下の管領する諸色人等は、但し、強竊盜賊^⑦・寶鈔を偽造し^⑧・人口を略賣^⑥・塚を發き^⑨・火を放ち^⑩・姦を犯し、及び諸の死罪を犯さば、並びに有司より歸問す。その鬪訟^⑪・婚田^⑫・良賤^⑬・錢債^⑭・財產^⑮・宗從繼絕^⑯・及び科差不公^⑰もて、自ら相い告言する者は、本管より理問す。若し、事、民戸に關わる者は、有司より約會歸問し、並びに有司より追逮す。三約して至らざれば、有司、就便に歸斷す。

(1) 『元典章』卷五三、刑部一五、軍民詞訟約會、及び『元典章』

新集刑部、軍民相干詞訟には、モンゴル語直譯體を含む同文がある。

- (2) 奥魯 (orlu) は徵兵管區のこと。モンゴル語の故郷・出身地、又はトルコ語の陣營に由來する。在郷の軍戶は、州縣ごとに編成され、奥魯官を兼領する達魯花赤・管民正官の監督を受けた。その專論としては、村上正二「元朝兵制史上における奥魯の制度」『東洋學報』三〇一三、一九四三(『モンゴル帝國史研究』風聞書房、一九九三所收)がある。

- (3) 都轉運鹽使司(正三品)のこと。產鹽地區の大都河間・山東東路・河東陝西・兩淮・兩浙・福建に置かれ、鹽の生産・專賣を掌握した。四川茶鹽轉運司・廣海鹽課提舉司も知られる(『元史』卷八五、百官一、及び同書卷九一、百官七)。

- (4) 打捕鷹房。元代に特有の戶籍の一つ。狩獵・鷹狩りを仕事とし、管民官の監督を受けない。『元史』卷一〇一、兵四、鷹房捕獵。鷹房捕獵、皆有司存、而打捕鷹房人戶、多取析居・放良及漏籍字蘭奚・還俗僧道、與凡曠役無賴者、及招收亡宋舊役等戶爲之。其差發、除納地稅・商稅、依例出軍等六色宣課外、並免其雜泛差役。自太宗乙未年、抄籍、分屬御位下及諸王・公主・駙馬各投下。

- (5) 軍匠は、係官人匠・民匠と並ぶ匠戶の一つ。軍籍に登録され、局院での武器製造にあたった。鞠清遠に「元代係官匠戶研究」

『食貨』半月刊一九、一九三五、同「元代係官匠戶研究補記」『食貨』半月刊二二、一九三五の論考がある。

- (6) 投下。モンゴル貴族の采邑。諸王・駙馬・公主・功臣の分地・分封をいい、王室所屬の御位下とは區別される。投下には私的隸民のほか、各種の職人・農民を含み、徵稅・裁判・官吏任免に若干の自律性が認められていた。安部健夫「元代『投下』の語源考」『東洋史研究』三六、一九三八(『元代史の研究』所收)、村上正二「元朝における投下の意義」『蒙古學報』一九四〇(『モンゴル帝國史研究』所收)などの專論がある。

- (7) 強竊盜賊は、犯姦同様、死罪を最高刑とする。略賣人口(人身賣買)・發塚(墓暴き)・放火も、強盜又は竊盜を準用して斷罪された。

- (8) 偽造寶鈔。宋の偽造會子罪にあたり、これも死罪を最高刑とする。その詳細は『元典章』卷二〇、戶部六、造偽、造偽鈔不分首從處死、及び禁治偽鈔に見える。

- (9) 宗從は宗族のこと。繼絶とは、戶絶のため、權利者を失っていた家産を立嗣して繼承すること。

- (10) 科差。元代の稅目の一つ。憲宗五年(一二五五)から華北で實施された。科取差發のこと。正役の折納にあたり、絲料と包銀から構成される。賦課基準は、戶格・戶等によって複雑であった。安部健夫「元時代の包銀制の考究」『東方學報』京都二

四、一九五四（前掲『元代史の研究』所收）は、その專論である。

【解説】『明律』刑律・訴訟・軍民約會詞訟（三六四）と概ね一致するが、軍官が約會に應じないときには、管民官の專決權に委ねるとの條項は、削除されている。

一七五 諸て、州縣隣境の軍民相い關わるの詞訟は、元告は論ぜられし官司に就きて歸斷し、約會の例に在らず。斷じて理に當たらざれば、上司に赴き陳訴するを許す。罪は、元斷の官に及ぶ。

（1）『元典章』卷五三、刑部一五、元告、元告就被論問に引く舊例がほぼ同文である。もっとも、これが金の「泰和律」か否かは直ちには判斷できない。州縣隣境軍民相關詞訟は、隣近州縣軍民戶計相關詞訟と作る。

【解説】隣接する州縣の住民相互の紛争では、原告は被告の所轄官廳に提訴し、判斷を仰がねばならない。しかし、これは官憲の管轄から決まったことなので、約會制度は適用されない。前代からの通例として、判決に對する不服申立のため、上訴も認められていた。

一七六 諸て、僧・道・儒人争うあらば、有司は問うなかれ。止だ三家の掌る所をして會問せしめよ。

（1）『元典章』卷五三、刑部一五、約會、儒道僧官約會に同文があ

る。會問は、約會歸問の略。

【解説】僧人（和尚）・道士（先生）・儒人（秀才）は、いずれも別個の戸籍に登録された。各々免役などの特權を享受するとともに、特に前二者は管民官の支配外におかれた。従って、僧・道・儒戸間の紛争では、有司は審判から排除され、僧官と道官、儒學提舉司が會同して裁くことになる。儒戸を除くと、そうした事情は宋代もさして變わらない。

一七七 諸て、哈的大師は、止だ教を掌り、經を念ましむ。回回人の應有刑名・戸婚・錢糧・詞訟は、並びに有司よりこれを問う。

（1）『元史』卷二四、仁宗紀一、皇慶元年十二月丁亥。敕回回合的如舊祈福、凡詞訟悉歸有司、仍拘還先降璽書。『元典章』卷五三、刑部一五、問事、哈的有司問や『通制條格』卷二九、僧道、詞訟にも同文がある。

（2）哈的大師。民事・刑事を問わず、イスラム法に基づき、判決を下す裁判官（qadi）。イスラム法學者（ulama）は、これより廣い概念。聖地巡禮の先達をいうこともある。前嶋信次「元代の哈的大師について」『史學雜誌』六二一一、一九五八を參看。

（3）回回人。イスラム教徒の汎稱。木速蠻（musuman）とペルシア語の音譯も用いられる。ただ宗教の違いにかかわらず、也里可溫（キリスト教徒）を含む、西域人一般を回回と呼ぶこ

ともあり、ユダヤ教徒は木忽回回といわれた。

【解説】 かつてイスラム教徒に認めていた治外法権を否定するとともに、これを管民官の監督下におき、皇帝の直轄に改めたものである。『元史』卷二四、仁宗紀一の至大四年夏四月丁卯に「罷回回合的司屬」とあるのは、本條に先行する措置として注目される。

一七八 諸て、僧人、但し、姦盜・詐偽・人命を致傷し、及び諸の重罪を犯さば、有司より歸問す。^②その自ら相い争告すれば、各寺院の住持たる本管頭目より歸問す。若し、僧・俗、田土を相い争わば、有司と約會す。約會して至らざれば、有司、就便に歸問す。^④

(1) 『元典章』卷三三、禮部六、釋教、和尚頭目。また『通制條格』卷二九、僧道、詞訟（皇慶二年六月十七日）に同文がある。

(2) 『元史』卷一九、成宗紀一、大德元年六月丙辰。僧道犯姦盜重罪者、有司鞫問。同書卷一九、成宗紀一、大德二年三月戊子。詔、凡僧人犯奸盜詐偽、聽有司專決。輕者與僧官約斷、約不至者罪之。同様の記事は、『通制條格』卷二九、僧道、姦盜（大德七年七月）にも見える。

(3) 本管頭目。『元史』卷二四、仁宗紀一、至大四年二月丁卯。罷總統所及各處僧錄・僧正・都綱司、凡僧人訴訟、悉歸有司。この僧官廢止によって、一寺の主僧たる住持は、本管頭目として、僧尼の監督一切を任された。大戴正哉「元代の和尚頭目につい

て」『東方宗教』四二、を参照。

(4) 『元史』卷二四、仁宗紀一、皇慶二年六月乙亥。詔諭僧俗辨訟、有司及主僧同問、續置土田、如例輸稅。

【解説】 各寺院の住持は、民事事件のうちでも、僧侶間のもめごとに限って、單獨で處置できた。民戸との紛争では、管民官から裁判への立會を求められたに過ぎない。従前に較べ、皇帝權力による僧尼規制が一層強められているのが特徴である。

一七九 諸て、各寺院の稅糧、前宋より有する所の常住の、及び世祖の賜う所の田土にては、稅糧を納むるを免ずるの外、已後の諸人の布施、並びに己の力もて典賣せし者は、例に依りて糧を納む。^③

(1) 『元典章』卷三三、禮部六、釋教、和尚頭目、及び『通制條格』卷二九、僧道、詞訟（皇慶二年六月十七日）にも同文がある。

(2) 常住。常住田・寺觀常住免糧田ともいう。寺院所有地のこと。周藤吉之「南宋郷都の稅制と土地所有」『宋代經濟史研究』東京大學出版會、一九六二、五五〇頁を参照。

(3) 『元典章』卷二四、戸部一〇、僧道稅、僧道避差田糧にも同文がある。

(4) 典賣。字義通りには、買戻權付き賣買。典と賣に解すれば、買戻權を放棄した斷賣も含まれる。

【解説】 寺院所有地のうち、南宋の常住田の系譜を引くか、もしく

は世祖時代に下賜されたものについては、兩税負擔を免除されるが、それ以後に寄進されたり、寺院が獨力で購入した土地は、免税特權の對象とはならない。

一八〇 諸て、管民官、公事を以て所部を攝するには、並びに信牌を用う。その人を差し衆を擾す者は、これを禁す。

(1) 『元典章』卷二三、吏部七、公事、公事置立信牌に同文がある。

(2) 攝所部。攝は勾攝であつて、管下の關係者を召し出すこと。

(3) 信牌は、官憲の出す各種令狀。『明律國字解』には「信牌と云は、かきものの名なり。……年貢をとりたて、或は罪人を召るとき、自身は民間へゆかぬことなり。幾日の内にこの年貢をすますべし、此罪人を召連まいるべしと云ことを、地の遠近をつもり、日限をきりてかきつけてわたすなり」と説明する。

【解説】『明律』吏律・公式・信牌(八〇)の前提をなす。公事での官憲の農村出張、即ち下郷は、宋代でも嚴禁されていた(『慶元條法事類』卷四、職制門、職掌、職制令)。元朝の場合、勾引は信牌を給付された委差または曳刺祇候人のみの擔當となっていた。

一八一 諸て、^① 略を掩い、^② 骸を埋むは、有司の職なり。或は饑歲に流孥し、或は中路にて暴死し、親屬の收認するなく、應に有司に^③ 聞して檢覆すべき者は、檢覆既に畢らば、地主・隣人に付して收

葬せしむ。檢覆を須いざる者も、亦た就きて收葬す。

(1) 『元典章』卷四三、刑部五、檢驗、屍首檢驗埋瘞、及び『通制條格』卷二七、雜令、掩骼埋胔に同文がある。掩骼埋胔は『周禮』秋官・蜡氏に基づく。

(2) 檢覆。初覆檢驗、即ち檢屍のこと。『吏學指南』檢覆、謂究覆虛實也。

【解説】災害などによる死骸の埋葬は、傳統的に國家の責任で行うものとされた。元朝の場合、そうした行き倒れの死者は、親屬の立會を待たず、現場の管民官司が檢屍するよう定められていた。主要な河川・運河でも沿岸に假埋葬し、身元確認のため關係官廳との連絡にあつた(『元典章』卷四三、刑部五、漂流屍首埋瘞)。

一八二 諸て、災を救い患を恤むは、^① 鄰邑の禮なり。歲饑して輒に^② 閉糴する者は、これを罪す。

(1) 『通制條格』卷二八、雜令、閉糴(至元十二年六月)には、本項にいう縣の單位ではなく、路の單位での事例を認めることができる。閉糴は、閉糴と同じく、穀物の賣り惜しみ。

【解説】被災地に隣接する縣では、郷社ごとに置かれた義倉からの穀物放出を政府から指導されていたものと推察される。

一八三 諸て、郡縣、災傷あるも、時を過ぎて申せず、或は申する

に、實を以てせず、及び按治官、時を以て檢踏せざるは、皆なこれを罪す。

(1) 『元典章』卷三三、戸部九、災傷、檢踏災傷體例、及び『通制條格』卷一七、賦役、田禾災傷に同文がある。

(2) 檢踏とは、實地檢證のこと。『吏學指南』に「檢踏、謂親歷田疇也」とあるほか、夏田・秋田・水田などの地目や災害の時期に従い、通常一月以内の期限がきめられていた。

【解説】 災害調査については、前代から様々な手續きがある。本條の規則は、『明律』戸律・田宅・檢踏災傷田糧（九七）でもほぼ踏襲されている。

一八四 諸て、蟲蝗、災を爲し、有司、捕を失すれば、官は各々罰俸一月、州官は各々答二十七、縣官は各々二十七、並びに過を記す。

(1) 『元典章』卷三三、戸部九、災傷、捕除虫蝗遺子、及び『通制條格』卷一六、田令、農桑に關連の記事が見られるが、量刑については、そこでは明らかではない。

【解説】 蝗害對策について、捕獲に失敗した路府州縣官の罰則を定めている。

一八五 諸て、水旱、災を爲し、人民、食に艱しむに、有司の、時

を以て申報・賑恤せず、以て轉徙・饑孁を致す者は、正官は答三十七、佐官は二十七。各々見任を解き、先職より一等を降して敘す。

(1) 佐官。首領官のこと。參佐官の略稱。例えば『元史』卷九一、百官七、諸州には、「參佐官。上州、知事・提控案牘各一員。中州、吏目・提控案牘各一員。下州、吏目一員或二員」と見える。

【解説】 水・旱害對策に關して、管民官吏が報告・救済を怠り、被害を擴げた場合の罰則を定める。

一八六 諸て、有司、災傷を檢覆するに、或は熟を以て荒と作し、或は救うべきを以て救うべからずと爲すこと、一頃已上なる者は、罰俸、二十頃なる者は、答一十七、二百頃已上なる者は、答二十七、五百頃已上なる者は、答三十七。惟だ、荒を以て熟と作し、民を抑して糧を納めさせし者は、答四十七、これを罷む。故に託して行らず、檢覆を妨誤せし者は、答三十七。

(1) 『元典章』卷五四、刑部一六に收める、虛妄、虛報災傷田糧官吏斷罪、及び官吏檢踏災傷不實では、その實例が示される。量刑の基準は記載がない。

【解説】 一八三條に續き、災害に關わる虛偽報告に對する罰則をあげる。田土面積の差等を除いては、『明律』戸律・田宅・檢踏災傷田糧（九七）に概ね踏襲されている。

一八七 諸て、義夫・節婦・孝子・順孫、その節行卓異、應に旌表すべき者は、所屬の有司よりこれを舉ぐ。監察御史・廉訪司これを察し、但し、冒濫あらば、罪は、元舉に及ぶ。

(1) 『元典章』卷三三、禮部六、孝節、旌表孝義等事、及び『通制條格』卷一七、賦役、孝子義夫節婦に同文が見える。

(2) 配偶者の死後、節義を守って再婚しないとき、夫は義夫、妻は節婦と呼ばれる。『六部成語註解』不再娶曰義夫、不再嫁曰節婦。

(3) 尊屬に孝養を盡くす子孫。『六部成語註解』子曰孝、孫曰順。

【解説】『唐令拾遺』賦役令・第一九項及び『明令』禮令・旌表節義(四九)とほぼ一致する。義夫・節婦・孝子・順孫の表彰は、元朝に限らず、古くよりあり、とりわけ免役特權と深く絡むことから、官民雙方の關心は、この恩典の取得に少なからず向けられた。

一八八 諸て、高年の帛を賜るに、應に賜を受くべして、有司の實を以て報ぜざる者は、正官は答四十七、職を解きて別敘す。

(1) 『元史』卷二二、成宗紀四、大德九年六月庚辰。立皇子德壽爲皇太子、詔告天下。賜高年帛、八十者一匹、九十者二匹。『元典章』卷三、聖政二、賜老者の第三條にも同文がある。

【解説】成宗の皇后失憐答里の子・德壽を、皇太子に冊したときの詔書の一部が成文化されている。八十以上の老人に恩典を與える際

に、不正を働いた官吏は處罰されるが、その罰則自體は、のちに追加されたものと考えられる。

一八九 諸て、州縣、茂異の秀才を舉ぐるに、監察御史・廉訪司の體察を経ざる者は、開申するを得ず。

(1) 『元史』卷八一、選舉一、科目。舉遺逸、以求隱跡之士、擢茂異、以待非常之人。……延祐七年十一月、詔曰、比歲設立科舉、以取人材、尙慮高尚之士、晦跡丘園、無從可致。各處其有隱居行義・才德高邁・深明治道・不求聞達者、所在官司具姓名、牒報本道廉訪司、覆奏察聞、以備錄用。『元典章』卷二、聖政一、舉賢才にも同文がある。

(2) 茂異秀才。茂異は、優れた人材、秀才は、儒人のこと。『元史』卷八一、選舉一、總序。當時仕進有多岐、銓衡無定制、其出身於學校者、有國子監學、有蒙古字學・回回國學、有醫學、有陰陽學。其策名於薦舉者、有遺逸、有茂異、有求言、有進書、有童子。

【解説】茂異は、遺逸・求言・進書・童子と並び、非常特別の人材を官吏に登用する徑路である。推舉は路府州縣から行われるものの、監察官の検査を経なければ上申できない仕組みであった。

一九〇 諸て、民、弑逆を犯すも、有司の故を稱して聽理せざる者

は、杖六十七、見任を解き、三年を殿し、雜職もて敘す。

【解説】 弑逆は、大惡の筆頭、惡逆の範疇に入る。ここでは、尊屬殺害をいうものと考えられ、その糾問を怠った官吏に對する罰則を規定している。

一九一 諸て、屍を檢するに、有司^①故らに遷延し、及び檢覆の牒到るも受けず、以て屍變を致す者は、正官は答三十七、首領官吏は各々四十七。その親臨せず、或は人をしてこれに代えしめ、以て増減實ならず、輕重を移易し、及び初覆檢官の相い符同する者は、正官は事の輕重に隨い、罪を論じ、首領官吏は各々答五十七、これを罷む。件作行人は杖七十七。財を受くる者は、枉法^③を以て論ず。

(1) 『永樂大典』卷九一四所引『經世大典』の同文のほか、『無冤錄』卷上、屍帳式や『元典章』卷四三、刑部五、檢屍方式にも同じ内容の記事がある。

(2) 件作行人。檢屍の下働きをする賤民。『明律國字解』に、「件作行人とは、驗屍人なり、死骸を手にかけてあらたむるものなり。葬埋をもするなり。此方のえったなどのやうなるものにて賤しきものに、これをしよさにしてするものあるなり。南國にて多くは屠戸のすることなり、と『無冤錄』に云へり」と解説する。

(3) 枉法。受財枉法は、正官・首領官・吏人・件作行人の全てに適用された。南宋の『慶元條法事類』卷七五、刑獄門、驗屍に引く雜敕にも「諸行人因驗屍受財、依公人法」とある。

【解説】 『慶元條法事類』の驗屍に載せる雜敕には、注3のほかにも關係條項があつて、大枠では共通するとともに、『明律』刑律・斷獄・檢驗屍傷不實(四三六)とも、一致する部分が多い。以下、一九三條までは、檢屍上の規定を擧げる。

一九二 諸て、有司、監に在る囚人、病に因りて死するに、虚りて^②檢屍の文案を立て、及び覆檢官に關する者は、正官は答三十七、職を解き別敘す。已に代り、赦に會いし者は、仍おその過を記す。

(1) 『永樂大典』卷九一四所引『經世大典』のほか、『洗冤集錄』所載「聖朝頒降新例」(寶顏堂秘笈本)にも同文がある。

(2) 在監囚人。監は監房、未決のこと。奸盜・詐僞など杖罪以上にあたる嫌疑がなければ、原則として收監してはならない(『元典章』卷四〇、刑部二、繫獄、詳情監禁罪囚)。

(3) 關は、同格の官廳間で交わす平行文書。『吏文正續輯覽』三品以下、凡品級相同衙門、相通之文也。ここでは、覆檢官に虚偽の檢屍報告すること。

【解説】 獄内で病死者ができれば、すぐさま上司に報告し、檢屍しなくてはならない。これには、宋代から細かな規定があり、獄死者數

が一定の基準を越えると、擔當の官吏は恩赦に關わりなく處罰された（『慶元條法事類』卷七四、刑獄門、病囚）。

一九三 諸て、職官、屍傷を覆驗するに、屍已に焚瘞され、止だ初檢の申報に傳會する者は、職を解き別敘す。若し、已に改除するも、仍お、その過を記す。

（1）『永樂大典』卷九一四所引『經世大典』のほか、『洗冤集錄』所載「聖朝頒降新例」（寶顏堂秘笈本）にも同文がある。

（2）改除は、『明律國字解』に、「一任の内なりとも、役替えをして外の官になるを云」とあるように、任期を残してポストを替われば、別敘とみなし、記過のみが適用される。

【解説】覆檢以前に遺骸が火葬されたからといって、覆檢官は、初檢の報告をそのまま踏襲してはならない。

一九四 諸て、藩王及び軍馬、經過するに、郡縣の委積館勞は、並びに應に給すべき官物の内より支遣するを許す。隨ちに行省に申して知會せしむ。或は擅に移易・齊斂する者は、これを禁ず。

（1）『通制條格』卷一四、倉庫、關防（中統五年八月）に同じ内容の記事がある。同書卷一八、關市、和雇和買（至大四年三月）も、モンゴル貴族の隨員が州郡官吏に收奪を働きかけることを禁じている。藩王は諸王のこと。

（2）委積館勞は、州縣の蓄えを使い官邸で勞うこと。注1の記事は、「應合支飲食等」とあつて、所要の存留見在錢物がなければ、行省と連絡のうえ係官錢穀から支辦するよう定められていた。

（3）移易とは、貿易借貸ともいわれ、『吏學指南』には「遷動官物、日移、更改原數、日易」と説明される。『明律國字解』では「わがものを官物にふりかゆるなり」と言っている。

一九五 諸て、郡縣、聖旨・令旨に遇うにあらざれば、諸王・駙馬・大臣、經過するも、官吏並びに郊迎し、公務を妨害するを免ず。仍お贖するに錢物を以てするを得ず。按治官、常にこれを糾察す。

（1）『元典章』卷二八、禮部一、迎送、省部臺院所差人員迎接にも實例があり、大臣は、朝省大官人（中書省の高官）と作っている。

（2）皇帝のことばは聖旨というのに對し、皇太子や親王のことばを令旨という。皇太后ならば懿旨。

（3）郊迎とは、出郭迎送の謂で、城外において出迎えもてなすこと（『元典章』卷二八、禮部一、迎送體例）。

（4）贖以錢物。注1の記事は、打發人情錢物に作る。錢別として贈賄すること。

一九六 諸て、職官は、但し、軍情違誤を犯さば、受敕官は各路にて就斷し、受宣官は都省・行省より處分す。その餘の公罪は、各路並びに輒に斷するを得ず。

(1) 『元典章』卷三九、刑部一、刑名、不得擅決品官と内容は一致するが、公罪を公私罪犯と作る點で、本條とややくい違っている。

【解説】 軍情の違誤に限っていえば、六品以下の受敕官は、路の裁きに従い、五品以上の受宣官は、都省・行省に處斷を委ねた。勿論、通常の犯罪ならば、一四五條や一五六條の規則が適用される。

一九七 諸て、囚徒を部送し、中路次る所の州縣、囚を獄に寄せずして旅舎に監收し、以て反禁して亡ぐるを致す者は、部送官は答二十七、本處に還職し、防護官は答四十七。就きて捕賊を責む。仍お過名を通記す。

(1) 『元史』卷一〇五、刑法四、捕亡。諸解送囚徒、經過州縣止宿、不寄收牢房、輒於逆旅監繫、以致脫監在逃者、長押官答二十七、還役、防護官四十七、記過。

(2) 寄獄は、寄禁ともいい、未決囚や罪人を代理監獄に拘留すること。監收は監禁、反禁は脫獄を意味する。

(3) 長押官のこと。罪人の護送や官物の輸送を、起點から終點まで擔當する。『明律國字解』は「長押官とは、配所にて囚徒のさ

いれうになりて工役をさする人なり」と説明する。

(4) 防送官を指し、罪人の護送や官物の輸送において、警備を掌る。隨時、所轄地區の管民官または管軍官が勤めた（『通制條格』卷一九、捕亡責限）。

【解説】 徒・流・遷徙・充軍のために護送中の囚徒は、經路の路府州縣の旅館ではなく、獄舎に宿泊させ、逃亡を防止した。『慶元條法事類』卷七五、刑獄門、部送罪人に見られるように、宋代の豊富な法規を踏まえたもので、『明律』刑律・捕亡・徒流人逃（四一四）との共通點も多い。

一九八 諸て、有司、各處に流囚を遞至し、輒に主意・故縱する者は、杖六十七。職を解き、先品より一等を降して敘す。

【解説】 過失責任を問う前條とは異なり、護送中の流囚を、故意に逃亡させた場合の罰則を定める。『唐律』捕亡九・流囚囚役限内亡、また『明律』刑律・捕亡・徒流人逃（四一四）と關連しており、『慶元條法事類』卷七五、刑獄門、部送罪人に引く捕亡敕も同様である。但し、『明律』では、犯人と同罪に問われるなど、刑罰計算では異同も多い。

一九九 諸て、和顧・和買は、時に依りて估を置き、物に對し價を給す。官吏・權豪の、因緣結攬し、私を營み、公を害する者は、

これを罪す。

- (1) 『元典章』卷二六、戸部二二、物價、和買照依市價、及び『通制條格』卷一八、關市、和雇和買(至元十九年十月)に同文がある。

- (2) 元朝の場合、和雇は、陸路の車兩や水路の舟船を雇いあげることをいい、和買は、政府が各種物品を買い上げることをする。陳高華「論元代的和雇和買」『元史論叢』三、一九八六(『元史研究論稿』中華書局、一九九一所收)を参照。

- (3) 依時置估。隨時、市價によつて値段を決めること。和雇・和買は、政府の算定した時價に基づき代金が支拂われる立前であつた。

- (4) 權豪勢要、官豪勢要として、元から明にかけてしばしば使われる。

【解説】和雇・和買から官僚・豪民の中間利得を排除し、正當な對價の給付を命じたもの。『明律』戸律・倉庫・出納官物有違(一四二)及び『明令』戸令・和雇和買(三八)との關連性が強く、『唐律』厩庫二七・出納官物有違とは、やや懸隔がある。

二〇〇 諸て、有司、諸物を和買するに、多餘估計し、その價を分受する者は、官錢を盗むに準じて論ず。^②分受せざれば、冒估の多寡を以て論ず。監臨及び當該官吏の、名を詭りて中納する者は、^④

物價は全てこれを沒す。價鈔を剋落する者は、不枉法の贓に準じて論ず。即ちに價を支せざる者は、臺憲官これを糾す。

- (1) 『通制條格』卷一八、關市、和雇和買(至元二十八年四月、至大四年三月)に同文がある。冒估は、不法な割増計算をいい、多餘估計とも表現される。

- (2) この件りは、『唐律』賊盜三六・監臨主守自盜、及び『明律』刑律・賊盜・監守自盜倉庫錢糧(二八七)と關係する(二二九條に後出)。

- (3) 當該官吏とは、監臨に對する主守に相當の正官または首領官吏と考えられる。

- (4) 詭名中納とは、官員が名義を偽り政府に納品すること。『明律國字解』は「詭名とは、己が商賣をすべき爲に、外の人の名を名のるなり。中納錢糧とは、錢糧を納めて鹽引を申しうるなり。是等は平人の所作には罪なけれども、民と利を爭ゆえに、官人には罪なり」と解説する。

- (5) 剋落。削り取つて着服すること。剋減欺落。『吏學指南』剋落、謂支多給少、贏取其餘也。『六部成語註解』剋減公項、落於己囊也。

- (6) 臺憲官。在內は內臺管下の監察御史、在外は肅政廉訪司がそれぞれ監察にあたつた。

【解説】和買の決濟は、司縣または路府が見積もり、それぞれ上司

の認可を得てから、鈔だてで行われる。減額支給や遲滯はもちろん、實際の支拂額よりも高く算出し、その差額を着服することが取締の對象となる。官員自身の納品も嚴禁されていた。和買とは限らないが、『明律』**刑律・受贓・在官求索貸借人財物**(三七二)との共通性も強い。陳高華・前掲「論元代の和雇和買」にも言及がある。

二〇一 諸て、職官、輒に親故人事の物を以て、爲めにこれを民に散じ、錢穀を鳩斂する者は、その時直を計り、餘利を以て坐と爲す。不枉法の贓より二等を減じて罪を科す。錢物は各々その主に歸す。

【解説】 もしも官員が親類・舊知からの贈物を、管下住民に強制的に賣りつけられ、贓罪に問われ、物品の時價と賣値の差額に基づき刑罰が算定された。『明律』**刑律・受贓・在官求索貸借人財物**(三七二)も同様で、親故人事之物が自己物價と一括され、刑罰は不枉法に准ずる點で僅かに相違するに過ぎない。

二〇二 諸て、職官、私に民力を用うる者は、笞二十七、過を記す。顧直を追してその民に給す。

【解説】 地方官が管下住民の民力、即ち家畜・車兩・船舶などを無斷で私用に供すれば、その稼働賃金は不正を働いた官員から追徴され、當該資産の所有者に支拂われる。『明律』**刑律・受贓・在官求索**

貸借人財物(三七二)の一節の「若私借用所部内馬牛駝羸驢及車船碾磨店舍之類、各驗日計雇賃錢、亦坐贓論、追錢給主」と對應する。

二〇三 諸て、所屬の官吏の俸錢を剋除して公用と爲す、及び進上の禮物に備うるも、既に職を去る者なれば、並びに論ずるなかれ。

(1) 『通制條格』卷一三、祿令、剋除俸錢、及び『元典章』卷三六、兵部三、使臣、出使筵會事理と密接に關わる。ただそこでは、離任者に對する免責文言は見られない。剋除は剋減と同じ。

(2) 公用。ここでは公式の筵席の費用調達を指すが、通常は官廳の經費、又は公費で賄うべきもののこと。宋代の公使錢・公用錢に相當。

(3) 進上禮物は、上司に送る付け届け、賄賂。注1の『通制條格』には、「元貞元年三月、御史臺奏、外頭行省官・宣慰司官人每拜見來呵、於他每所管的官吏俸錢齊斂來有。他每來這裏做人情、那路府州縣官吏生受有」とある。

【解説】 部下の俸給を減らし、公用や上司への付け届けに充てても、罪狀の發覺が離任後ならば、免責される。

二〇四 諸て、在任の官、屬吏の俸を斂めて、去官に贈る者は、笞四十七、職に還す。

二〇五 諸て、職官、輒みだりに所部内の驛馬を借騎する者は、笞三十七、先職より一等を降して敘し、過を記す。

(1) 『元典章』卷三六、兵部三、違例、借騎舖馬斷例。至元四年某月、中書戸部、……議得、借驛馬、徒二年、品官贖銅。また同書同卷、禁借用舖馬にも類例はあるが、本項とはかなり違う。

二〇六 諸て、職官、所部の親故及び理として應に往復すべきの家にあらずして、輒みだりに慶弔の禮を行う者は、これを禁ず。違ひし者は、これを罪す。

刑法 二

職制 下

二〇七 諸て、職官の戸、軍籍①に在れども、管軍官、輒みだりにその身を追逮する者は、これを禁ず。

(1) 軍籍。軍戸の戸籍、軍冊ともいう。文獻上は、憲宗時代から確認される。至元八年(一二七二)には、前年の全國的な人口センサスをもとに編成され、以後の基準となった。『通制條格』卷二、戸令、以籍爲定(至元九年正月初四日)や『元典章』卷三四、兵部一、正軍、查照軍籍當役などを參看。

【解説】 軍戸出身とはいえ、官員の家は、軍官から逮捕されずに済む特權を保證されていた。二一六條までは、軍官犯罪について記述が續く。

二〇八 諸て、中外・大小の軍官、法を以て軍人を撫順するあたわず、またこれを害する者は、監察御史・廉訪司よりこれを糾察②す。行省の官及び宣慰司元帥府の官、故なくして軍官を以て自衛③せしむる者も、亦たかくの如くす。

(1) 『元典章』卷三四、兵部一、正軍、拯治軍官軍人條畫に同文がある。『元史』卷二四、仁宗紀一、至大四年六月己酉。詔、存恤軍人。

(2) 前掲の『元典章』には「如今、各衙門官人毎、管軍的勾當裏、侵犯有。奧魯官司、不爲優恤軍人、却行擅科難泛差役、軍官並不用心撫治、以致軍人氣力消乏」とある。

(3) 元朝では、邊境の要地に、行省とは別に多くの宣慰司を立て、これに都元帥府または元帥府を付屬させた。『元史』卷九一、百官七、宣慰司。宣慰使司都元帥府。秩從二品。使三員、同知二員、副使二員、經歷二員、知事二員、照磨兼架閣管勾一員。なお元帥府の官秩は正三品であつた。

(4) 注1の記述は、自衛を根隨に作り、終始供まわりを勤めさせる意で捉えている。

【解説】軍官の服務規則の一例。軍戸の疲弊を防ぐことを目的とする。

二〇九 諸て、軍官の不法は、各處の憲司、就きてこれを問う。樞府、官を委ねて同問するを得ず。

【解説】軍官の犯罪は、肅政廉訪司（憲司）で即座に裁くが、その際には樞密院（樞府）の委任する官員を立會わせることはできない。この原則は『明律』名例・軍官犯罪（六）では、六部・都察院・按察司・府州縣係りのときにのみ適用される。九七條で觸れた行省の裁判權、及び『明令』刑令・軍官犯罪（八八）とも關係する。

二一〇 諸て、管軍官、輒に佩する所の金銀符を以て典質に充つる者は、笞五十七、散官一等を降す。質を受くる者は、二等を減ず。

（1）『元典章』卷二九、禮部二、牌面、軍官解典牌面に同文がある。

（2）金銀符は、主として軍官の帶びる牌符。金符は千戸クラス、銀符は百戸クラスに與えられ、軍官の承襲に伴い、子孫にも繼承された。前掲の『元典章』には、「金銀牌面、乃國家之公器、著臣子之尊卑、軍官受之、子孫襲替、綿綿不絕。比之民職、特加優重」とある。箭内互・前掲「元朝牌符考」も參看。

（3）充典質とは、解庫（質店・典鋪）への質入れ。注1の記事は、解典質當に作る。軍官の場合、質入れした牌符は、本人に還付

される。

（4）元代の軍官には、宣授の正二品から從五品までと、敕授の正六品から從八品までを併せて、三十四階の武散官が設けられていた（『元史』卷九一、百官七、武散官三十四階）。

二一一 諸て、軍官、贓を犯し、應に職を罷め、殿降すべき者は、佩する所の符を上る。再敍の日、これを給す。

（1）『元史』卷二〇、成宗紀三、大德三年甲午。詔、軍官受贓罪、重者罷職、輕者降其散官、或決罰就職停俸、期年許令自効。また同五年七月丁未には「詔、軍官受贓者、與民官同例、量罪大小殿黜」とある。『元典章』卷四六、刑部八、軍官取受例の實例では、贓罪に對する殿降、並びに牌符の返上について、一切觸れていない。

（2）殿降。殿年降敍の謂で、三年を上限とする停職處分の上、ランクの低いポストで再任させた。『明令』刑令・軍官犯罪解降（二二六）では、杖罪以下をその對象とする。

二一二 諸て、軍官、軍人を役使するに、萬戸は八名、千戸は萬戸の半ばを減じ、彈壓は千戸の半ばを減ず。是の數を過ぐる者は、罪に坐す。

（1）『元典章』卷三四、兵部一、占使、軍官札也定數の第二款、及

び『通制條格』卷七、軍防、私役にも同文がある。

- (2) 役使軍人。占使軍人、支使軍人とも表現する。前掲『元典章』の第一款によれば、「謂如招討萬戶、即與各路總管府相對、凡有往復行移、若不存設公使祇候人等、實難辦集」とあり、事務連絡に當番勤務をさせることとされる。

- (3) 彈壓。千戶所に所屬の軍官。定員はモンゴル人一名・漢人一名の二名で、官秩では百戶より低く、上千戶所は從八品、中・下千戶所は從九品であつた (Ch'i-ch'in Hsiao, Military Establishment of Yuan Dainasty, Harvard University Press, 1978, p. 170, n. 22, 『元典章』卷九、吏部三、軍官、定奪軍官品級)。

【解説】 政府の度重なる規制にも拘わらず、軍官が軍人を正規の勤務とは別に使役するケースは、元朝治下の中國でも一向に跡を絶たなかった。そのため、現實の要請に答え、當番兵に相應の員數を認め、弊害の蔓延を防いだのである。

- 二三 諸て、軍官、軍人を驅役し、死を非命に致す者は、事を量りて斷罪し、並びに職を罷めしむ。燒埋銀を徴して、苦主に給す。
- (1) 『元典章』卷五四、刑部一六、私役、百戶王伯川役死軍に同文がある。

- (2) 驅役とは、注1の規定にも「軍官每爲私己的勾當、係官軍人根底、奴婢一般使有」とあるように、私用のために勞役させる

こと。

- 二四 諸て、管軍官、擅に正軍を放ち、及び雇役錢を分受せし者は、枉法を以て論じ、除名して敘さず。

- (1) 正軍。元朝の軍戸は、實際の兵役に就く正軍戸と、主に費用面から軍役を負擔する貼軍戸から構成されていた。陳高華の「論元代的軍戸」『元史論叢』二、中華書局、一九八二(『元史研究論稿』所收)はその專論。

- (2) 雇役錢。軍役の代行者に支拂うべき費用。『元史』卷九八、兵一、兵制。至元十八年六月、樞密院議、正軍貧乏無丁者、令富強丁多貼戶權充正軍應役、驗正軍物力、却令津濟貼戶。其正軍仍爲軍頭如故。或正軍實係單丁者、許僱雇練習之人應役、丁多者不得僱雇、軍官亦不得以親從人代之。

【解説】 正軍戸の軍役は、容易に免除されない。もしも軍官が不當な軍役解除を行い、その際に雇役錢の授受があつたと判明すれば、枉法に問われた。『明律』兵律・軍政・縱放軍人歇役(二二六)の文言にある軍役の受財賣放である。

- 二五 諸て、管軍官吏、軍人の衣糧・鹽菜錢を剋除し、并びに全ていまだ給散せざるに、赦に會わば、剋除已に招せし者は追給し、いまだ招せざる者は徵を免じ、いまだ給散せざる者は給散す。

の軍人・官牛を私役し、官地を帶種し、并びに管民官、官地を占種し、收むる所の子粒、已に招する者は追没し、いまだ招せざる者は徴を免ず。⁽⁴⁾

(1) 鹽菜錢。軍人が本俸の外に支給される手當。注2の記事は「窮暴錢」に作る。『續資治通鑑長編』卷三一五、元豐四年八月丙辰の「詔、應出界戰兵、除家糧外、各支口糧米二升并鹽菜錢」のように、その名は宋代にも見える。

(2) 『元典章』卷二二、戸部七、追徴、格前追徴錢糧粟例に同文がある。追給は、徴給と同じく、追徴してから給付すること。同書卷四六、刑部八、以不枉法論の軍官減剋軍糧も類例として參考になる。

(3) 占種。『明律國字解』に「占種とは、我物とし作るなり」と説明する。帶種もほぼ同様の方向で言及されている。

(4) 『元典章』新集兵部、延祐七年革後粟到軍官私役軍人等例には同文があり、『明律』兵律・軍政・縱放軍人歇役（三三六）にも概ね踏襲されている。但し、收益の沒官については觸れていない。

【解説】軍官の場合、軍人給與の減額、又は不拂いを行っても、恩赦に會えば、罪狀を認めた額面のみ辨償・支拂をすればよい。軍人・官牛を勝手に使つて官田を耕作させた際も、管民官と等しく、その收穫は、自白に基づき、不當な手段で得たと判明した分だけ沒

收された。

二二六 諸て、軍官、その出征の軍人の家屬を役し、またこれに錢を借し、多く息を取る者は、並びにこれを坐す。

(1) 『通制條格』卷七、軍防、禁治擾害（至元十四年三月・至元三十一年六月）に同文があり、『元典章』卷二、聖政二、撫軍士（至元三十一年）とも關係する。陳高華「論元代の軍戸」には、參考になる論證が見受けられる。

二二七 諸て、軍官、輒に軍人を縱ちて民を誣うるに罪を以てし、錢物を嚇取して贓を分ち自ら厚くする者は、贓を計りて罪を科す。除名して敘せず。

二二八 諸て、民間失火し、鎮守の軍官、坐視して救わず、反りて軍を縱ちて剽掠せし者は、臺憲官よりこれを糾す。

(1) 『元典章』卷五七、刑部一九、禁火、遺火搶奪に同文がある。失火に乗じた盜罪は、白晝搶奪とされ、強竊盜賊通例によって量刑された。この斷例は、御史臺から行臺へ回覽されているが、取締の主體が、臺憲のみとは明言していない。

(2) 鎮守軍官。注1の『元典章』は、巡捕軍人・弓手を配下におく本管頭目として、直接には鎮撫を擧げる。各路の鎮守司と省

都鎮撫司の指揮官のことと見られる。

二二九 諸て、軍官、輒^{みだ}に民訟を斷ずる者は、これを禁ず。違ひし者はこれを禁ず。^②

(1) 『元典章』卷五三、刑部一五、聽訟、軍官不許接受民詞に同文がある。

(2) 『元典章』卷三四、兵部一、正軍、曉諭軍人條畫。軍人訴訟、須經所屬官司、自下而上陳告。如理斷不當、許肅政廉訪司赴訴。違反行爲は、主に廉訪司で取り締る規則であった。

【解説】 民訟の受理・審決は、管民官の權限に屬する。管軍官の裁判權は、軍人關係に限って認められていた。

二三〇 諸て、軍官、仇を挾み分を犯し、輒^{みだ}に刃を持し連帥を殺さんと欲する者は、杖六十七、職を解き別敘す。

【解説】 連帥とは、明代には、按察司の呼稱であるが、ここでは肅政廉訪司の意と考えられる。従って、本條にいう威力を以て殺害の素振りを見せる行爲は、とりもなおさず、日頃の軍官と監司の緊張關係を窺わせるものと言えよう。

二二二 諸て、投下の官吏は、賊を受くれば、常選官と同じく論ず。^①

(1) 常選官。中書（正七品以上）及び吏部（從七品以下）の選任

による官僚ポスト。『元史』卷八五、百官一、左司。左司所掌、

……知除房之科有五、一日資品、二日常選、三日臺院選、四日見闕選、五日別里哥選。『歷代名臣奏議』卷六七、治道。成宗大德七年鄭介夫上奏曰、……今乃以省部除授之官、指爲常選、以天子委用之人、指爲別里哥選。

【解説】 以下、二二七條までは、皇室・王族を始め、モンゴル支配層に所屬する位下・投下に關わる規則を列舉する。

二二三 諸て、投下の雜職、賊罪を犯す者は、これを罷む。常調^①の殿降を以て論ぜず。

(1) 常調は、通常の勤務評定を経て昇進・降格すること。常調の殿降とは、一般官僚と同等の罰則を適用する意で使われている。

【解説】 同じ雜職でも、投下のポストは、賊罪に問われると、通常の降格ではすまず、即座に罷免される。一般の投下官吏では、朝廷で任免する常選官と待遇が變わらぬのと較べると、明らかに冷遇といふべきである。

二二三 諸て、投下、妄りに上旨と稱し、民・站を影占し、その徭役を除き、故縱して民害を爲す者は、杖七十七。その家財の半を沒す。占する所の民は、杖一百七。元籍に還す。

【解説】 諸色戸計は、いちど登録されると、その種別は容易に變更できない。しかも、民戸や站戸について、上意と偽り、投下戸計として雑差役を免じたり、この不正を放置したため、他者に負擔の皺寄せを受けさせたときは、投下の係官はもちろん、不正を働いた戸計も處罰され、元通りの戸籍に戻される。梅原郁「元代差役法小論」『東洋史研究』二三四、一九六五、陳高華「元代役法簡論」『文史』一一、一九八一（『元史研究論稿』所收）などの論考がある。

二二四 諸て、王傳^①の文卷は、監察御史の考閲すること、有司と同じくす。

（１） 諸王は王相府を立て、長官の王傳^{ウルス}に分地及び食邑の事務一切を監督させた。なお王傳の設置は、同姓諸王にのみ認められた特權ながら、皇帝から派遣される點では、彼らに對する監視も行っていたのである。『元史』卷一六、世祖紀一三、至元二十七年五月癸亥。敕、諸王分地之民有訟、王傳與所置監郡同治、無監郡者、王傳聽之。監郡は達魯花赤、朝廷から諸王の分地に派遣された。村上正二・前掲「元朝に於ける投下の意義」一九六〇一九八頁（『モンゴル帝國史研究』所收）参照。

【解説】 王傳文卷とは、モンゴル諸王の分地支配全體に關わる文書である。しかも、皇帝の官吏たる王傳とすれば當然のことながら、監察御史の行う文書檢閲において、管民官司と變わらぬ原則が適用

されれば、投下領の自律性は、必然的に否定される。

二二五 諸て、位下^①の財賦・營田等司^②を置くは、歲終に則ち會す。會し畢らば、廉訪司よりこれを考閲す。

（１） 皇室所屬の隸民集落（幹^{ナルド}耳朵）は、御位下といい、一般の投下から區別される。位下は各々專屬の官署に管理され、皇后の中政院、皇太后の徽政院、皇太子の詹事院などがあつた。

（２） 財賦司は、財賦提舉司（正五品）をいい、營田司は、營田提舉司（從五品）をさす。前者は、財賦總管府（正三品）又は徽政院に屬し、後者は會福總管府（正三品）の下に置かれ、佛教寺院の維持に協力した。

【解説】 皇室所屬の財務機關は、年末の收支決算につき、肅政廉訪司の檢閲を受けなければならない。

二二六 諸て、投下の輕重の囚徒は、並びに廉訪司より審録^②す。

（１） 投下の司法は、投下人戸から選ばれた斷事官が擔當するきまりであつたが、仁宗時代に斷事官の廢止を斷行したことがある。『元史』卷四、仁宗紀一、至大四年冬十月辛卯。罷諸王斷事官、其蒙古人犯盜詐者、命所隸千戶鞫問。

（２） 審録。『明律國字解』に「審録とは、府州縣の官府にてせんぎ相濟みて罪きわまりたる上を、監察御史・提刑按察司、再遍吟

味するを云」とある。

【解説】 二三四條の注1に見たように、元朝政府は、王傳や達魯花赤を通じて、投下領の司法權にかねて干渉してきたが、肅政廉訪司が罪人の再審に關わることで、その傾向は一層強められたといえる。ここでも、投下領の自律性は、かなり否定されている。

二三七 諸て、藩邸の事務、大なる者は奏裁し、小なる者は中書に移す。擅に教令を以て行する者は、これを禁ず。

(1) 『元史』卷一九、成宗紀二、大德二年六月庚申。禁諸王擅行令旨、其越例開讀者、併所遣使拘執以聞。藩邸・藩府は、皇太子の潛邸に限らず、王府一般と推測される。令旨を教令とわざわざ斷るのも、そのためかと推測される。

【解説】 モンゴル諸王は、分地分民支配にあたり、數々の特權を享受していた。その意味で、自ら下すべき司法判斷に皇帝の裁許を求め、一般事項にまで中書に干渉させることは、投下領の限界を示している興味深い。松田孝一「モンゴルの漢地統治制度—分地分民制度を中心として—」『待兼山論叢』史學篇、一九七八參照。

二三八 諸て、倉庾官吏、府・州・司・縣の官吏人等と百姓の合に納むべき稅糧を以て通同攬納し、折價・飛鈔する者は、十石以上は、各々刺面して杖一百七。十石以下は、九十七。官吏は除名し

て敘せず。退閑の官吏・豪勢の富戶・行舖人等の違犯せし者は、十石の下は、八十七。その部糧の官吏、情を知りて分受すれば、答五十七。除名して敘せず。覺察を失する者あらば、部糧を監臨するの官吏は、二十七。府・州の部糧を總ぶる官吏は、一十七。

若し能く犯人を捕獲せし者は、本罪を與免す。若し、倉官・人吏等、官糧を盜糶すれば、攬納して飛鈔すると同じく論ず。情を知りて糶買すれば、十石以上は、杖一百七、十石の下は、九十七。その漕運官吏の覺察を失する者あらば、糧數の多寡を檢べて罪を治む。その盜糶の糧價・結攬の飛鈔は、追徴して沒官す。正糧は、倉官并びに結攬・糶買人より、均徴して官に還さしむ。

(1) 『元典章』卷四七、刑部九、侵盜、攬納飛糧等例に本條と關わる詳細な記事がある。

(2) 攬納。徵稅請負のこと、包攬代納。『明律國字解』「總じて年貢を納るは、百姓の内より解戶とて役にあてて、さされて一縣一郷の年貢を持て行くことなるに、その解戶、いなかものなれば、官府のこと京のこと不案内なれば、思の外に失却等も多く、又さなくても官府へ出ることを畏ること人情なり。此機に乗じて、舟つき上り場などに居るいたづらもの、幾口も一つにうけこみて官倉へ納めてやるものあり、是を攬納と云。『明律』戶律・倉庫・攬納稅糧（一三〇）にも禁止條項が見える。

(3) 折價。鈔立てで納稅すること。注1の『元典章』に記す「輕

齋」でも同様。『吏學指南』輕齋、謂本納糧斛、而今納鈔者。『元史』卷九三、食貨一、稅糧。至元十七年、……隨路近倉輸粟、遠倉每粟一石、折納輕齋鈔二兩。富戶輸遠倉、下戶輸近倉、郡縣各差正官一員部之、每石帶納風耗三升、分例四升。

(4) 飛鈔は、空の納稅證書を給付すること。攬納に伴う不正は、宋代でも同巧である。『吏學指南』飛鈔、謂物不到官、虛給收附者。『元史』卷九三、食貨一、稅糧。凡糧到倉、以時收受、出給朱錢（朱鈔）。權勢之徒、結攬稅石者罪之、仍令倍輸其數。倉官・攢典・斗脚人等飛鈔作弊者、並置諸法。

(5) 退閑官吏は、退任した官員。退闕官吏・退職官吏・閑良官ともいう。豪勢富戶は、權勢之徒・權豪勢要・官豪勢要とも呼ばれる豪民層。行舖は坐賣として行に組織された商人。

(6) 徵稅擔當の管民正官・首領官をさす。物觀本『明律』戸律・倉庫・收糧違限（一二七）は、提調は長官、部糧は或佐貳・首領と傍注に述べる。『明律國字解』によれば、提調部糧官吏典とは、「とりたての役人なり。部糧とは、そのもちの年貢のことなり。ここは糧の字に稅糧を兼る。提調は、總支配なり。分催里長は、名主なり。官人は總支配をして、里長がうけとりて、又その己が支配々々を分けてとりたつるゆへ、分催と云」と説明される。このことは、『元典章』卷二四、戸部一〇、稅糧違限官員科帳によっても裏付けられる。

(7) 前掲『元典章』は、親民部糧官吏に作る。ここでは、提調にあたる縣や錄事司の達魯花赤・管民長官と想定される。

(8) 漕運司とは、中統二年（一二六一）に設立の漕運所に由來する。至元十九年（一二八二）、大都には京畿都漕運使司、揚州には江淮都漕運使司が置かれ、前者は、淇門から通州まで、後者は、江南から中潞までの漕運を管轄するとともに、中潞・淇門間、通州・大都間の陸上輸送は、提舉司に扱われた。至元二十四年（一二八七）になると、河西務（現在の河北省河清縣付近）の都漕運使司が獨立し、京畿都漕運使司の扱う御河（衛河）の漕運と海運糧の接運に要する人員・船舶・資材に關する事務を擔當した。星斌夫「元代海運運營の實體」『歴史の研究』七、一九五九、同『大運河—中國の漕運—』近藤出版社、一九七一、六五〜七四頁。

【解説】至元二十五年（一二八八）十月、桑哥の斷行した經濟政策の一環として、尙書省の立案した徵稅・運糧に關する罰則條項が骨子となっている。『元史』卷一五、世祖紀二二の同年十月己卯には、給倉官俸とあり、當該措置のもう一つの側面を示している。

二二九 諸て、倉庫官吏人等は、主守する所の錢糧を盜まば、一貫以下は、五十七に決し、十貫に至らば、杖六十七、二十貫ごとに一等を加え、一百二十貫は、徒一年、三十貫ごとに半年を加え、

二百四十貫は、徒三年、三百貫は死に處す。贓を計り、至元鈔を以て則と爲す。諸物當時の價估を以て、これを折計す。

(1) 『元典章』卷四七、刑部九、侵盜、侵盜錢糧罪例に同文がある。

『元史』卷一八、成宗紀一、元貞元年七月己卯。職官坐罪論斷、再犯者加二等。倉庫官吏盜守錢糧、一貫以下笞之、至十貫杖之、二十貫加一等、一百二十貫徒一年、每三千貫加半年、一百四十貫徒三年、滿三百貫者死。計贓以至元鈔爲則。

(2) 主守。『唐律』名例五四、稱監臨主守によれば、倉庫の出納や囚人の看守にあたる流外官以下を云い、判官以上の監臨とともに、監守と併稱される。その概念は『明律』でも變わらず、『吏學指南』の「躬親保典、謂之主守、雖職非統攝、臨時監主亦是」との記述も同様である（『譯註』五、三三四～三六頁）。

【解説】 倉庫官吏が管下の錢糧を着服した際の刑罰計算について述べている。『唐律』賊盜三七・監守自盜、『明律』刑律・賊盜・監守自盜倉庫錢糧（二二八七）と系列は同じながら、雜職たる倉庫官吏を主守と一括するところに元朝の特徴が窺える。

二三〇 諸て、倉庫官の、庫子・攢典・斗脚人等が、官物を侵盜・移易するを知りて、匿して舉發せざる者は、犯人と同罪。覺察を失する者は、犯人の罪より四等を減ず。

(1) 『元典章』卷四七、刑部九、侵盜、侵盜錢糧罪例に同文がある。

(2) 下級吏員の呼稱。庫子と斗脚人等（斗級・斗子）は、倉庫の出納・管理に攜わり、攢典は倉庫や稅務の帳簿係を勤める。『明律國字解』は「攢は攢典とて算用をし帳を付る役なり、庫子は倉のばん、斗級はますみなり」とする。

(3) 侵盜。侵欺、侵使のこと。『吏學指南』侵欺、謂辦多納少、益己虧官也。侵使、謂徵到官、未入倉庫、而專擅用費者。『明律國字解』は「侵欺とは、すこしづつ手前へとりこむなり」と解す。

(4) 與犯人同罪。『明律』戸律・倉庫・庫秤雇役侵欺（一二六）によれば、犯人ともども監守自盜に問われること。

(5) 覺察。覺舉と同じ（『唐律』名例四一・公事失錯）。『明律國字解』に「心づきて見出すを覺察と云、心づかずしてその惡事を知ぬを失覺察と云」と説明する。

【解説】 倉庫の胥吏が官物を着服・流用したにも拘わらず、これを隱蔽したり、察知できなかった正官の罰則を定める。『明律』戸律・倉庫・錢糧互相覺察（一二三八）とも概ね一致する。

二三一 諸て、倉庫の錢糧の出納は、設くる所の首領官及び提舉・監支納以下、攢典・合干人以上、互相に覺察す。若し、違法の短少あらば、一體に均陪せしむ。任内、收支の錢糧、正收・例除は皆な完にして、方めて由を給するを許す。

(1) 『通制條格』卷一四、倉庫、關防、及び『元典章』卷二一、戸

部七、倉庫類に引く至元新格〔彙輯〕第五八、第六九に同文がある。

(2) 倉庫における官長クラスの呼稱。提舉は、倉庫に限らず、その名を冠する多くの官廳にあり、時には都提舉・同提舉・副提舉も置かれた。これに對し、監支納は京畿都漕運司・都漕運司、並びに上都留守司が管轄する倉庫に配屬され、大使・副使などの吏僚を従えていた。

(3) 正收。收入を帳簿に明記すること。正支の對語。『明律國字解』にも「正收とは、これこれのことにうけとりたりと記したるは、たしかにそのことにうけとりたるを云なり」と見える。

(4) 例除。錢糧の缺損につき、慣例で認められた控除枠と推測される。

【解説】前項の續き。倉庫の錢糧は、事務擔當の胥吏から首領官に至るまで、相互に出納を検査することになっており、正當な理由なく缺損すれば、賠償に連帶責任を負う。たとえ任期を終えても、收支決算に遺漏がないと分かるまで、轉任に必要な由帖(解由)は支給されない。『明律』戸律・倉庫・錢糧互相覺察(一二三八)、及び支錢糧及擅開官封(一二四〇)と概ね一致する。

二三二 諸て、鈔庫^①を典守するの官は、已に昏鈔^②を倒するも、退印を用いざれば、答五十七、見任を解く。提調官は計點を失すれば、

答一十七、並びに過名を記す。

(1) 鈔庫。交鈔庫ともいう。初めは昏鈔と新鈔の倒換を扱う機關の名稱でしかなかったが、至元一九年(一二八二)頃から、行用庫・行用交鈔庫・行用鈔庫・倒鈔庫といわれるようになる。と、平準・行用の兩庫の總稱となった。いずれも提領・大使・副使各々一員を置く。前田直典「元代における鈔の發行制度とその流通狀態」『北亞細亞學報』三、一九四四(のち『元朝史の研究』一九七三所收)五九頁、九六頁を參照。

(2) 元朝の交鈔は、紙質・印刷ともに粗惡なため、耐久性に乏しく、新鈔との交換が缺かせなかった。この倒換によって回收された昏鈔は、退印を捺してから焼却する原則だったが、新鈔は常に不足ぎみなため、プレミアムをつけて取引されたり、昏鈔一貫を八百文で用いるなどしてしのがねばならなかったという。

【解説】回收された昏鈔は、再び市場に流通せぬよう廢棄される。従って、これに必要な手續きを取らなかった鈔庫の官員はもちろん、提調にあたる管民正官も處罰を免れない譯である。

二三三 諸て、鈔庫の官は、輒に自己の昏鈔を以て、名を詭り倒換する者は、答三十七、過を記す。

二三四 諸て、平準行用庫^②、昏鈔^③を倒換^④するに、多く工墨錢^⑤を取るも、庫官、知りて曾って分贓^⑥せざる者は、一等を減ず。並びに職を解き、別叙す。主謀^⑦の又た贓を受くる者は、枉法を以て論じ、除名して敘さず。

(1) 『元典章』卷五四、刑部一六、違例、多收工墨除名に同文がある。『通制條格』卷一四、倉庫、倒換昏鈔にも幾つか實例がある。

(2) 平準行用交鈔庫・平準行用鈔庫・平準交鈔庫・平準鈔庫、あるいは單に平準庫ともいい、路ごとに置かれた。金銀と鈔との兌換のみならず、昏鈔の倒換をも兼ねる（前田直典・前掲「元代における鈔の發行制度とその流通状態」六〇～六六頁）。

(3) 工墨錢とは、新鈔の印刷費。三分、即ち三十文が相場とされ、昏鈔と倒換するとき徴收される。

(4) 分贓。『明律國字解』に「分贓とは、分けまえをとるを云」とある。

(5) 主謀。主使と同じ。『六部成語註解』刑部。自出主意、令他人行之也。

【解説】元朝の鈔庫では、倒換に伴う工墨錢の収益は相當な額になるため、數々の不正が頻發しており、こうした取締條項が相次ぎ發令されていた。

二三五 諸て、白紙坊^①の典守官の、私に桑楮皮^②を受け、折價^③する者

は、贓を計り、枉法を以て論じ、除名して敘さず。仍お贓を追し、本色を收買して官に還さしむ。

(1) 白紙坊。禮部管下の官營工場であり、詔書・宣敕の用紙を製造する。『元史』卷八五、百官一、白紙坊。秩從八品。掌造詔旨宣敕紙笥。大使一員、副使一員。至元九年置。

【解説】白紙坊の官員は、民間からの正規の買上げのほかに、桑楮皮を私的に取得して換金すれば、枉法とみなされ、賠償責任も負わされた。

二三六 諸て、京倉^①、糧を受くるには、部官、これを董^②す。外倉^③の收糧は、州縣の長官、これを董^④す。收すること法のごとからず、腐敗を致す者は、按治官、これを通究す。

(1) 京倉は、京師（大都）にあつて、漕糧を貯藏する倉庫。京畿都漕運使司に屬する。都漕運使司管下の河西務一四倉・通州一三倉・河倉一七も、京倉に準じて扱われ、明代では京通二倉と通稱された。ともに部官即ち戸部の監督下に置かれた（『元史』卷八五、百官一、京畿都漕運使司、都漕運使司）。

(2) 外倉とは、京倉の對稱。地方に置かれた倉庫一般をさす。

(3) 『通制條格』卷一四、倉庫、關防、並びに『元典章』卷二二、戸部七、倉庫類に引く至元新格（「彙輯」第六二、第六七）とほぼ一致する。『元典章』卷四七、刑部九、侵盜、攬飛盜糧等例に

も同じ趣旨の記事があるが、按治官については何ら記述がない。

【解説】 京倉・外倉における税糧の管理責任について述べる。『明律』戸律・倉庫・損壞倉庫財物（一四四）では、杜撰な管理のために、税糧を損壞すれば、主守は坐贓に問われ、全員で賠償・補填するもの、とされる。

二三七 諸て、倉官、親屬を委任して、家丁と爲し、官糧を盜糶するを致す者は、笞五十七、職を解き、殿敍す。同僚、相い容隠すれば、四十七、職を解く。

二三八 諸て、倉官、輒に官斛を翻釘し、多く民租を收めれば、主謀する者は、笞五十七、同僚、初て情を知らざるも、既に知りて改正するあたわざる者は、三十七、並びに職を解き別敍す。

(1) 『通制條格』卷一四、倉庫、關防、並びに『元典章』卷二一、戸部七、倉庫類に引く至元新格（「彙輯」第六八）と關連する。

(2) 官斛は、徵税のため、政府が規格を定めた柁目。南宋の文思院の官省斛斗が踏襲された。翻釘は、手を加えること。『元史』卷九三、食貨一、税糧。秋税・夏税之法、行于江南。……其輸米者、止用宋斗斛、蓋以宋一石當今七斗故也。『至正金陵新志』卷七、田賦志。米用文思院斛石、當今七斗、又軍斗、當今七升

弱。周藤吉之「南宋の耗米と倉吏・攬戸との關係」『宋代史研究』東洋文庫、一九六九、が参考になる。

【解説】 税糧受納の公平を期するため、倉庫官吏に政府が公認する柁目の厳正な運用を定めた條項である。不正を働いた者はもちろん、犯行を知りながら阻止できなかった者も處罰される。『明律』戸律・倉庫・多收税糧斛面（二二八）の骨子と殆ど變わらず、主謀を倉官・斗級に限定し、同僚は提調正官と作るなど、異同は僅かである。『明令』戸令・較勘斛斗秤尺（四〇）も同様。

二三九 諸て、京師、毎日官米を散糶するに、人ごとに一斗に止む。權豪勢要及び祿ある家の、輒に糶買する者は、笞二十七。中統鈔二十五貫を追して、告人に付し、賞に充てしむ。

【解説】 大都における官米放出では、一人当たり購入總量が規制される。官僚・豪民による買占めが懸念されていることからみても、恐らく救荒對策に伴う措置と考えられる。

二四〇 諸て、官局造作の典守、輒に材料を剋除する者は、贓を計り、枉法を以て論じ、除名して敍さず。

二四一 諸て、運司辦課の官は、取受して事發すれば、辦課畢の日、追問す。代を受け離職する者は、就きてこれを問う。

(1) 運司辦課官は、各地の都轉運鹽使司が管轄する場務の司令・

司丞・管勾といった現場スタッフをさすと考えられる(『元史』
卷八五、百官一、吏部、同書卷九一、百官七、都轉運鹽使司)。

(2) 課利収益は三箇月に一度取りまとめ、四季ごとに通年の收支
決算を行う定めであった。この會計検査が終わるまでは、係官
の贓罪も審問されないのである(『元典章』卷二二、戸部八、常
課、課程毎季類納)。

二四二 諸て、鹽場の官、人を勘問して、死を致す者は、轉運司よ
り官を差してその職を攝せしむ。犯人を發して、有司に歸せしむ。

(1) 『元典章』卷二二、戸部八、鹽課によると、私鹽の取締は、こ
と細かに言及されるものの、鹽場における當該規定については
何ら明文がない。

【解説】 鹽場の辦課人員は、運司の管下にあつて、一定の裁判權を
有するが、被疑者を不當にも獄死させれば、管民正官の審判を受け
ねばならない。『明律』戸律・課程・鹽法(一五三)では、私鹽を犯
した者は、鹽運司や巡檢司または守禦官司ではなく、有司が裁くと
斷るだけで、違犯者に對する處置には觸れていない。

二四三 諸て、稅務の官、輒に民の務に到れるの文契を以て、枉げ
て匿稅と作し、その罰錢を私する者は、枉法を以て論じ、除名し

て敘せず。

(1) 稅務官。院務官ともいい、商稅の徵收を掌る。宮澤知之「元
朝の商業政策——牙人制度と商稅制度——」『史林』六四二、一九
八一に詳論されている。

(2) 元代の商稅は、販賣地で商品の三十分の一を徵收するだけ
で、納稅が済むと稅契(文契)を交付した。城内に入るとき、
この受領書がなかったり、虚偽の文書と判明すれば、匿稅とし
て商品は半分を沒官、あと半分は摘發者に賞與された。罰錢を
私するとは、これを隱匿すること(『元典章』卷二二、戸部八、
匿稅、入門不弔引者匿稅、隱匿商稅罪例)。

二四四 諸て、財賦總管・淘金提舉の司存、護持の制書ありといえ
ども、事の應に糾劾すべき者は、監察御史・廉訪司、法に準じて、
これを行う。

(1) 元代江南では、稅糧管理のため、大別して有司・江淮財賦
府・江浙財賦府の三系統があつた。江淮財賦府は、至元一六年
(一二七九)の創立。宋の謝太后・福王の獻上した事産、賈似道
の地土、劉整らの田地を收め、のち江淮等處財賦都總管府に發
展した。江浙財賦府は、至大元年(一三〇八)、朱清・張瑄の沒
官田土を管理するため設置された。土地の収益は共に宮中の有
力者に歸し、有司たる管民官は直接干渉できない仕組みであつ

た（植松正「元初江南における徵稅體制について」『東洋史研究』三三一、一九七四）。

（2）淘金提舉は、金の採掘を掌る部局。『元史』卷九四、食貨一、歲課。初金課之興、自世祖始。……在江浙者、至元二十四年、立提舉司、以建康等處淘金夫凡七千三百六十五戶隸之。所轄金場凡七十餘所。未幾、以建康無金、革提舉司、罷淘金戶、其徵・饒・池・信之課、皆歸之有司。

二四五 諸て、庫藏を守るの軍官、夜、直宿せず、盜を致す者あらば、笞三十七、職に還す。捕盜して獲ざる者あらば、圍宿の軍官・軍人は、失う所の物貨を追陪し、盜を獲、賊を徵するを俟ちて給還す。若し、強劫に遭い、軍官・軍人の力及ばざる所の者は、追斷の限りにあらず。

（1）『元典章』卷五一、刑部一三、防盜、關防倉庫盜賊に同文があつて、初めは八作司管下の倉庫を警備するための措置に過ぎなかつたことが分かる。

（2）宿衛諸軍または鎮戍軍から成る圍宿軍は、宗室諸王が參集する大朝會のとき、皇帝の宮帳を圍繞して警護するため、隨時組織された（『元史』卷九九、兵二、宿衛）。

二四六 諸て、雜造の局院、輒に諸人と軍器を帶造せし者は、これ

を禁ず。

（1）『元典章』卷三五、兵部二、雜例、軍匠自造軍器には、同じ趣旨の記事がある。帶造は、ついでに製作すること。

（2）雜造局、または雜造に關わる局院一般を指す。諸路總管府のほか、隨路諸色人匠都總管府や管領怯憐口諸色民匠都總管府または管領諸路怯憐口諸色民匠都總管府に置かれ、概ね大使・副使各一員が監督にあたつた。

【解説】兵器生産は、兵部管下の軍匠の任務ながら、管民官司が民匠に命じて行うこともあり、こうした豫防措置が必要とされたのである。

二四七 諸て、兩浙財賦府の徵政に隸する者は、錢穀・造作を掌治すれば、歲終に成を報じ、次年正月より二月に至るを以て、廉訪司より文書を稽す。違ひし者は、これを糾す。

（1）『憲臺通紀』照刷徵政院文卷（皇慶元年十一月）に同文がある。

（2）兩浙財賦府。南宋沒官田土を財源とする江浙等處財賦總管府を前身とする。至元二十六年（一二八九）には、桑哥の權力を背景に、江淮等處財賦總管府と改められ、中宮（中政院）に歸屬した。大德四年（一二〇〇）には廢止され、その田賦は有司の管轄下に入った。至大元年（一二〇八）になると、江淮等處財賦都總管府が新たに發足し、至大三年（一二三一）には皇太

后(徽政院)管下の章慶使司に移された(『元史』卷八九、百官五、江淮等處財賦都總管府など)。

【解説】 この背景には、江南支配をめぐる皇室内の激しい権力争いがある。特に徽政院(皇太后)・中政院(皇后)・詹事院(皇太子)の場合、その置廢・交替のめまぐるしさは、徵稅體制のかかえる政治性の強さの反映であり、同時に臺憲・有司の動きは、これらに對する皇帝權力の干涉を明示するものにはかならない。

二四八 諸て、有司、橋梁修せざる、道塗治めざる、修治すといえども、牢強ならざる者は、按治及び監臨の官、これを究治す。

(1) 『元典章』卷五九、工部二、橋道、修理道路隄岸、及び『通制條格』卷三〇、營繕、堤渠橋道(至元七年九月)には、同じ趣旨の記事がある。

【解説】 橋梁・道路の保全・管理は、管民正官が監臨官となり、毎年九月一日から十月一日までの間に管下の住民を動員して行うことになっていた。この條項は、『唐律』雜律三六・失時不修隄防の系譜を引き、直接には『明律』工律・河防・修理橋梁道路(四六〇)に繼承されている。

二四九 諸て、有司、時を以て隄防を修築せず、霖雨既に降り、水潦並びに至り、民の妻子を溺れしめ、民害を爲す者は、本郡の官

吏、各々罰俸一月、縣官各々笞二十七、典史各々一十七、並びに過名を記す。

(1) 『元典章』卷五九、工部二、橋道、體察修築隄岸には、同じ趣旨の記事がある。

【解説】 『唐律』雜律三六・失時不修隄防を基本に据えて述べられる。また『明律』工律・河防・失時不修隄防(四五八)は、隄防の管理不備、財産・人身の損失と段階を追って罰則を定める。量刑からいえば、『唐律』が最も重く、この條項は最も軽い。

二五〇 諸て、漕運の官、輒みだりに水陸の舟車を拘括し、商旅を阻滯する者は、これを禁ず。

(1) 『永樂大典』卷一五九四九に引く『經世大典』にも、至元二十年(一二八三)十月のものとして趣旨の同じ記事がある。『大元海運記』も同様である。

【解説】 以下、第二五三項までは、漕運、特に海運關係の規則を列挙する。

二五一 諸て、漕運の官、輒みだりに贓を受け、水手人等を縦ちて、稻糠を以て、官糧に盜換する者は、枉法を以て、贓を計りて罪を論ず。除名して敘せず。

(1) 『通制條格』卷一四、倉庫も阻壞漕運(元貞二年正月)には、

同じ趣旨の記事がある。

二五二 諸て、海道都漕運萬戶府、轄する所の千戸已下に罪あらば、萬戸これを問い、萬戸に罪あらば、行省これを問う。情に循う者は、監察御史・廉訪司これを察す。漕事畢り、然る後、廉訪司その案牘を行う。

(1) 至元二十八年(一二九二)、四つの海道運糧萬戶府を合併して二つの都漕運萬戶府とし、朱清と張瑄だけに管理させた。共に江浙行省の平江路(現在の江蘇省吳縣)に置かれ、總運糧額のうち、朱清は約四割、張瑄は約六割を受け持った。『永樂大典』卷一五九五〇に引く『經世大典』によれば、例えば、張瑄の海道都漕運萬戶府は、達魯花赤一、萬戸二、副萬戸三、首領官四、經歷一、知事一、照磨兼提領案牘一、令史六、通事一、奏差六、鎮撫二、千戸・百戸各三三の官員を持ち、八つの翼から成る輸送組織を編成していた。

【解説】 元代の海運は、至元十九年(一二八二)に三つの運糧萬戶府を姑蘇(吳縣)に設け、萬戸の羅璧・朱清・張瑄らに命じて、漕糧四萬六千餘石を大都に運ばせたのに始まる。翌年、海道運糧萬戶府を二つ置き、至元二十四年(一二八七)には、新たに發足した行泉府司の下に都漕運海船上萬戶府と平江等處運糧萬戶府の二つが増設され、海運は本格段階に入った。しかし、大徳七年(一三〇三)、

元々海賊上がりの朱清・張瑄の罷免によって、海運運營は彼らの獨占方式から政府直營に變わり、二つの海道都漕運萬戶府も、海道運糧萬戶府の一府に統合された(星斌夫・前掲『元代海運運營の實體』、藤野彪「朱清・張瑄について」『愛媛大學歷史學紀要』三、一九五九)。

二五三 諸て、海道運糧の船戸、官糧を盜糶し、風に遭いて覆没すと詐稱する者は、贓を計りて刺斷す。赦に會うといえども、なおこれを刺す。

(1) 『元典章』卷四七、刑部九、侵盜、攬飛盜糧等例には、海運と漕運の雙方に従事する者の規約として、同じ趣旨の記述があり、類例は『通制條格』卷一四、倉庫、運糧作弊(皇慶二年四月)にも見えている。なお、赦宥の言及はない。

(2) 船戸。船戸ともいう。沿海・沿江地方で船隻を持ち、運輸業を營む有力者で、當局の和雇に應じていた。盛時には八〇〇〇戸もあったらしく、その中から毎年一八〇〇戸が雇傭されていた(星斌夫・前掲『元代海運運營の實體』、及び斯波義信『宋代商業史の研究』風聞書房、一九六八、八七頁、一二六―一二七頁)。

(徳永洋介)

二五四 諸て、使臣^①の行李^②、脫脫禾孫^③及び驛吏^④、輒^⑤に敢て搜檢する者は、これを禁ず。^⑥

(1) 使臣は宋代では、一定の武階を持つ臣下の總稱として用いられるのが普通であったが、元代では、朝廷の特命を受けて地方に出使する人員を指し、従つて驛遞使用と深くかわる。

(2) 次條では行囊^⑦といい、相い似るが、前代の『慶元條法事類』の行李の用例を参照すると、この方がより大きな荷物のようなものである。

(3) 都會關要の驛站^⑧に置かれ、驛傳使用の使臣たちの非違を檢察する。羽田博士は「明瞭にする」(todaya) という語幹に sum という接尾語が加わつたものと解されるが、異説もある(『元朝驛傳雜考』『羽田博士史學論文集・歴史篇』七一頁)。

(4) 『元典章』卷三六、兵部三、脫脫禾孫休搜行李に同文がある。但しこの禁令も時期により改變が見られる。

【解説】 以下二三條は、驛站利用者の中心をなす、中央派遣の使者をめぐる禁令と、その違反に對する處罰を列舉する。但しこの部分は、あくまでも「職制」の視點から條文を取捨しており、「驛站」が主人公なわけではない。

二五五 諸て、使臣の行囊過重にして驛馬を壓損するに、脫脫禾孫と使臣、交ごも贈好を爲し、法をもつて稱盤せざる者は、答二十

七、過を記す。

(1) 『元典章』卷二十六、兵部三、禁約使臣梢帶沈重には、出使人員、騎坐鋪馬、爲無馳駄馬匹、多於兀刺赤馬上、梢帶種袋・行李・皮篋子沈重物貨……、致將馬匹壓損、因而倒死。とその具體像を描いている。

(2) 『刑法志譯注』が「盤せりと稱す」としているのは不適切。盤は取調べる、稱ははかりにかける。稱盤で熟語。『吏文正續輯覽』では「秤、秤量也、盤、有再三詳察秤量之意」とする。

二五六 諸て、急遞鋪^⑨、輒^⑩に遞する所の實封の文書を開き、妄りに無名の文字を入るる者は、答五十七。

(1) 元は世祖の初年から急遞鋪の制度を設けた。それは宋代の急脚遞や金代の急遞鋪と類似はするけれども、遙に整備された制度で、中央と地方官司の文書の送達に使われた。なお、明代のそれは、『大明令』三四條にその骨子がみえる。(羽田亨、前掲『元朝驛傳雜考』七九頁以下)。

二五七 諸て、急遞鋪、上下半月毎に、府州の判官・縣の主簿、親臨して遞する所の文字を檢視す。但し、稽違・磨擦・沈匿あらば、鋪司・鋪兵^⑪は即^⑫に事の重輕を檢べて、罪に論ず。各路の正官一員それを總べ、廉訪司これを察す。その職ならざる有らば、親臨官

は、初犯は答一十七、再犯は一等を加え、三犯は省に呈して別議す。總提調官は親臨官より一等を減ず。季毎に、上司に稽違有りや無きやを具申す。仍お、各官の任滿つるの日に、解由に開寫して、これを黜陟す。

(1) 元でも明でも、鋪司と鋪兵の比率は一對四〜六程度であった。

(2) 親臨提調官の意で上出の府州判官、縣の主簿を指す。なお『刑法志譯注』はこの部分を誤讀している。

(3) 『元典章』は總行提調官に作る。これも上出の各路の正官のこと。

(4) 『元典章』卷三十七、兵部四の冒頭に掲げる急遞鋪をそのまま文章にしたもの。

【解説】 羽田博士は、元の急遞鋪の特性を強調され、また通常の站赤や軍事の海青站の相違を説明されている。この一條はそうした急遞鋪の管理についての重要な資料であるとともに、それがあくまで官署間の文字の傳達を主目的としていたことをうかがわせる。

二五八 諸て、使臣、輒みだりに懷駒の馬に騎る者、取・與各々答五十七、及び車を以て馬に易かうる者は、俱にこれを坐す。

(1) 『永樂大典』卷一九四一六に引用する「站赤一」の太宗十一年己亥十月十五日條には、奉旨、驛傳勿給懷駒牝馬、如違、給者・

乘者、各杖五十、使臣若無急事、令乘牛車。とある。なお、『刑法志譯注』が懷を壞に改めるのは不適切。

二五九 諸て、公主の下嫁するに、迎送・往還並びに傳置に由るを得ず。

(1) 本條は公主の降嫁の際の迎送・往還に驛傳を使用する禁令であらうが、下嫁と迎送・往還の三者の疑いも若干ある。『元典章』卷三十六、鋪馬の不許濫差鋪馬に、大徳十年に欽奉した聖旨條畫に、「諸處站赤消乏、蓋因諸王・駙馬・公主、於内外府、不詳事體驗急巨細、動輒馳驛、以致站戶逃移」というのが、特權階級の横暴をうかがわせよう。

二六〇 諸て、使臣にして城に在り、輒みだりに驛馬を騎占する者は、これを禁ず。違ひし者はこれを罪す。

【解説】 驛遞を使う使臣は、必ず館驛内に宿泊する規定であつた。まして、道路が狭く雜沓する城市内で驛馬を乗りまわすことは、交通妨害、事故の面からも嚴禁された。在城は次條の在道の反對概念。

二六一 諸て、驛使道に在り、回馬2を奪3いて乗る所の馬に易かえ、馳なせて死に至らしむる者は、その直を償3わしむ。若し、私事を以て、故らこゝろに良馬を選び、馳なせて死に至らしむる者は答二十七。仍

おその直を償わしむ。

(1) 驛使の語は『明律』二六五條に「驛使稽程」などとして見える。徂徠は「傳馬を賜わりたる使者」と解す。

(2) 驛馬は州縣の定められた驛站で、規定に従って交換される。

次の驛まで行ってカラで歸って來る馬が回馬。

(3) 鋪馬の倒死に對する賠償の例としては、『元典章』卷三十六、違例の走死鋪馬交陪を擧げておく。明律・兵律・郵驛・多乘驛馬(二六六)と關連。

二六二 諸て、使臣、多く分例を取らば、答一十七。多き所を追して官に還さしめ、過を記す。使還の人員は軍情の急務を除くの外、日に三驛を過ぐるを得ず。驛官は仍お關文に於て、起止の程期を標寫す。違ひし者は各々答一十七、再犯は役を罷めしむ。

(1) 分例は、使臣が宿頓、換馬など站赤を使用するに當って供給される食糧等の定額。その早い例は『元典章』卷十六、使臣の定下使臣分例(中統四年)に見ることができし、全體の概念を知るには、同卷冒頭の分例表が便利である。

(2) 本條は、恐らく使還の人員の前に「諸」の字が脱落しているかと思われる。ここでは現テキスト通り續けておく。

(3) 『元典章』卷三十六、使臣、使臣不過三站にも、驛馬を疲斃させぬため、除爲軍情急速勾當、不拘此限外、據常例緩慢勾當差

出人員、毎日不越三站走遞。と記されている。

(4) 關文は三品以下の品級の同じ衙門でやりとりする文書。この場合は前途の驛站に送る文書を指す。

(5) 罷役という用語は、普通には胥吏をやめさせる時に使う。こは驛官にかかるのかどうか不詳。

二六三 諸て、驛に乗る使臣、或は道を枉げて私を營み、祇待を横索し、或は舊を訪ねて逸遊し、馬乗を餓損すれば、並びに申聞して斷治す。

(1) 祇待は站赤と關係して『元典章』にしばしば見える用語、祇應接待の略で、食糧その他のサーヴィスの謂。

二六四 諸て、使臣、道を枉げ驛を馳せる者は答五十七。脱脫木孫、擅に依隨して驛を給せし者は、例に依りて罰を科す。

(1) 枉道馳驛は、規定の驛路によらず、別の道を使って驛馬を馳せること。『唐律疏議』職制、一二八條にその罰則があるが、元代とはかなり違ふ。『明律』は枉道馳驛は杖六十で、この條文の刑罰を繼承している。なお枉道馳驛の實例は、『元典章』卷三十六、違例の背站馳驛斷例と、同卷の枉道馳驛があげられる。

二六五 諸て、驛使に、公牒を詐改し、多くの馬を起す者は、杖八

十七。その官馬を部押するに、輒みだりに私馬を夾帶し、多く草料を取る者は、ならびにその私馬を没入す。

【解説】 この條も前段と後段がどう關係するのか疑問がある。『元典章』卷三十六、給驛などで明らかなように、驛站使用には公式の證明書鋪馬劄子、鋪馬印信文書が支給される。同卷同處の使臣起馬數目にみられるように、使臣はとかくその水増しをはかった。後半は、驛站制と直接にはつながらず、特定地域で官馬を運搬する際、その草料を便宜驛站に仰ぐことから起る不正への禁令である。その具體例としては、『元典章』卷十六、官吏の差割内開寫分例草料が適當かと思われる。

二六六 諸て、朝廷・軍情の大事に、旨を奉じ遣使せられし者、佩するに金字の圓符①を以て驛を給せらる。その餘の小事は、ただ御寶の聖旨②を用う。諸王・公主・駙馬もまた軍情の急務のために遣使する者は、佩するに銀字の圓符を以て驛を給せらる。その餘は止だ御寶の聖旨を用う。若し濫りに給する者は、臺憲官③よりこれを糾察せしむ。

(1) 『元史』卷一〇一、兵志四、站赤の序に、遇軍解之急、則又以金字圓符爲信、銀字次之とあるのが本條と直接關係する。羽田亨前掲「元朝驛傳雜考」九一頁以下に、モンゴル時代の符牌の詳しい考證があり、また卷頭にはその寫眞も掲載する。ここに

いう金・銀の圓牌(符)は、世祖至元十六年以後制定されたものとみることができる。

(2) 御寶聖旨は皇帝直接の命令書、お墨付。御寶は玉璽のこと。同じ使臣であっても宣使、省差とは種々の點で區別される。

(3) 臺官＝御史臺官と憲官＝廉訪司官。

二六七 諸て、高麗の使臣、帶する所の徒從は、來らば則ち俱に來り、去れば則ち俱に去らしむ。輒みだりに中路の郡邑に留りて買賣する者はこれを禁ず。馬を易かえて界より出ずる者は、これを禁ず。

【解説】 元初世祖の時代、高麗の使者が正式に入貢した回数は三十六といわれる。彼らは宋代と異り、鴨綠江を越えて陸路大都に至った。そこで、元の驛遞の馬を持出すことが問題になるかと思われる。なお『元史』卷一六、至元二十八年十二月には、高麗國、鴨綠江西十九驛、經乃顔反、掠其馬畜、給以牛、各四十。の記事が見える。

二六八 諸て、出使の官員、至る所、輒みだりに官吏の筵宴を受け、及び官吏輒に相い邀請すれば、並びに風憲①より糾察す。

(1) 『元典章』卷三十六、使臣、出使筵會事理に、今後、諸出使官吏、除正祗應分例外、並不得預本處官吏宴會、其本處官吏並不得邀請、許提刑按察司體察、如有違犯之人、計贓定罪、設宴及赴宴之人、一體科斷。という提案がされ裁可されている。邀請

は招待。なお六三條を參看。

二六九 諸て、使臣、過ぐる所の州縣にて、故無くして城に入るを得ず。故有りて城に入る者は、止だ公館に於て安宿せよ。輒みだりに官民の家に宿せる者は、風憲よりこれを糾す。^①

(1) 『元典章』卷三十六、使臣の使臣驛内安下と、同じ部分の禁使臣人家安下をつなぎ合わせたもの。公館は館驛となっている。ちなみに、そのいずれもが世祖の聖旨である。

二七〇 諸て、使を遣し詔書を開讀せしむるに、過る所の州郡にて、就便に開讀する者は聽きこす。經由する所に非ずして、輒みだりに往く者はこれを禁ず。^①若し本宗の事、須らく親往すべき者は、此の限りに在らず。^②

(1) 『元典章』卷二十八、迎送、開讀許令便路に同文がある。

(2) 『元典章』には、本宗公事とか、錢人本宗事といった用例がいくつか見える。『明律國字解』ではこれを「本人と云うこと」と説明している。本人又は本人の職務と直接かわることという方向で理解できよう。

二七一 諸て、使臣、至る所の處、親戚・故舊有り、禮として應まさに追往すべき者は、聽きこす。^①

(1) 『元典章』卷三十六、使臣、出使筵會事理の最後に、凡出使人員、於所至之處、如親戚故舊、禮應往返之人、賓主宴樂、理難斷絕。と許容する方向の記事がある。なお六十條を參看。

二七二 諸て、命を受け、出使して還るに、給驛の文字・符節及び錫貢の物を置し、久しく進ぜざる者は、杖六十七、過を記す。

【解説】『唐律疏議』で言えば、職制律、一三一條などが關係するが、刑罰の組立て方が全く違う。反面、『明律』吏律・公式の出使不復命は本條を細分して整備したと考えることができる。

二七三 諸て、進表①の使臣、五日外に職に還らず、故に托して稽留し、他に營有る者、給驛する所を止め、その姓を籍し、これを罷黜す。

(1) 進表は、五品以上の衙門が年賀・聖壽奉祝の表章をたてまつる禮式。一一六條も參照。

(2) 特に地方から上京する進表の使者が、その機會に國都で營利行為を働くことが問題となる。『元典章』卷二十八、進表、各衙門進賀表箋にも至大四年五月十二日、特奉聖旨、隨處進表來的、五日以裏、都教回去者。とある。

二七四 諸て、郡國①に出使すれば、使事の外、與あづかる所有る母れ。必

ず須らく上聞すべき者有れば、實封して以聞せよ。

- (1) 郡邑、州郡、郡國、郡縣等、同じ方向の文言が、あまり嚴密に意識されずに使われているように見える。強いていえば、郡は府州、邑は縣の雅名、郡國の國はあるいは投下を心においているかも知れぬ。

- (2) 『元典章』卷五十三、聽訟、出使人不得接詞訟には、その具體的事例が述べられている。

二七五 諸て、命を銜^{みだり}け出使するに、輒^{みだり}に有司の刑囚を將^{みだり}て審斷する者は、これを罪す⁽¹⁾。

- (1) 前條とも關連する。特命で中央から派遣される使者が、直訴狀を受取ったり、未決の獄に容喙したりしがちであったことは、『元典章』卷五十三の聽訟からも十分うかがえる。

二七六 諸て、奉使にして郡縣を循行し、廉訪司官⁽¹⁾の不法を告す者有れば、若しその人、嘗^{なげ}て風憲のために罷黜^ひさるれば、則ち監察御史とこれを雜問^{まじ}す。餘は專問を聽^きす。

- (1) 肅政廉訪司は、至元二十八年、提刑按察司が改められた官署。内道八、江南十、陝西四の全國二十二道に置かれ、司法と勸農行政を擔當する地方最高官廳の一つ。御史臺によって統轄される。その長官は蒙古人。

- (2) 本條の使臣は前條と異り、地方の特別査察を主務としている。雜問は參問などと同じく、共同での取調べ、その對語が專問であろう。

二七七 諸て、官・吏公差⁽¹⁾され、輒^{みだり}に人の驢行・禮物を受くる者は、事に隨いて罪を論ず。官は職に還し、吏は隣道に發して貼補⁽²⁾す。

- (1) 『明律國字解』は「朝廷の官府より、使に出る人なり」「おおよけの使者なり」などと説明する。すでに職務を持ちながら、特命で出使する時の規定。

- (2) 貼補の語は宋代からみられ、正規の額數の他に、エキストラとして補足、補充する意味に使う。隣道は廉訪司の道か。

二七八 諸て、捕盜には、境内若し盜賊を失過し、却りて他境の盜賊を獲れば、功過をして相い補⁽¹⁾わしむるを許す。如し、他境の盜賊⁽²⁾、或は寶鈔を偽造するもの二起を獲れば、各々境内の強盜一起に准⁽³⁾ず。強⁽⁴⁾〔盜〕無き者は竊盜二起に准⁽³⁾ず。如し竊盜を獲れば、准⁽³⁾ずることも亦たかくのごとくす。如し境内に失無く、但だ強・竊の盜賊を獲れば、例に依りて賞を理⁽⁵⁾る。若し、應⁽⁶⁾に捕⁽⁷⁾うべきの人、及び事主等、告指・捕獲する者は賞せず。

- (1) 『元典章』卷五十一、獲盜の獲賊給賞等第、捕獲強竊盜賊功過が本條と密にかかわる。

(2) 注1の『元典章』では強盜とあり、その方によるべきである。
う。

(3) これも『元典章』では本境内と本の一字が加わり、より明晰である。なお下文の「境内に失無く」もまた「本境内に別に失過の起數無く」と丁寧である。

(4) ここは『元典章』により、盜の一字を補うべきである。

(5) 『元典章』は、如し竊盜二起を獲れば亦た竊盜一起に准ずとする。

(6) 『元典章』は「上に依りて」に作る。

(7) 以下の部分は、前掲注1の獲賊給賞等第には次のように記されている。若應捕人員、承准事主及諸人告指捉獲、不在除准理賞之限。これによれば、應捕人員が自力で盜賊を捕えなかった場合は理賞にあらずからぬという意味となる。ただ、『元典章』卷五十一、獲盜の事主獲賊無賞や事主獲盜官收賞錢によれば、事主本人の告發・獲賊は理賞の対象になっておらぬから、本條のように及びでつないで理解することも不可能ではない。なお、應捕人は、捕盜官と區別され、具體的には弓兵、弓手を指す。

【解説】 以下十六條は、主として捕盜に關係した官員について、その場合に應じた賞罰を規定しており、おおむねが元代の實情に則した具體的な内容を持つ。これまた視點が職制にあることは言う迄もなからう。

二七九 諸て、捕盜官は差遣するを得ず。違ひし者は、臺憲官これを糾す。^①

(1) 『元典章』卷五十一、捕盜、縣尉巡檢巡捕が關係する。ここでは差遣が別行差占となつてゐる。なお、捕盜官は『吏學指南』では、「失盜の去處の當該之官を謂うなり」と定義する。普通には、城内とその隣接地を擔當する縣尉と、農村や廣域を管轄する巡檢の二者を指す。

二八〇 諸て、捕盜官、任内に盜賊を失過すれば、別境の盜賊を獲て準折するを除くの外、三限^①にして獲ざるもの、強盜三起・竊盜五起は各々答一十七、強盜五起・竊盜十起は各々答二十七、強盜十起・竊盜十五起は各々答三十七。鎮守の軍官にして捕限を一體にする者は同罪。^②親民の提控捕盜官は罪二等を減ず。その限内に賊を獲ることを半に及ぶ者は罪を免ず。^③若し、諸人、盜を獲て應に賞すべき者は、これを賞す。^④

【解説】 本條については、最初に若干説明を要すると思われる。『元典章』卷四十九、強竊盜にのせる強竊盜賊通例には、その最後に以下のような條項がある。諸失過強竊盜賊、違限不獲、當該捕盜官兵、並依已行斷例決罰。(割注)「弓兵一月不獲、強盜決一十七下、竊盜七下、兩月不獲、強盜再決二十七下、竊盜一十七下、三月不獲、強盜再決三十七下、竊盜二十七下。捕盜官、強盜罰俸兩月、竊盜罰俸

一月、限内獲賊及半、免罪。」其捕盜官任滿、通行照勘、如不獲強盜三起・竊盜五起、各添一資歷、不獲強盜五起、竊盜十起、各降一等(下略)。應捕人すなわち直接捕盜に攜る弓手と、それを監督する捕盜官で、罰則に區別があり、大體この線で責罰が行われていたことは、『元典章』卷五一の捕盜の表や、失盜の失過盜賊責罰以下の各條によって明らかである。ところが本條は捕盜官に弓手と同じような答刑を科している點で注意を惹く。これは『元典章』卷五十一、失盜的決不罰俸でみると、延祐四年以後のことであるらしい。なお、捕限と捕亡に關しては『唐律疏議』四四六條、捕亡律十六條、『大明律』四一八條、盜賊捕限に原則的な規定がある。

(1) 捕盜の三限は、一箇月ごと全部で三限三箇月である。

(2) 路・府州に鎮守の軍官が駐在する場所では、捕盜に對して、彼らにも同じ責任が課せられた。『元典章』卷五十一、失盜、軍官捕盜責罰を參照。

(3) これは專職の捕盜官ではなく、親民官(知州・知縣等)が捕盜の職責に加わらされたものを指すと思われる。なお提控は提調と書かれる場合もあり、親民官と提調官の兩者が捕盜に攜わることも考える餘地がある。

(4) 本條全體は『元典章』卷五十一、失盜の失盜的決不罰俸と同じ。

(5) 『元典章』卷五十一、獲盜、獲強竊盜給賞には、中統五年八月

に欽奉した聖旨條畫として、諸人告或捕獲強盜一名、賞鈔五十貫、竊盜一名二十五貫という數字をあげる。

二八一 諸て、南北兵馬司^①、職は非違を巡警し、盜賊を捕逐するに在り。輒に民の訟を理く者は、これを禁ず。

(1) 國都大都城内の軍事特別警察。『元史』卷九十、百官志六の大都路兵馬都指揮使司の項に、掌京城盜賊・姦偽鞠捕之事と見える。のち五城兵馬司に發展する。

二八二 諸て、南北兵馬司は、罪囚、八十七以下は決遣す。應に刺配すべき者は、就きてこれを刺配す^①。

(1) 『元典章』卷四十九、刺字、八刺哈赤人等作賊刺斷にその實例の一つが見える。

二八三 諸て、在城の錄事・錄判は、分番巡捕す。若し盜を失する有らば、止だ巡捕官を坐す^②。

(1) 錄事司は、路・府など重要な城市に置かれる元代特有の官署、錄事、判官(錄判)などの官がある。愛宕松男「元代の都市制度とその起源」(『東洋史研究』三十四、のち『愛宕松男全集』第四卷所收)

(2) 『元典章』卷五十一、捕盜、錄事司巡捕事。

【解説】 注2の『元典章』の説明では、録事司は捕盜を兼ねさせられるが、必ずしも明確な兼管の規定や定員枠があるわけではない。また録判だけにその責を負わせたり、盜賊失過で罰俸をくらののも好ましくない。そこで録事司官は巡捕はさせるが、失盜の時には本來の巡捕官である縣尉等を罪するというのが趣旨である。

二八四 諸て、職官、應に捕うべきの人に非ずして、反賊を告・獲する者は、二等を陞して用う。

(1) 應捕人は二七八條注7で述べたように通例は應捕官に對する語で弓兵を意味する。しかし、ここは、職官に限定して使っていると考えるべきで、捕盜の職務以外の官を指すとしておきたい。

(2) 反は十惡の筆頭の謀反。『吏學指南』は上に逆らうを反と曰うとする。反に代表される「大惡」の謂。

二八五 諸て、強盜を告・獲すれば、每名賞錢・至元鈔五十貫を官給す。竊盜は二十五貫、親ら獲する者はこれに倍す。強盜を獲ること五人に至らば、一官を與う。

(1) 『元典章』卷四十九、強竊盜、強竊盜賊通例の第十條。同卷五十一、獲盜、獲強竊盜給賞、同卷、放支捕盜賞錢など。

【解説】 本條は必ずしも職官を主たる對象にした條文ではなく、職

制に含まれることに抵抗を感じる。後半の一官を與えるという規定にひきずられてここに加えられたものか。

二八六 諸て、弑逆の兇徒を捕獲すれば、強盜を獲るに比して、賞を給す。

(1) これも十惡(大惡)の項に入れる方が適切かと思われる。なお、謀反の賊を告捕した例が、『元典章』卷五十一、獲盜の告捕謀反賞例に見える。この時の賞錢は一千貫と強盜の時より遙に多い。

二八七 諸て、隨處の鎮守の軍官・軍人、強・竊の盜賊を親ら獲する者は、半を減じて賞を給す。

(1) 『元典章』卷五十一、捕盜の軍民官一同巡禁の條に述べられているように、主要な城市で鎮守營軍衙門のある場所では、管軍官とその配下の軍人が警察業務を分擔していた。従って應捕人の獲盜と同様に一般人の半額の賞錢を出す必要があった。

二八八 諸て、都城にて盜を失し、一年獲ざる者は、巡軍に勅し、盜まるる所の財物を賠償せしむ。その敢て巡軍を差占するは、これを禁ず。

(1) 『元典章』卷五十一、失盜、巡軍捉賊不獲陪贖。ここでは、中

都應係失盜、依先帝聖旨體例、限一年、教巡軍每根尋賊人、一年不獲、只教巡軍陪償。とある。都城は中都すなわち現在の北京。

(2) 中都の巡軍、すなわち國都の特別警邏軍は、定額四百名、侍衛親軍の中から選出されていた。ところが注1の『元典章』によると、百八十六人が倉場局院の仕事にまわされ、盜賊捕獲が手薄になる。そこで、増員すると同時に、別の職務への差占を禁ずることになる。本條はそれらを機械的にまとめて作った一例である。

二八九 諸て、捕盜官、強・竊盜賊を捕獲し、即たちに牒發せず、淹禁②して死にせしむる者、杖七十七、職を罷めしむ。

(1) 『元典章』卷五十一、獲盜、獲賊隨時解縣や、獲賊略問即解が關連する。

(2) 『明律國字解』卷十では「久しく牢舎すること」という。なお牒發の牒は官文書のいわば總稱で、犯人を正式の書類とともに解發①（おくりとどける）する意。

二九〇 諸て、牛馬を盜み、過を悔いて放還せし者は、竊盜已に行なうも財を得ざるを以て論ず。①倍贓の償錢を徵さず。②有司輒みだりに常盜を以て刺斷せし者、刑名違錯を以て科罰す。

(1) 『唐律疏議』賊盜律でも『大明律』にあっても、竊盜已行而不得財は答五十の軽い刑罰である。

(2) 本刑法志の第三、盜賊の項にみえる通り、モンゴル時代は、駱駝・馬・牛・驢・騾を盜めば、一頭につき九頭賠償する規定だった。

(3) 『唐律疏議』賊盜律、二七九條では盜馬牛は徒二年半。元に於いては、怯烈司の裏うちと常盜で若干違い、常盜は從犯で徒三年、首犯は初犯で出軍という重刑。明代は計贓、竊盜を以て論ずと著しく輕減されている。

(4) 刑名違錯は、文卷、文書の書寫などの過程で生ずる罪狀・刑罰の書き誤まりの罪。出入人罪より遙に軽い處分で済む。

【解説】 本條も全體の流れの中では、唐突な感じがする。牛馬竊盜の悔過よりも、有司の處分に主眼がおかれたためここに挿入されているのか。

二九一 諸て、捕盜官、輒みだりに人の遞至せる匿名の文字を受け、平人を枉勘して盜と爲し、獄中に囚死するを致せし者は、杖九十七、職を罷めて敘せず。正問官は六十七、先職より二等を降して敘す。首領官は答四十七、邊遠の一任に注す。承吏は杖六十七、罷役して敘せず。主意して匿名の文書を寫しるせし者は、杖一百七、遠きに流す。③匿名の文書を遞送せし者は二等を減ず。命を受け遞送を主

事せし者は三等を減ず。

(1) 『大明律』名例、二十七條の同僚犯公罪などでは、長官・佐貳官、首領官、吏典の四ランクが作られ、刑罰が段階的に増減されている。これは『唐律』の長官・通判官、判官・主典に對應することはいうまでもないが、本條は、兩者ほど整合的になつてはいない。なお徂徠は首領官を「長官・佐貳官の下知を受けて、帳面等の事を手にかけて取扱う官」と説明している。

(2) 承行吏人の略。事件を擔當した胥吏。

(3) 杖一百七、流遠は、元代では遼陽や奴兒干の地に流すこと。

【解説】 元代の法規の性格がうかがえる一條のように思う。匿名文字に對しては『唐律』鬪訟律以來、嚴しい規定がある。本條は、匿名文字の犯罪そのものは問題外に措き、それを取上げて、無實の者を獄死させた官員の責任者と犯人の刑罰と處分を主眼としてある。但しそこには、『唐律』の除名、免官、免所居官といった段階規定や、注1でふれたような官吏の序列とそれに伴う刑罰の整合性はほとんど見られない。

二九二 諸て、捕盜官、逆賊を搜捕するに、輒に平人を將つて蹤跡を審問し、怒に乗じてこれを毆り、致死に邂逅せし者、杖六十七。職を解きて別敘し、過を記す。燒埋銀を徴して苦主に給す。

(1) 邂逅致死は『唐律』以來の固定した用法で、めぐりあわせで

死んでしまったの意味。

(2) 燒埋銀は元朝にはじまる制度で、殺人の場合、加害者から一定額（銀五十兩が原則）を徴收し、被害者の家屬に營葬の費として支給する。明清時代には埋葬銀と名をかえて繼承される。

内田智雄「燒埋銀と埋葬銀―元、明、清刑罰史の一側面―」『同志社法學』三九卷三・四、一九八七はその專論である。

【解説】 逆賊すなわち十惡の重罪取調べという前提があるにせよ、捕盜官の處分は軽い。因みに『明律』なら、これは四二〇條の故禁故勘平人に該當し、絞罪に當る。ここは、捕盜官の流れで職制に入っているが、軍官の場合の類似の條文は、刑法四の殺傷に見え、捕盜官より二等罪が重くなっている。

二九三 諸て、捕盜官、財を受け、故らに賊囚を放ちし者は、犯人と同罪を與う。已に敗獲せる者は、徒・杖、並びに一等を減ず。

(1) 『明律』四二一條の應捕人追捕罪人でも、受財故縱者、不給捕限、各與囚同罪とある。

(2) 敗獲はしくじりつかまる意。逃げた犯人がすでに逮捕された場合を指す。

二九四 諸て、父罪有るも、その子を坐せず。兄罪有るも、弟を坐せず。

【解説】 この判じ物のような一條は、どうした前提条件のもとでそれが適用されるのか明確でない。まして、職制とどうかかわるのかに至っては見當がつかぬ。

二九五 諸て、大宗正府^①、人命の重事を理斷するに、必ず漢字を以て案牘を立て、公文を以て憲臺に移し、然る後、監察御史これを審覆す^②。

(1) 蒙古人を筆頭に、漢人まで含めた司法事件を總括する從一品の重要官廳。四十人以上の札魯忽赤^{ジャルクグチ}(斷事官)がいる。五八條注4を參照。

(2) 『元典章』卷三十九、刑名、審復蒙古重刑に、照得、先爲本臺(御史臺)呈、奏奉聖旨、節該、也可札魯忽赤重罪過的人、取了蒙古狀子、也立着漢兒案卷與文字、交監察每、審覆、欽此。と見える。モンゴル高級幹部内だけで、殺人事件を處理せず、中國人のいる憲臺にも事情が判るように正式に漢字で審覆のための書類を送るための規定。

【解説】 以下三十條餘りは、斷獄(鞠獄)關係の條文が集められている。内容は雑多であるが、かなり具體的で、官側の違法の處罰、禁令や心得を説くものが大部分を占める。

二九六 諸て、有司、非法に刑を用うる者は、重くこれを罪す。已

に殺せし人、輒^{みだり}にその肉を齧割^①して去る者、これを禁ず。違ひし者は重くこれを罪す。

(1) すでに公開處刑された重罪人の肉を裂き、喰い切つて散らすことが、往々にして行われる。

二九七 諸て、鞠獄に、その心を正し、その氣を和^{やわら}げ、これを感じしむるに誠を以てし、これを動かすに情を以てし、これを推^{きわ}るに理を以てすること能わ^②ず、輒^{みだり}に施すに大披挂^①、及び王侍郎の繩索、並びに法外の慘酷の刑を以てする者は、悉くこれを禁止す。

(1) 被疑者への拷問はさまざまの形で行われ、その實例は、『元典章』卷四十、刑獄に詳細に記述されている。大披挂は詳しくは判らぬが、『吏文正續輯覽』には、披着也、掛甲也とあるから、皮甲様のもので身體を包み重壓をかけることか。

(2) 『元典章』卷四十、刑獄、禁斷王侍郎繩索、王侍郎とは刑部侍郎だった王儀を指す。

二九八 諸て、罪囚を鞠問するに、朝省の委問する大獄を除くの外、寅夜に事を問うを得ず^②。廉訪司これを察せよ。

(1) 朝廷と中書等が命ずる特別裁判、詔獄はその代表である。

(2) 『元典章』卷四十、刑獄、禁治遊街等刑の中に、寅夜鞠問禁止

の文が見える。なお寅夜は眞夜中。

二九九 諸て、各路の推官は、専ら刑獄を推鞠し、冤滯を平反し、州縣刑名の事を董理するを掌る。^①その餘の庶務は、與る所有る母れ。按治官は歲ごとにその殿最を録し、秩滿つれば、その事を上りて、これを黜陟せしむ。^②凡そ推官、若し差を受けて、上司に聞せず、輒に職を離るる者も亦た罪に坐せしむ。^③

(1) 『元典章』卷四十、鞠獄、推官專管刑獄。

(2) 按治官は『元典章』臺綱によれば、巡按禁(整)治の略と考えられ、監察御史、按察使(廉訪司)を指す。前注の『元典章』には次のような一節が見える。其巡按官取具平反冤抑在禁淹延輕重起數、行移本路、候推官任滿、解由内開寫、以憑考其殿最、約量陞降。

(3) 注1と同じ『元典章』、若推官承差、不即申上、輒離本職者、亦行治罪。

三〇〇 諸て、重囚の處斷は、叛逆といえども、必ず臺憲をして審録せしめ、しかる後市曹に於て斬す。^③

(1) 『元典章』卷四十、斷獄の重刑結案が内容的に關連する。

(2) 『吏學指南』の、審は是非を詳考すること、録は、音慮、思也、疑也、審其冤滯也という説明が妥當であらう。

(3) 『吏文正續輯覽』は、處決罪人之處という。『元典章』卷四十二、故殺、倚勢抹死縣尹にも、將各人、押赴市曹、明正典刑詔の一文が見える。

三〇一 諸て、内外の囚禁は、各路の正官及び監察御史、廉訪司より、時を以て審録す。^①輕き者は斷遣し、重き者は結案す。^③その冤滯有れば、就きてこれを糾察せしむ。

(1) 『元典章』卷四十、斷獄、重刑結案が關係する。

(2) 斷遣は斷罪決遣、罪過と刑罰を決め、判決を下し、刑罰を實施する。

(3) 『元典章』卷五十一、失盜の失盜的決不罰俸に、即將見禁輕重罪囚、疾早審録、疎決者劃即決放、合結案者、着緊追勘完備、擬罪結解、毋致淹留枉禁。と、本條の理解に役立つ一節が見える。『福惠全書語彙解』では「らくちやくのめやす」とうまく解釋している。一件落着することなく、その方向の手續をとる意。

三〇二 諸て、正蒙古人、死罪を犯すを除き、監禁は常法に依る。^②

有司、拷掠するを得る母れ。仍お日々に飲食を給す。眞に姦盜を犯す者は束帶・佩囊を解きて散收す。^③餘の輕重を犯す者は、理を以て對證し、有司これを執拘する勿れ。逃逸せし者は監收す。

(1) 『元典章』卷三十九、刑名、蒙古人犯罪散收が主として関連し、一部、同巻の審覆蒙古重刑が参考になる。

(2) 前注によれば、死罪は監房收禁とされる。

(3) 注1の『元典章』では、犯人繫腰の合鉢とする。

(4) 散收は獨房で、刑具などもつけず留置すること、監囚の對語として使用。

【解説】 本條は正蒙古人の犯罪者が鞠獄に際して受ける特典を記す。死罪に相當する姦盜などの重罪を除き、獄具着用を免除され、また、訊問も、普通の地方官だけで擔當できず、達魯花赤はじめ、蒙古人の官員の存在が必要であった。

三〇三 諸て、天下の囚を奏決するに、上の怒れるに値わば、輒に奏する勿れ。上、誅する所有らんと欲せらるれば、必ず一、二日を遅回して、乃ち覆奏せよ。

【解説】 この條文などは、普通には成文法の一項とは言い難い。『元史』卷五、中統三年十一月乙巳の部分に、有旨、諭史天澤、朕或乘怒、欲有所誅殺、卿等宜遲留一二日、覆奏行之。とあるのがもとになっている。總序、第二段注3参照。

三〇四 諸て、有司、公に因り理に依り決罰し、身死に邂逅すれば、坐せず。^①

(1) 『唐律疏議』四七七條、斷獄律九、『大明律』四二〇條、故禁故勘平人の流れにある一條。

三〇五 諸て、過を疊ねて悔めざれば、年七十以上^①にして應に贖すべき者も、仍^なお等を減じて科決す。

(1) 元代にあつても、年七十以上、十五以下と、篤・廢疾で杖責に耐えない人たちは贖罪(答一が中統鈔一兩)が認められた。本刑法志第三十一條、『元典章』卷三十九、贖刑の各條などを參照。

【解説】 これなども疊過不悛の定義が當然別になければならず、現實に施行する場合には種々厄介な問題が生じよう。しかし、本當のところは、當該地方官や刑獄擔當者が、自由裁量で行ったと考えられる。科決は科罪決遣、ここでは答杖の實刑を施す意味。

三〇六 諸て、罪を犯し、二罪俱に發すれば、重き者を以て論じ^①、罪等しければ一に従う。もし一罪先に發し、已に論決を経、餘罪後發すれば、その輕き若しくは等しければ、論ずる勿れ。重き者は更めてこれを論じ、前罪と通計して、以て後の數に充つ。^②

(1) 『元典章』卷四十六、諸贓、諸犯二罪俱發、以重者論。本譯注九六條も關係する。

(2) 注1にその例を擧げる。甲が不枉法贓至元鈔二十貫を取得

し、四十七下に決せられ、見任を解き、別に求仕を行う處分を受けた。ところが後に至元鈔三十貫を貰ったことが明るみに出る。この罪は五十七下で邊遠一任に當る。そこで改めて一十七下に決せられ、邊遠一任を命ぜられることになる。これが前罪と通計して以って後の數に充つる意である。

【解説】二罪俱發は『唐律疏議』四十五條名例律にあり、滋賀氏も詳細に解説しておられる(『譯註』五、二七四頁)。「大明律」も第二十五條、名例律でそれを繼承するが、元ではこれを職制の中に紛れこませる恰好になっている。九六條を表照。

三〇七 諸て、職官、輒に微故を以て、怒りに乘じ、招詞を取らず人を斷決し、致死に邂逅し、また、苦主を誘いてその屍を焚瘞せし者は、笞五十七。職を解きて別敍し、過を記す。

【解説】この條は、二つの違法行為から成立している。そのいずれもが、『唐律』以來の原則に反する重犯であり、特に勝手に殺害した被疑者の屍體を燒却するとは中國人にとっては論外の行為である。それに對する處罰はむしろ輕い。恐らく非漢人の長官がかかる行為を實際に行つて、その處分が、そっくり一條として残ったもので、考慮の末の立法ではあるまい。

三〇八 諸て、鞠獄に、輒に私怨・暴怒を以て、衣を去り背を鞭

うつ者は、これを禁ず。

(1) 何時の時代でも、こうした記事に逢着するが、モンゴル・元の場合は、しばしば私怨、暴怒という感情的動機が加わるのが目につく。『元典章』卷四十、刑獄、罪人毋得鞭背にこの條文通りの一文が載せられている。

三〇九 諸て、囚徒を鞠問するに、重事にして須らく拷訊を加うべき者は、長貳・僚佐會議して立案し、然る後これを行う。違ひし者は重くその罪を加う。

(1) 『元典章』卷四十、鞠獄、鞠囚以理推尋。

【解説】自白が原則である舊中國の獄内訊問では、拷問がむしろ日常化しており、『元典章』刑部の刑獄や難犯に多くの事例が並べられている。『唐律疏議』四七六條、斷獄律八條では、先に情を以て辭理を審察し、反覆參驗し、猶お未だ能く決せず、事須らく訊問すべき者に限り、立案、同判してから拷訊すると決め、次條では拷囚は三度、訊杖は總計二百と制限している。『明律』もこうした原則は踏襲しているが、現實は慘酷を極める方が普通である。

三一〇 諸て、弓兵・祗候・獄卒、輒に罪囚を毆死せし者、首爲れば杖一百七、從爲れば一等を減ず。均しく燒埋銀を徴して苦主に給す。その枉死の、應に倍贖を徴すべき者は、徴を免す。

(1) 本條にそのまま對應する記事を『元典章』からは捜せなかった。弓兵・祇候・獄卒は、捕盜の弓手、雜務を受持つ胥吏の祇候、獄卒の禁子を指し、彼らが被疑者を横死させる事例は、『元典章』卷五十四、違枉の重杖打人致死や拷勘葉十身死をはじめ少からず見出せる。

(2) 地方官衙の雜役胥吏としての祇候の名は、宋代から知られる。『元典章』卷六十、祇候人には額設祇候人數なる一項があり、路府州縣の定額が禁子とともにあがっている。最大は上路三十五人、中州で十六名、中縣で十名といったところ。

(3) 倍贓は時に陪贓と間違われやすいが、本來一の盜みに對し、二を取償すること。

三二一 諸て、有司、輒に無罪の人を收禁する者、正官は並に答一十七、過を記す。招無くして枉禁し、自縊して死を致さしむる者は、答三十七。期年の後、敘す。

(1) 自白の言葉なくして、の意。

(2) 『元典章』卷五十四、違枉、枉禁輕生自縊に、同じような狀況の實例がある。但し、卷五十四の初めの官員の處罰の規定と本條は必ずしも一致していない。

三二二 諸て、有司、輒に辜を將つて枉禁し、瘐死せしむる者、職

を解き、先品より一等を降して敘す。

(1) 古く『漢書』宣帝紀に、今繫者或以掠辜若飢寒、瘐死獄中とあり、如淳は、律、囚以飢寒而死曰瘐と注するが、顏師古は、此言囚或以答掠及飢寒及疾病而死、如說非矣と言う。獄中死の意味。

【解説】この前後の條文は、微妙に内容を變えて列記されている。同じ枉禁致死でも、本條は、無辜の囚人が獄死したと述べるのみで、それが拷問の結果なのか、或は自縊なのか、理由を考慮していない。『元典章』卷五十四、違枉の枉勘部民致死は杖瘡がもとで死亡したケースだが、杖數などは當然違ふ。また主語も有司とあるだけで、次條のように、官吏のランクを區分していない。また解職、降先品一等も、普通に見られる解見任、期年後、降先職一等敘用と全く同じか違ふのか、敘述の差は時代によるのか等のことも注意する必要はあろう。

三二三 諸て、有司、盜を被ると告を承け、輒に警跡人を將つて、非理に枉勘し、身死せしめ、却つて正賊を獲し者、正問官は答五十七、職を解き、期年の後、先職より一等を降して敘す。首領官及び承吏、各五十七、役を罷めて敘せず、均しく燒埋銀を徴して苦主に給し、過名を通記す。

(1) 元代特有の制度で、強盜・竊盜はじめ、主として刺字された

者が充當され、その本籍地で犯罪の捜索、犯人の逮捕に協力させられた。岩村忍「元典章刑部の研究」二二頁以下参照（『東方學報』京都二十四）。

【解説】 捕盜の責限に迫られると、官司が無理に警跡人を犯人に仕立てることは安易で普通の方法だったろう。これには平人枉勘と若干の差異がつけられる。既出の二九一條と同じく、これも、正問、首領、承吏が出てくるが、刑罰は均一。正問官の處分は唐代の免所居官に相當する。

三二四 諸て、有司、財を受け、故らに正賊を縦^{はな}ち、罪に非ざるを誣執し、非法に拷訊し、妻子を連逮し、冤を銜みて獄に赴かしめ、事いまだ曉白ならざるに、身已に死に就かしむれば、正官は杖一百七、除名す。佐官は八十七、二等を降し、雜職もて敘す。仍^なお均しく燒埋銀を徴す。

【解説】 本條などは、ある事件の推移をそのまま法文化した代表的な一例とみることができる。こうした幾つかの條件を豫測して法文を作ることは困難であり、そこに「二罪俱發」のような條件が加わると、混亂を増すばかりだろう。杖百七下、除名という刑罰は、むろんかなり重いものである。この場合は前條とは前提條件が異なるから、正官、佐官の區別ができ差は二等とされている。これに近似した實例は、『元典章』卷五十五の縦囚や放賊に見ることができる。

三一五 諸て、有司、故らに人を罪に入れ、若しいまだ決せざる者、及び囚の自死する者は、入るる所の罪を以って、一等を減じて論ず。人を全罪に入れば、全罪を以って論じ、若しいまだ決放せざれば、仍^なお減等を以って論ず。

【解説】 本條は『唐律疏議』四八七條、斷獄律十九條と同じ趣旨を盛る文であり、當然乍ら『大明律』四三三條の官司出入人罪と同じ平面に立つ。關係する唐律の本文は、「諸官司入人罪者、若入全罪、以全罪論。（中略）若未決放、及放而還獲、若囚自死、各聽減一等」であり、それぞれに次の疏議がつく。「若入全罪、謂前人本無負犯、虛構成罪、還以虛構枉入、全罪科之」、「若未決放者、謂故入及失入死罪、及杖罪未決、其故出及失出死罪以下未放、及已放而更獲、若囚自死、但使囚使不問死由。各聽減一等、謂於故出入及失出入上、各聽減一等」。

三二六 諸て、故らに人の罪を出し、應に全科すべくして、未だ決放せざる者は、減等によりて論ず。仍を過を記す。

(1) 『唐律疏議』では前條解説と同じ部分に、「其出罪者、各如之」とある部分を詳しく言いかえている。出罪は、犯罪を犯した者を無罪として放出すること。

三二七 諸て、人の罪を失入する者は、三等を減ず、人の罪を失出

する者は五等を減ず。いまだ決放せざる者は、また一等を減ず。並びに過を記す。^①

(1) 前二條と同じ『唐律疏議』の一部を單獨條文としたもの。『唐律』は「即斷罪失於入者、各減三等、失於出者、各減五等、若未決放及放而還獲、若囚自死、各聽減」。『大明律』は前記の四三三條。失入失出は故人故出より遙に軽い處分。

三二八 諸て、有司、人の死罪を失出せし者は、笞五十七、職を解き、期年の後、先品より一等を降して敘す。^②過を記す。正犯人は追禁して結案せしむ。^③

(1) 『慶元條法事類』七十三の出入罪には、失入處罰に關しては詳細な規定がみえるが、失出はこの條と比較できる條文はない。

(2) この處分は三二二條と同じく唐律の免所居官に相當する。

(3) 結案は前掲三〇一條の注^③を參照。

三二九 諸て、有司、輒に革前の雜犯^①を將つて承問斷遣せし者は、故人を以つて論ず。^③

(1) 革前・革後とは、赦前・赦後のことだと但徠は説明している。

(2) 赦の有無にかかわらず、十惡や眞犯死罪は審問すべきである。その範疇に入らぬ一般的犯罪がこゝでいう雜犯。『大明律』

四四一條、赦前斷罪不當を參照。

(3) 『元典章』で實例を搜すと、卷五十四、違枉の枉勘死平民に、然此革前、即係故人入罪、擬合罷去不敘、相應。の句が見える。

三二〇 諸て、監臨仇を挟み、法に違ひ、監臨する所の職官を枉斷する者、罪に抵して敘せず。^①

(1) これも直接かわる事例を見出し得ないが、『元典章』卷四十八、雜例の羅織清廉官吏から、その背景を感じとれる氣がする。

三二一 諸て、審囚^①の官、強復自用し、輒に蒙古人を將つて刺字する者、杖七十七。除名す。已に刺せし字を將つてこれを去らしむ。^③

(1) 審斷罪囚の意。

(2) 自己の聰明を恃み、他の意見を容れず勝手に物事を處理する。

(3) 『元典章』卷四十九、強竊盜、強竊盜賊通例の第五條。其蒙古人有犯、及婦人犯者、不在刺字之例。

三二三 諸て、盜を爲さば、並びに有司より歸問す。各投下、輒に斷遣する者は、罪に坐す。^①

【解説】 モンゴル—元朝治下の中國では、モンゴル、色目人、女眞等人など漢人・南人より優位の人種が刑法上も特權を保持し、また

それを繼續しようとした。一方、諸王、公主、駙馬などモンゴル特權階級の領地、投下領内で起った事件は、なるべくその範圍内で、たとえば投下の頭目の裁量で結着がはかられ、法規上きめられてゐる「約會」なども文字通りは實行されにくかった。元朝は方向としては、こうした投下の特權を縮少しようと努力していた。『元典章』卷五十一、獲盜、獲賊分付民官などを見よ。なおここでいう「有司」はほぼ一般路府州の管民官を指す。

三三三 諸て、鬪毆して人を殺さば、輕重なく、並びに結案し、省部に上^{のほ}せて詳讞^①せしむ。有司、輒^{みだ}に情に任せて擅斷する者は、笞五十七、職を解き、期年の後、先品より一等を降して敘す。

(1) 『吏學指南』では、推究曰詳、評議曰讞、凡諸獄疑者、雖文致於法、而人心不厭、必須申詳議其罪者という。

(2) 結案、詳讞の具體的やり方、問題點については、『元典章』卷四十、斷獄の重刑結案が參考になる。

三三四 諸て、禁囚に、械桎嚴ならざるに因り、反獄^①を致す者、直^{ちやう}日の押獄は杖九十七、獄卒は各々七十七、司獄及び提牢の官、皆罪^②に坐せしむ。百日内に全獲する者は、坐^ませず。

(1) 反獄を徂徠は『明律』によって、番人を殺めて逃去すると解する。但し、『元典章』の用例を見る限りでは單なる脱獄も反獄

といっているように思われる。

(2) 脱獄については『唐律疏議』四六五條と四六六條の捕亡律に基本が載っている。『大明律』四二三條、獄囚脱監及反獄在逃、四一六條、主守不覺失囚もこれをふまえる。元代の例としては、『元典章』卷五十五、縱囚、禁子受錢囚在逃が適當か。

(3) 『元典章』卷五十五、脱囚、脱囚監守罪例によると、強盜の劫獄で、押獄杖七十七、牢子六十七、司獄四十七、提牢（提調）官罰俸兩月とあつて少し輕い。こうした點からいうと、反獄はやはり人を殺して脱獄する意か。なお提牢官を『明律國字解』では、獄の總奉行なりという。

三三五 諸て、罪、大惡^①に在り、官吏贓を受け、縦に私和せしむ者は、これを罷む。

(1) 大惡は刑法志三に項目のある十惡相當の大罪。

三三六 諸て、司獄財を受け、犯姦の囚人を縱^ほいままにし、禁に在りて枷を疎にし、酒を飲ましむる者、枉法^①を以つて罪を科し、除名す。

(1) 『元典章』卷四十、提牢、禁約獄内無得飲酒には、この條の具體的な事例が描寫されている。

三二七 諸て、流囚^①、(1)強盜、仗を持すも曾って人を傷けず、但だ財を得るもの、(2)若しくは、財を得ること二十貫に至るも、從爲^③り、(3)仗を持さず、曾って人を傷けず、財を得ること四十貫にし^④て、從爲り、(4)及び、竊盜、車を割き、房を剋り、事主を傷くるも、從爲り、(5)曾って事主を傷けず、但だ、曾って財を得るもの、(6)曾って財を得ざるも、内舊賊有^⑦り、(7)初めて怯烈司を犯し、駝馬牛を盗みて、從爲り、(8)良人を略賣して奴婢と爲すこと一人、(9)都省・行省の印を詐離し、省官の押字を奪畫して、錢糧を動支し、選法を干礙す、(10)或は、妖言を妄造して上を犯すもの、並びに杖一百七、奴兒干に流す。(11)初犯にして、駝馬牛を盗み、首爲^⑬り、(12)及び、財三百貫以上を盗み、(13)財十貫以上を盗み、斷を経て再犯し、(14)塚を發し、棺を開け屍を傷け、内應に流すべきもの、(15)寶鈔を挑剋裨湊し、眞を以て偽と作すこと再犯、(16)情を知り、偽鈔を買使用すること三犯、並びに杖一百七、肇州に發して屯種せしむ。

【解説】 本條もはじめに若干説明を加えるのが適切であろう。全體は、流囚（遠流）として、杖百七下を加えて、奴兒干もしくは肇州に送る犯罪の箇條書きであり、官員の記憶メモのような形式で、必ずしも法文とはいひ難い。ここでは讀者の便宜のために、それらを十六條に區分して番號をつけた。十條までは奴兒干、以下は肇州に流罪となる犯罪である。各犯罪の大部分は『元典章』などに見える

から、以下それを注で記す。

(1) 本條の各項目は、その大部分が『元典章』新集刑部の奴兒干出軍と肇州屯種に箇條書きにされている。また、同書卷四十九の強竊盜、處斷盜賊斷例にも、關係する記事が含まれている。

(2) 注1の『元典章』卷四十九（以下同様）。強盜持仗（中略）不曾傷人（中略）但得財、斷一百七、交出軍。

(3) 得財（中略）至二十貫、爲從的、一百七、教出軍。

(4) 不持仗（中略）不曾傷人（中略）至四十貫（中略）餘人斷一百七、出軍。

(4 a) この竊盜の二字は竄入かと思われる。(4)以下も當然、強盜の範疇に入る。

(5) 注1の『元典章』豁車子・剋房子的賊每、傷事主的（中略）、從的、斷一百七、出軍。

(6) 不曾傷事主、但得財、皆斷一百七、出軍。

(7) 注6に續き、不曾得財（中略）爲從的（中略）於內有舊賊呵、出軍。

(8) 又初犯、怯烈司裏、偷盜駝馬牛賊每、（中略）爲從的、斷一百七、出軍。なお怯烈司は『元典章』にも數箇處みえ、禁苑の繫馬の所。『元史』は禁獵馬とする。

(9) これ以後は強竊盜と別のカテゴリの流罪が加わる。『元典章』卷五十七、禁誘略、略賣良人新例。大德八年（中略）今後、

諸掠賣良人、爲奴婢者、一人斷一百七、流遠。

- (10) これは、詐僞律の僞造印信に相當し、絞罪にあたる重い罪犯である。『元典章』卷五十二、詐、詐雕省印と詐僞印信に若干かわりのある記述が見られる。

- (11) これも賊盜律の造妖書妖言にあたる重罪で、本來の刑罰は斬である。

- (12) 黑龍江最下流、Tjuriの地。當時としても最果ての場所である。明代に奴兒干都司が置かれたことでも知られる。因に閒宮海峽は奴兒干海峽という。箭内互「滿州に於ける元の疆域」(『滿州歴史地理』二)。

- (13) 注1の『元典章』又初犯偷盜駝馬牛賊每、爲首的、斷一百七、出軍。

- (14) 又偷財物賊人、三百貫以上者、斷一百七、出軍。

- (15) 經斷放偷盜十貫以下の、再做賊呵、爲首、出軍。

- (16) これは『唐律』以來、律に詳細な刑罰規定がある。『大明律』は二九九條の發塚。そこでは開棺槨見屍は絞罪となっている。

『元典章』では卷五十、發塚にいくつか事例があがっている。

- (17) 『元典章』卷二十、挑鈔、挑鈔窩主罪名。又一款、挑剗裨湊寶鈔、以眞作僞者(中略)再犯、斷罪流遠。いうまでもなくこれは變造紙幣。『大明律』三八二條、僞造寶鈔では杖一百、流三千里とする。

- (18) 『元典章』卷二十、住罷銀鈔銅錢、使中統鈔。一、買使僞鈔者、

初犯杖一百七下、再犯、斷罪、加徒一年、三犯、依上科斷、遠流。

- (19) 肇州は、現在のハルピンの東、吉林省扶餘縣(伯都納)の南の地方、のちの建州女直の北西にある。注12箭内論文參看。

三三八 諸て、罪を犯して遠きに流され、逃歸し、再獲さるれば、仍りて流す⁽¹⁾。若し中路にて、亂に遭いて逃れ、再犯せず、及び已に老病なるもの、並びに赦に會う者は、これを釋す。

- (1) これは『大明律』四一四條の徒流人逃の枠内に入る條文である。仍流は元通りの形で流遠にする意。中路云々は流遠の場所に護送する道中のこと。

- (2) 流囚と赦との關係は、『元典章』卷四十九、流囚釋放通例で觸れられている。

三三九 諸て、流囚、居役するに、元正・寒食・重午等の節に遇うにあらずれば、並びに假を給するなかれ。

- (1) 居役は唐代以後にいう居作と同じ。普通には徒囚がこれに充てられる。元代の具體的形態としては、煉瓦作り等の密務勞働や、鹽場に於ける集團勞働が代表的なもので、強盜犯で徒刑に充てられた者は帶鐐居役し、日限が満つると警跡人とされる

『元典章』卷四十九、強竊盜、流遠出軍地面。

- (2) こうした休日に関しては、南宋の『慶元條法事類』十一の給假、假寧格に詳細な規定がみられる。元のそれは『事林廣記』壬集のひく「至元雜令」を参照。元正（年頭）は五日、冬至より數え一〇五日目の寒食は三日、重午即ち五月五日は一日である。ちなみに當時の休暇の數は我々が漠然と想像しているよりも多い。

三三〇 諸て、配役の囚徒にして、閏月に遇わば、これを通理す。^①

- (1) 『元典章』卷四十九、流配、配役遇閏推算、に説明がある。前條の居役などで期限二年と決められている時、閏月が入り十三箇月一年というケースが生じる。そこで二年なら二十四箇月で合計計算する意。

三三一 諸て、應に徒・流すべきに、未だ行かずして赦に會う者は、これを釋す。已に行き、いまだ至らずして、赦に會う者もまたこれを釋す。^①

- (1) この條文も『唐律』（名例律二十五條）、『明律』（十七條、徒流人在道會赦）と關係する。ただ、律では、行程・日限などこまかな規定が存在するのに、本條は概括的である。『元典章』卷四十九、流配、流囚釋放通例に關連記事がみられる。

三三二 諸て、囚徒、配役され、役する所停罷せし者は、赦に會わば、免放す。^①

- (1) 『元典章』卷四十九、強竊盜、強竊盜賊通例の七條、徒罪（中略）皆先決、然後發遣合屬、帶錄居役（雙行注。應配役人、逐有金銀銅冶・屯田・堤岸・橋道一切工役居處、聽就工作、令人監視、日計工程、滿日疎放、充警迹人。なお三二九條注1を參照。從つて役所すなわち工役の所が停罷されるケースもしばしば起り得る。

三三三 諸て、罪有り、旨を奉じて遠きに流さるれば、赦に會うといえども、奏請あらざれば、放還せしむるを得ず。

三三四 諸て、徒罪、晝はすなわち帶錄居役し、夜は則ち牢房に入囚す。その流罪、各處の屯種に發する者は、止だ監臨をして屯種を關防せしむ。^②

- (1) 三二九條の注1參照。

(2) この屯種はたとえば肇州の屯田萬戶府に於ける流囚の屯田を指し、その長官責任者が監臨ということになる。

三三五 諸て、流遠の囚徒、惟だ女直・高麗二族は湖廣に流し、餘は並びに奴兒干、及び海青を取るの地に流す。

【解説】 流遠の場合、女直、高麗は、北滿洲の地は故郷に近く、効果が薄いので湖廣ということになる。高麗人を湖廣に流す早い例は大徳年間に見えるが、この頃は漢人の流遠地はまだ遼寧であった。やがて肇州、奴兒干と極端に邊境に流すように變つてゆく。本條の海青を取るの地は、いうまでもなく女直族の發祥地に近い肇州を指す。

三三六 諸て、徒罪、配役の所無き者は、鹽司に發して居役せしむ。^①

(1) 通例、鹽の密賣犯で徒罪の者は、鹽運司に配隸されて鹽場その他の勞役に當るが、三三三條注1に見られる他の場所の配役者も、鹽司に配置されるケースが少くなかった。『元典章』卷十二、恢辦課程條畫などを参照。

三三七 諸て、主守^①、失囚する者、囚の罪より三等を減ず。流囚を長押するの官、中路にて失囚する者、提牢の官に視え、主守の罪より四等を減ず。既に斷ずれば職に還す。^②

(1) 『唐律』の名例律で、監臨、主司の定義がされて以來、それが繼承されるが、元、明では主守と變る。『大明律』四十二條、稱監臨主守ではいわゆる擔當胥吏として、その具體例を擧げる。ここである獄監の場合は禁子(獄子)が該當する。『吏學指南』では、躬親保典、謂之主守、雖職非統攝、臨時監主亦是とあり、

その後半部は、そのまま明律の條文となっている。

(2) 『元典章』卷五十五、縱囚、禁子受錢縱囚在逃の末尾に本條と同じ刑罰規定がみられる。

三三八 諸て、大小の刑獄、應に監禁すべきの人、並びに司獄司に送り、輕重を分ちて監收せしむ。^②

(1) 司獄については、岩村忍「元典章刑部の研究」(『東方學報』京都二十四)四七頁以下を参照。

(2) 『元典章』卷四十、繫獄、罪囚分別輕重が關連する。

三三九 諸て、刑獄を掌り、輒に囚徒を縱ま^{みだり}にして、禁に在りて飲博せしめ、及び刀刃・紙筆・陰陽文字を帶して禁に入る者はこれを罪す。^①

(1) 囚人に金刃を與えて脱獄や自殺を幫助することは『唐律』斷獄律以來、ずっと禁令があるが、本條はやや狀況を異にし、獄守側の行爲に對する禁令である。條文中の「禁」はいうまでもなく獄舍。

三四〇 諸て、獄具。(1)枷長さ五尺以上、六尺以下、闊さ一尺四寸以上、一尺六寸以下。死罪は重さ二十五斤、徒流は二十斤、杖罪は一十五斤、皆乾木を以てこれを爲り、長闊輕重、各々其の上

に刻誌す。(2) 杵長さ一尺六寸以上、二尾以下、横三寸、厚一寸。
 (3) 鎖長さ八尺以上、一丈二尺以下、鎖は連鎖、重さ三斤。(4) 笞は大頭徑二分七釐、小頭徑一分七釐、罪五十七以下にはこれを用う。
 (5) 杖は大頭徑三分二釐、小頭徑二分二釐、罪六十七以上にはこれを用う。(6) 訊杖大頭徑四分五釐、小頭徑三分五釐、長さ三尺五寸、並に節目を刊削し、筋膠諸物をして装釘せしむること無かれ。(7) 應に決すべき者は、並びに小頭を用う。(8) その笞及び杖に決する者は臂受し、拷訊する者は臂もしくは股もて分受し、務めて均停たらしむ。

(1) 本條は、これまでの職制の條文とは異質で、唐や明でいえる獄官令に含まれる、刑具の種類と制度が列擧される。『元典章』卷四十、刑獄冒頭の獄具の制の表をそのまま書き連ねた觀がある。なお、『事林廣記』が引く「至元雜令」にも相似た記述があるけれども、數字に若干の異同がある。『明令』七七條もほぼ同じ。

(2) 以下便宜的に各箇條に番號をつける。枷(首かせ)、杻(手かせ)、鎖(足くびの輪)等々、獄具のイメージについては、仁井田陞『中國法制史研究』刑法の第十四章、「中國の戯曲小説の挿畫と刑法史料」や、『三才圖會』器用、卷十三の圖を参照されたい。

三四一 諸て、郡縣の佐貳及び幕官は、月ごとに分番に提牢す。⁽¹⁾三日に一たび親臨點視し、その枉禁及び淹延ある者は、即ち擧問す。月終には則ち、囚數を具し、次官に牒す。⁽²⁾その上都に在るの囚禁は、留守司よりこれを提す。⁽³⁾

(1) 『元典章』卷四十、提牢、幕職分輪提控に同文がある。なお提牢は提控牢獄の略。

(2) 注1では、牒送下次官となっている。下次官という用例はあまり見えぬし、普通は以次官だけれども、ここは本條通り、長官につぐ次官としておく。

(3) 上都留守司は開平府(ドロン・ノール)の中心官廳、正二品の留司以下多くの官・吏が配置される(『元史』卷九十、百官志六)。

三四二 諸て、南北兵馬司、月ごとに、分番提牢す。仍お提控案牘をして、囚禁を兼掌せしむ。

(1) 本條は前條のいわば特例で、國都に於ける提牢の責任を規定している。兵馬司は二八一條注1に既出。至元十六年の時點では、南城三十二、北城一十七の分署があり、それぞれ千四百、七百九十五人の弓手を擁していた。

(2) 『元史』卷九十、百官志六の大都路兵馬都指揮使司には提控案牘一員が記されている。

三四三 諸て、鹽運司、鹽徒を監收し、月ごとに、佐貳官、分番・董視すること、有司と同じ。

(1) 鹽徒は私鹽の徒。逮捕され徒刑を受けると、彼らは鹽司の勞役に服する。ここでも有司は一般州縣官、管民官を指す。三四一條の特例である。

三四四 諸て内郡の官、雲南に仕うる者、罪有らば常律に依り、土官罪有らば、罰して廢せず。

【解説】 以下三條は、土官についての法規である。元代に至って、はじめて雲南あるいは廣西の奥地に、中國中央政府の觸手が直接のびた。この三條はそれを物語る。江南の特定地域を主たる對象とした『元典章』には、こうした記述がみられぬのは當然である。

三四五 諸て、左右兩江、^①部する所の土官、輒^{みだり}に兵興し相い讎殺する者、坐するに反逆の罪を以てす。その妄りに相い告言する者有らば、その罪を以てこれを罪す。有司、財を受け、妄りに聽^ゆす者は、枉法を以て論ず。

(1) 左江・右江は廣西省鬱江上流の少数民族居住地方。

三四六 諸て、土官、能く軍民を愛撫し、境內寧謐なる者は、三年一次、保勘して官を陞す。その勲勞有り、及び應^{まさ}に陞賞、承襲す

べきもの、文字、帥府に至るに、輒^{みだり}に非理に疏駁し、故らに難阻する者は、これを罷めしむ。

(1) ここでいう帥府は、たとえば廣西兩江道宣慰使司都元帥府といった役所を指すと思われる。

祭 令

【解説】 祭祀・祭禮に関する法規は、すでに唐代から、多く律令と分離されて、獨立して編纂されるのが普通である。本刑法志では僅か五條をこの「祭令」のカテゴリーに集めているが、中味は職制その他に入れられるもので、獨立させる必要性は稀薄に思える。

三四七 諸て、國家、郊・廟^①に事うる有らば、凡て獻官^②及び百執事の人、誓戒を受くるの後、散齋して正寢に於て宿し、祀所に於て致齋^③す。散齋の日は、事を治むること故^{もと}の如くするも、弔喪・問疾せず、樂を作さず、刑殺の文字に判署せず、罪人を決罰せず、穢惡の事に與^{あずか}らず。致齋の日は、惟だ祀事のみ行うを得、餘は悉くこれを禁ず。

(1) 郊廟の祀は、國家として最大の祀り、すなわち大祀に相當する。郊は天と地、廟は王朝の宗廟の祭り。

(2) 祭祀には、皇帝自ら、あるいは代理の高官が爵を獻ずる。大

祀は三回獻しなければならず、初獻・亞獻・終獻という。これを行なうのが獻官。

- (3) 『禮記』祭義「致齋於内、散齋於外、思其居處、思其笑語、思其志意、思其所樂、思其所嗜、齋三日、乃見其所爲齋者」、同祭統「散齋七日以定之、致齋三日以齊之」。唐の祀令（『唐令拾遺』二〇六）や律（『職制』九十九條）には、この條と關連した具体的な規定が定められている。『大明律』は一七六條、祭享を參照のこと。但し、唐ですでに郊廟の祭祀で、散齋四日、致齋三日になっている。日本語でいえばものいみ。

三四八 諸て、嶽鎮・名山、國家の秩祀する所、小民輒に禮を僭し、義を犯し、祈禱を以て褻瀆する者は、これを禁ず。

- (1) 五嶽・四瀆・五鎮を指す。五嶽は『周禮』『爾雅』などに見られるが、それが、皇帝の巡行の對象となり、ひいて大祀の對象とされたのは、漢代以後である。東嶽（泰山）、西嶽（華山）、北嶽（恒山）、南嶽（衡山）そして中嶽の嵩山。四瀆はこれも『爾雅』に見え、普通は發源から獨流して海に入る四つの大河を指す。黄河、長江、濟水、淮水。このほか名山としては、沂山、吳山、霍山、會稽山、醫無閭山などが挙げられる。

三四九 諸て、五嶽・四瀆・五鎮は、國家の秩祀常有り。諸王・公

- 主・駙馬、輒に人を遣して、降香・致祭する者は、これを禁ず。
(1) 『元史』卷十九、成宗大德元年六月甲午には、諸王也里干、遣使乘驛、祀五嶽四瀆、命追其驛券、仍責之。とあり、こうした禁令が必要であったことが首肯される。

- (2) 降香は本來はこれ焚いて神をくだす草の謂で、『本草』にも降真香がある。ここでは香を焚くこと。

三五〇 諸て、郡縣の宣聖廟、凡そ官員、使臣、軍馬、輒に敢て内に於て館穀し、有司、輒に敢て内に於て聽訟・宴飲し、工官、輒に敢て内に於て營造するは、並びにこれを禁ず。諸の書院も同じ。

- (1) 『元典章』卷三十一、儒學、禁治騷擾文廟。この命令は早く中統二年に出ている。宣聖廟は孔子廟。館穀は宿泊して食事をとること、『元典章』では安下となっている。『廟學典禮』卷二、文廟禁約搔擾。

三五一 諸て、月ごとの朔・望、郡縣の長吏その參佐・僚屬を率い、孔子廟に詣りて拜謁す。禮畢らば、學官を從え、講堂に升りて講説す。その鄉村、市鎮もまた、學問・德行有り、師長と爲すべき者を選び、農隙の時に於いて、以て民を教導せしむ。その視て迂緩と爲して、務めざる者有らば、これを糾す。

(1) 『元典章』卷三十一、儒學、朔望講經史例にほぼ同文が見える。

(2) 注1ではより丁寧に、長次以下正官、同首領官、率領僚屬吏員とある。

(3) 注1では、講議經史、更相接授。

(4) 『通例條格』卷五、學令の廟學。『廟學典禮』卷一、官吏詣廟學燒香講書。

學規

【解説】 この項目には學校の規則に關する條文が十三條掲げられている。こうした學校關係の法規は、宋代に著しく整備されており、『宋史』藝文志三などには『國子大學辟離小學敕令格式申明一時指揮目錄看詳』一百六十八冊、や、蔡京の『政和續編諸路州縣學敕令格式』十八卷などが載せられている。此處には恐らくそうした規定の中の極く一部の代表的、一般的なものだけが集められていると思われる。なお、本項の條文には『通制條格』の文章との同似が多い。岡本敬二「元史刑法志の系譜」(『元史刑法志の研究譯注』)参照。また、元代學校法規は『廟學典禮』がまとめた詳細な史料を提供してくれている。

三五二 諸て、蒙古・漢人國子監^①の學官は、任内に、その教養出格せる生員の多寡を驗べ、以て陞遷を爲す。博士・教授に闕有らば、監察御史よりこれを擧げ、その職に稱^{かな}わざる者は、これを黜^{しりぞ}く。坐^{つゐ}は元擧の官に及ぶ。

(1) 元代の國子監の官制は、『元史』卷八十七、百官三にあるが、その内容や制度の推移は、同卷八十一、選舉一、學校に記されている。

(2) 『元史』卷八十一、選舉一、學校には至元二十四年、立國子學、而定其制、設博士、通掌學事、分教三齋生員、講授經旨、是正音訓、上嚴教道之術、下考肄習之業、復設助教、同掌學事、而專守一齋、正・錄申明規矩、督習課業。とあって、南宋の制度をそのまま踏襲している。

(3) 『通制條格』卷五、廟學、皇慶二年六月の條。

(4) 保證して推薦した監察御史。『廟學典禮』卷二、儒職陞轉保舉後進例、參照。

三五三 諸て、國子生、師長を悖慢し、及び行禮、儀を失し、言行謹ならず、講誦熟さず、功課辦ぜず、故無くして學を廢し、故有るも告せずして輒^{みだり}に出で、告假限に違ひ、執事失悞し、忿戾鬪爭すれば、並びに正・錄に委ねて糾擧せしむ。師長を悖慢するは別に議するを除き、餘は戒諭す。再犯・三犯は、約量して責罰す。

その廚人・僕夫・門子は、常切に學に在りて使令に供給す。違ひし者は就便に決責す。

【解説】 以下四條は、國子監と一時的に設けられた奎章閣に關する條文であり、それらは全體から見れば、極く一部の法規にすぎぬであろう。ただ、その多くが『元典章』や『廟學典禮』には記載されていなのは當然であろう。

三五四 諸て、國學は首善の地に居る。六館の諸生、次を以て齋を陞す。或は等を躡^こゆる母れ。そのいまだ應^{まさ}に陞すべからずして陞を求め、及び曾て學規を犯す者は、輕き者はこれを降し、重き者はこれを黜く。その、これに教うるに道を以てせざる者は、監察御史これを糾せよ。

(1) 『漢書』儒林傳の、故教化之行也、建首善、自京師始。を出典とする。天下の模範の意味と同時に國都をも指す。

(2) 『元史』卷八十一、選舉志、學校にその名を擧げる。下兩齋は遊藝・依仁(誦書講說小學屬對)、中兩齋が據德・志道(四書と課肄詩律)、上兩齋が時習・日進(講說易書詩春秋・科習明經義等程文)。要するに初級から上級までの寄宿學棟で、毎季の考查により所屬が上下する。なお、宮崎市定「宋代の太學生生活」(『アジア史研究』第一、同全集十卷所收)を參看。

三五五 諸て、國子監、生員を私試・積分するに、その課業を事とせず、及び一切、規矩に違反する有らば、初犯は一分を罰し、再犯は二分を罰し、三犯は除名す。^①已に高等の生員に補せられ、その規矩に違反する有らば、初犯は試を殿^{おと}すこと一年、再犯は除名す。並びに、學正・錄より糾舉せしむ。正・錄知見して糾舉せざる者は、本監より罰を議す。在學の生員にして、歲終に、實歴の坐齋、半周歲に滿たざる者は、並びに除名す。^③月假を除くの外、その餘の告假は、準算を用いず。學正・錄、歲終に通じて考較を行ふ。漢人の生員、三年して一經に通じる能わず、及び篤勤を肯んぜざる者は、勒して學より出さしむ。

(1) 國子監を筆頭とする學校の生徒生員は、宋代の制度が基本的にはそのまま流用され、試験にさいなまれた。私試は、毎月一回の定期試験、この採點方法が「積分」と呼ばれる特殊な形態をとる。十二箇月全體のテスト中、八十點以上が八分(優)、六十點・六分が(平)となる。但し、各試験、答案そのものの出来ではなく、各科目受験者數の成績順に、十分・八分等が按分される。これが私試積分の謂。従つて以下の違法を犯せば、最初からハンディを何割かつつ負わされる。罰二分ならたとえ元の成績が八十點でも六十點に下げられる。

(2) これは、六齋が上級に陞っている生員を指すと思われる。

(3) 要するに出席日數である。この逆に二年皆出席、三年皆出席

は、貢舉などに特典が與えられた（『元史』卷八十一、選舉志、學校）。

【解説】 本條は南宋の國子監、學校制度と元代のそれを比較検討する際、参考になる重要な史料といえる。

三五六 諸て、奎章閣、授經郎の生員は、月の朔・望・上弦・下弦ごとに假四日^まを給す。當に宿衛に入るべき者は、假三日を給す。

餘の故有りて、須らく假を請うべき者は、授經郎より稟說し、曆に附して假を給す。故無くして學に入らざれば、第一次は當日の會食を罰し、第二次は師前の拜、及び當日の會食を罰し、第三次は學士院及び師席の前に於て、科及び當日の會食を罰す。三次して改めざれば、懲戒・黜退を奏聞す。

（1） 奎章閣は文宗の天曆二年から順帝の後至元六年まで、約十年開設けられた宮廷アカデミー。ここで『經世大典』が編纂された。『元史』卷八十八、百官四、奎章閣學士院にその組織と内容が記載され、授經郎二員も見えるが、それと生員、宿衛（怯薛）の關係は不明。

（2） 師長の前で謝罪し、會食から外されると解しておく。

三五七 諸て、隨路の學校は、その錢糧の多寡を計りて生徒を養育す。提調の正官は、時に一たび學に詣りて督視す。必ず課講をし

て程有り、訓迪をして法有り、勤を賞し惰を罰し、人材を作成せしむ。其の學政舉がらざる者は、これを究す。

（1） 提舉學校官は、最初は、路府州の長貳が兼任する場合が多かったが、のち各路に儒學提舉司が置かれる（『廟學典禮』卷一）。しかし、これにも種々問題があり、特に江南では文資正官が提調した。

三五八 諸て、教官、任に在りて錢糧を侵盜し、廟宇を荒廢し、教養實無く、行止臧からず、師席を忝す有らば、廉訪司よりこれを糾せしむ。任滿ち、有司、輒に朦朧として由を給する者は、これを究す。

（1） 『通制條格』卷五、學令、廟學の大德十年の中書省御史臺の呈文、その一。

（2） 學官は行政區劃のレベル、學校と書院によって人數などの差異はあるが、教授、齋長、山長、學錄、學正等の職名を有し、三十箇月一任で、こまかな遷轉規定があつた。當然一任ごとに勤務成績證明書（由）が給付される。詳細は『廟學典禮』の關係各條を参照。卷四の教官任滿給由などは本條とかかわる。

三五九 諸て、贍學の田土、學官・職吏、或は熟を賣きて荒と爲し、額を減じて租を收め、或は財を受け、縦に豪右をして占佃・陷

没・兼并せしめ、及び巧名もて冒支せる者は、提調官これを究む。

- (1) 三五八條の注1と同じ『通制條格』の第二項。そこには、諸處學田收租、各隨鄉土所宜、師儒俸廩、自有定例、學官職吏、減額收租、轉令僕佃、豪戶兼并、濫行支破等弊、令提調長官關防革去の文が附加されている。

- (2) 學校は、贍學の田土、いわゆる學田によって經濟的に維持されている。本條にみられるような問題は、宋代以後、慢性かつ普遍的に見られる。

三六〇 諸て、貧寒・老病の士、必ず衆の尊敬する所爲る者、保申し、本路體覆して異無ければ、本學に下して養贍せしむ。仍お、廉訪司に移してこれを察せしむ。但し冒濫有らば、提調官より改正せしむ。

- (1) 前條注1と同じ『通制條格』の第三項。ここでは、從學官、列名保舉、府州申縣申覆到路、體覆是實、發下本學とその順序が詳しく書かれている。

- (2) 『通制條格』は月支口糧養贍。

- (3) 『廟學典禮』卷五、行臺治書侍御史咨呈勉勵學校事宜の末尾にも、同じ趣旨が記されている。

三六一 諸て、各處の學校は、講習作養の地爲り。有司、輒にその

錢糧を侵借する者はこれを禁ず。教官、職に稱わざる者は、廉訪司これを糾せよ。

- (1) 學校の財政・學田等は獨立していて、一般行政官が介入すべきものでないが、現實には、しばしば紛争が起っている。この條は極めて大まかな原則を規定したもの。

三六二 諸て、任に在り、及び已に代りし教官、輒に家を攜えて學に入り、褻瀆居止する者、廉訪司よりこれを糾せしむ。

- (1) 三五八條注1の『通制條格』の第五項。家を攜えて云々が、將帶家小、公然占住。(家族ともども居坐つて動かぬ)とわかりやすい。

- (2) 本來は『易經』にも見える古い言葉。けがれる、輕んじ侮るなどの意。

三六三 諸て、各路醫學の大小生員もて、齋に坐して肄業せしめず、名有りて實無く、及び學に在りて訓誨法無く、課講鹵莽にして、苟めに故事に應ずる者は、教授・正・錄、提調官、罰俸差有り。

- (1) 『通制條格』卷二十一、醫藥の醫學、大德八年十月の記事。ここでは二項目の規定があり、違反した學官の處分も段階的に詳しく書かれている。本條はそれらを簡略に一括してしまったものの。『元典章』卷三十二、醫學、醫學官罰俸例にもこの原文があ

る。

(2) 苟苴因循して、これまでの前例を踏襲する意。

三六四 諸て、醫人、十三科^①の内に於て、一科にも精通する能わざる者は、醫を行うを得ず。太醫院^②、考試を精加せず、輒^{ゑざり}に私妄を以て、隨朝の大醫及び内外郡縣の醫官に擧充し、内外郡縣の醫學、法に依りて考試せず、輒^{はな}に人を縦ちて醫を行わしむる者、並びに監察御史・廉訪司よりこれを察せしむ。

(1) 元代の醫師の認定試験は最初十三科に分れていたが、大德九

年、次の十科に統合された。大方脈雜醫科、小方脈科、產科兼婦人雜病科、口齒兼咽喉科、風科、正骨兼金鏃科、眼科、瘡腫科、鍼灸科、祝由書禁科。この中で兼とある科が以前獨立した二科だったもの。『通制條格』卷二十一、醫學、科目、『元典章』卷三十二、醫學、醫考科目の條を參照。

(2) 太醫院は醫事・藥務を統轄する正二品の官署(『元史』卷八十八、百官四)。

(梅原 郁)